

平成十四年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九〇三号

川柳塔



日川協加盟

No. 903

八月号

第8回 川柳塔まつり

＜同人総会＞

と き 10月6日(日) 午前10時～11時

ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F生駒

(近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車・TEL06・6772・1441)

議 事 平成13年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成14年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

＜各賞表彰式・記念句会＞

と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会

ところ ホテル・アウィーナ大阪 4F金剛 中・西

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。

おはなし 「誤読もまた楽し」

兼 題 「のりもの」

(大 阪) 山 本 希久子 選

「光 る」

(富 山) 島 ひかる 選

「天 下」

(鳥 取) 西 原 艶 子 選

「おいしい」

(和歌山) 桜 井 千 秀 選

「雑 魚」

(広 島) 小 島 蘭 幸 選

「無 限」(事前投句・9月10日締切) 河 内 天 笑 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正午・午後4時半終了予定

会 費 2000円(記念品呈)当日いただきます

＜懇親宴＞

と き 同 日 午後5時～7時半

ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F葛城

会 費 7000円(会席料理)

宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8000円(朝食付)

○事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは本誌同封のハガキに明記の上、9月10日(火)までに本社事務所宛お願いします。

○懇親宴・宿泊のご送金(句会費をのぞく)は同封の払込用紙でお願い致します。

○記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人でも多くの方々の御参加をお待ち申し上げます。

主 催 川 柳 塔 社

夏から夏

河内天笑

わたしの川柳カレンダーは不思議にも夏を中心に回っています。その一例を紹介しますと、得意先の印刷関係の職場で発行する「エスエム川柳」（故榎本聡夢氏指導）に私の川柳第一作が載ったのが昭和四十三年七月号。

常識もミニスカートに寄り切られ

翌年六月に偶然駅まで乗せてあげた得意先の人、川柳塔社同人の故新谷笑痴さん。ちんちん電車の駅で降りて頂くはずが「この近所の錦縁会館で今から川柳の会に行くんや、一緒に行こう」と、無理やり連れて行かれたのが「若芽川柳会」。十四人の出席者は梶川雄次郎、中田たつお、故西村左久良、故清水白柳、故八木摩太郎、故高橋千万子（いずれも敬称略）などで、偉い人はかりとあとで知りました。私の川柳第二作が「背のびして祖父母の墓に水をかけ」で

した。清水白柳氏が「会長さんに雅号つけて貰いなはれ」と言われましたが、つけて貰うより自分でと思い、その夜「天笑」とつけました。そして堺の会や治安寺の本社句会へ行く内、川村好郎・新谷笑痴両名推薦で新同人・河内天笑と「川柳塔」で紹介されたのがこれまた昭和四十三年七月号。これら全てが七月号というのは単なる偶然だと思われませんが、今年七月三十一日の第二十回記念夜市川柳大会も、七月を軸に回転しながら今年二十一年度を迎え「夏から夏」への前進が続いています。

昨年七月七日、尾道市に路郎・霞乃両先生の比翼句碑が建立され、私達は大挙してこの地に集まりました。晴天に恵まれた除幕式の感動は今も忘れる事はありません。

このあつという間の一年を振り返りますと九月の同時多発テロとそれに続くブッシュ・アメリカの勢力を中心としたアフガン紛争。暗い中に十二月一日、皇太子ご夫妻に待望の内親王様ご誕生。明けて二月、冬期オリンピックがソルトレイクで、五月三十日から一ヶ月に亘りワールドカップに韓

も日も世界も湧き上りました。イチローが大リーグでMVPに輝いたのは「天晴れ」で、ワイロ・宗男が逮捕されたのは「喝」。そしてビンラディン氏は遂に捕まる事になった一年でありました。

「路郎忌」と「水府忌」の交流会も今年で二十四回目となりました。昭和五十三年十一月二十三日、高橋操子句集「千亀利」発刊記念句会のおとの小宴で、当時番傘川柳本社の句会部長をされていた中田たつお氏が、「毎年の路郎忌と水府忌を交流会会としてお互いにゲスト選者を招待し、双方より何人かの賛助出席者を得て交流を広めよう」と発案。翌十二月の川柳塔社の常任理事会で、故高杉鬼遊氏がこれを提案され全員の賛同を得ました。初年度の昭和五十四年七月六日、中央区の金属会館での路郎忌には故金泉萬葉氏が、そして八月六日には北区の太融寺で開かれた水府忌には西尾葉氏が、それぞれ交換選者として招かれ、川柳塔社と番傘川柳本社との交流句会がはじまりました。

座右の句

ぬぎすててうちが一番よいという

私の句

今日の幸 一氣に飲み干す琥珀色

米原雪子

(水府)

川柳塔 八月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 夏から夏

法善寺横丁

河内天笑……(1)

川柳塔(同人吟)

波多野五楽庵……(2)

自選集

河内天笑選……(4)

水煙抄

板尾岳人選……(60)

麻生路郎物語(8)

東野大八……(84)

愛染帖

波多野五楽庵選……(87)

誹風柳多留二四篇研究 44

宮西弥生選……(90)

茴香の花

米田幸子選……(92)

「平和」

阿部進選……(94)

一路集「コップ」

西村りつえ選……(95)

「再び」

法善寺横丁

波多野 五楽庵

私が大阪に行くとき必ずつれて行つてもらう所がある。心齋橋から歩いてすぐの、水掛け不動。で有名な法善寺だ。

法善寺は付近の芸人や水商売の人々の信仰が篤い。川柳塔九百号記念大会と高野山参詣をすませ、川柳仲間と一緒に難波からぶらぶら散歩、夜行の乗車までの時間、法善寺横丁で食事を摂る事にしたのである。折から休日が続く、善男善女は神妙に手を合わせて祈り、お不動様に柄杓で頭から水を掛けています。お不動様の全身は厚い苔に覆われて、お顔もさだかでない。こんなに参詣が多いのはきっと素晴らしい御利益があるからだろう。

法善寺横丁は織田作之助の小説『夫婦善哉』で有名で、今でも小料理屋、喫茶店、食堂、お好み焼き屋が並ぶ。その中に夫婦せんざいの店があり、入って食べる人、お土産に包んでもらう人が群がっていた。

『夫婦善哉』は昭和十五年に発表された短編小説で、妻子のある化粧品卸問屋の若旦那柳吉と、芸者の蝶子がかかけおちして所帯をも

初歩教室「笑 う」……………

なにわ柳壇同窓会……………

柳界の不死鳥 正本水客さん逝く……………

水客先生逝かないで……………

花と美術の旅—オランダ紀行……………

秀句鑑賞「同人吟 水煙抄」……………

■エッセー 現代川柳を教科書に……………

七月本社句会……………

各地柳壇（佳句地十選／楠見章子）……………

柳界展望……………

八月各地句会案内……………

■編集後記……………

吐田公一……………（96）

穴吹尚士……………（98）

黒川紫香……………（100）

都倉求芽……………（101）

田中正坊……………（102）

岩津ようじ……………（104）

石谷美恵子……………（106）

井上桂作……………（107）

……………（110）

……………（114）

……………（129）

……………（130）

楓楽・義子……………（132）

座右の句

島一つ買うて暮らせば涼しかろ

私の句

生き下手が回り道して花に逢う

（薫風）

滝井 勝

ち、商売を転々とする話である。

とかく意志の弱い柳吉を、しつかり者の蝶子が大阪人特有の生活力で支え、明るくバイタリティーをもって切り抜けてゆく。粘り強い女房の姿がよく描かれていることで有名で織田作之助は「私の魂の郷愁のような作品」と感想を述べている。

昭和三十年に森繁久弥と淡島千景主演で映画化されたが、法善寺横丁のぜんざい屋でのしつかり者の蝶子と若旦那柳吉のしつとりとした、しかも軽妙な会話が今でも忘れられない。

早速おみやげのぜんざいを包んでもらい、隣のふぐ料理で一献傾けた。てつちりの匂いが鍋の中から食欲をくすぐる。大阪の人は津軽人と違って仲々本音を洩らさないが、そこは酒の威力、アルコールが体内をめぐるにつれて舌もなめらかになる。そうなると津軽弁もまんざら捨てたものでもない。大阪弁特有のイントネーションと、津軽の雪の詠が抵抗もなく入りまじり、百年の知己の如く話とはとどまることを知らない。おまけに参加者の中に酸いも甘いも噛み分けた大阪女性が入っていれば、あたかも柳吉の如く、蝶子の如く法善寺横丁の夜は夜らしくなっている。ゆくののである。私の大阪の夜もかくして時間となった。

法善寺 蝶子の家ほどのあたり 五楽庵



河内天笑選

米子市 政岡 日枝子

身近な人をいつも忘れている伏角
棚の塵一年位溜まったまま

穴を掘りすぎて転んだ一族だ

追うように私も下り坂にいる

悪戯のむかし素顔で生きていた

近況をひとりひとりに書いている

愛媛県 中居 善信

たった一夜舞うた死骸が落ちている

あれはみな錯覚だろか恋終わる

かと言って荒らすわけにも千枚田

しょうもない因果でしか田を植える

穫り入れの安らぎ知らぬ行楽地

十年は生きる積もりの柿植える

吹田市 石原 靖巳

楊貴妃の化身か雨の花菖蒲

似たような傷を持つから信じ合う

ウツの字が未だ書けるから呆けてない

群にいてあらぬ妥協をしてしまう
ところてん昔の部下に追い出され
渦潮も恋も激しい方がいい

羽曳野市 徳山 みつこ

なめくじへ一杯どうぞビール置く

ひよいひよいと胡瓜が歌う夏の庭

朝寝してながなが悪夢見てしまい

六月の幸うめの香満ちる台所

淡い紅鮮やかな紅生姜漬け

子や孫をピカで死なせてなるものか

和歌山市 古久保 和子

入梅へぬるり鰻が足元に

ひまわりの疲れを溜めているうなじ

妖精の住む森からのEメール

木のペンチ鳥と話を弾ませる

メダカ孵化古い火鉢がマイホーム

もたもたと回転ドアに挟まれる

鳥取県 土橋睦子

ふるさとに臨時列車が止まる夏
五日制ひっそり閑とした校舎
かまきりの姿も自我を見せつける
ことごと煮詰めた味になる夫婦
恋ごころ男の方がねちっこい
はまなすの花が見事に咲く砂丘

八尾市 生嶋ますみ

父の日のなかった頃の父強し
ストレスをヘルパーさんにみな委ね
ラッキョウを二瓶漬けた勝利感
はけ防止夫婦で歩く道がある
青テント冬より辛い雨季になり
雨あがり紫陽花好きな色で咲き

美祢市 安平次弘道

愛憎の果ては互いに笑い合い
風呂敷に包みストレス持ち帰り
ひらがながとつても好きな女文字
百態の風が飢えなど忘れさせ
正面の釘がわたしを唆し
辻褄が合わずリンゴの木が枯れる

藤井寺市 中島志洋

禁酒したはずの男が千鳥足
福耳も避けて通れぬ不況風
才女よりやはり陽気な嫁がよい

おばはんはんに占領された露天風呂
風鈴の音色肴に飲むビール
気取らない大阪弁で宥められ

富山市 舟渡杏花

他人の皿の毒まで舐めたことがある
まむし酒の醗酵待っている日暮れ
生き恥の一つ二つは糧にする
バカスの誘い無視したことがない
いつ仏になれる石屋で放つとかれ
入れ知恵とわかる前後が逆になり

砂川市 大橋政良

経験が刻まれている足のうら
風穴を心にあげた憎い人
おぼろ月少しセンチになりました
無人駅みどりの風が吹いていた
ふる里へ芋とお喋りしに行こう
それぞれの思惑がある車間距離

弘前市 高瀬霜石

良薬は苦し世間もまた苦し
愛という文字は書くたび変化する
お宝は鑑定しない方がいい
鶯のように鳴かぬ青い鳥
お祭りになると食べたいゆで卵
人生ゲームどこでも寝れる人が勝つ

一病と関わりあつてゆく余生
飯粒を拾う真夏の懺悔録

弘前市 高橋 岳水

各論になると利害が貌を出す

平和とは三度の飯の中にある

背伸びした分だけ転び癖がつく

老斑の数に現実見てしまう

広島県 藤 解 静 風

田植笠そろうとイベントになった

何もかも揃った頃の神経痛

夫婦でもポロリ言つてはならぬこと

拡大をすれば恥じらうカスミ草

よく笑うわるい味方がひとりいる

白桃のような慕情は枯らさず

広島市 森 田 文

役割を持たせば活気づく空気

転んだらすぐ起きられぬから側に

ふるさとの一寺一社を守らねば

再会をしつこいぐらい念を押す

ハッピーエンドばかりではない物語

気まぐれな空に大きな虹が立つ

倉敷市 小 野 克 枝

どの風も受けて緑の葉は素直

継ぎ当てる堪忍袋持ち歩く

親亀の甲羅に乘らぬ子に賭ける

悲しみの棘が抜けたら発車する
はつきりと答を出した陽の真下
公園に夫婦の指定席がある

竹原市 小 島 蘭 幸

やさしさは厳しさ半眼の仏

助成金ゼロになつても止められぬ

遺句集のあたりに棲んでいる螢

友達と私の句碑がある街だ

ワールドサッカー類に日の丸描いて笑む

手術後の予定いっぱいある手帳

和歌山市 福 本 英 子

梅雨入りの前からでんと熱帯夜

葱きざむリズム忘れた肩の凝り

サッカーを知らぬ私が燃えている

リストラの心配も無し卵焼

約束を違えず咲いたねむの花

突然に来る姑さんは綺麗好き

和歌山市 木 本 朱 夏

骨抜きにしたい男を組板に

逢いたさの闇を手探る蛍狩

女癖のひとつやふたつ栗の花

少年の夏キラキラとトカゲの尾

八月六日水府忌父の忌蟬時雨

一筋の縄のふりして蛇眠る

和歌山市 川上大輪

私小説の中で一匹鬼を飼う

仏壇に私の予告編がある

わたくしをじつと観察する金魚

天辺のカラスはいつも笑ってる

足して2で割るなら誰も苦勞せぬ

いつ死ぬかわからないから頑張ろう

和歌山市 福井桂香

モヒカンヘアー魚になつてボール蹴る

えんぴつで氣楽に建てるマイホーム

血液型の違う味方もいる我が家

晩酌を止めると元氣失せてくる

迷走地図抜け出せないでいる日本

愚痴の出るころを叱りつけている

和歌山市 細川稚代

田植終えいきいきしてるおじいちゃん

活着的苗へ安堵の目を細め

川向こう手ぶらで寄れる友がいる

野良犬の自由ほしいと哭くコリィ

走り梅雨橋の向こうはもう夏だ

どしゃぶりの雨へ流そう嫌なこと

和歌山市 吉村さち子

三十三回忌夫の知らぬ孫二人 (亡夫の三十三回忌)

2句

一切がっさい息子が仕切る父思い

そら豆の莢の過保護をふと思う

口にしたばかりに底を計られる

ためらっている間に事がすむ怖さ

なるようになるから慌てないベース

香芝市 大内朝子

生きのびた命愛しい誕生日

ふる里を偲ぶ蛙が鳴きはじめ

一回り先行く友がいい手本

スナップの写真へ歳を暴かれる

一年を単位に生きてゆく余生

ファッションが時の流れを読んでいる

橿原市 居谷真理子

国語からまず痩せてきて斜陽国

途中下車させて本屋も店を閉じ

独り居の湯呑みで水を飲む厨

札儀上全力こめて打ちのめす

喧嘩した後の食事で舌を噛む

発泡酒にして大きい方を買う

愛知県 早川盛夫

雑草も精一杯の花をつけ

健康になつて戻った笑い声

強かに生きた仮面を脱ぎ棄てる

三分の祝辞に悩む二週間

酒が出て一つになった敵味方

上品に食うものでなしカニの殻

奈良市 天正千梢

ふところ手にぶい刀を握つてゐる
夢芝居今日も一日おどらんか
恋のやけあとちよつぱり見たくなり
三日月をビエロの眉にみてしまひ
もの言わぬ石が語りぬ磨崖仏
掘り出した木簡急に語り出し

京都市 高島啓子

判子屋にある平凡な名前です
特急のゆつくり走る午後三時
タクシーに乗りなんとなく読む名前
盛り場に来てコーヒーで帰る人
五時起きの人には勝てぬから黙る
すいとんを思ふパスタを茹でながら

横浜市 田中笑子

良い嫁と言われ続けて疲れ気味
紅の色変えて闊歩の日曜日
赤い服似合いますよと煽てられ
運動のノルマに入れる歩道橋
無い無いと言って海外行く不思議
計算に入れてなかった医者通ひ

川崎市 和泉あかり

花の寺人目を避けるふたり連れ
気付かれぬようにお臍で茶を沸かし
山盛りの薬味とねむい梅雨の入り

瞬きを忘れた金魚を見て飽きず
玄関を出ると電話が呼び戻す
那覇空港逢うも別れも手を振つて

出雲市 佐藤治代

取れたての鰯が届いていい朝に
大吉より優しい吉をポケットに
色褪せた庭に真つ赤なバラが咲く
誰となく電話しまくる淋しい日
心ここにあらざタンポポの綿毛
人さまのことが気になる九官鳥

島根県 森茂美

ささやかな抵抗だった領事館
パンの耳ゆつくり齧る雨の朝
巻き戻すビデオに亡母は生きている
人並みに恋もしました傘寿です
老いてなお燃えるものあり夏衣
平凡に暮らし明日の米をかう

香川県 神保坊太郎

ふる里はどの字で書いても懐かしい
嘔吐いた日から乱れてきた歩幅
妻が振るタクトの先に春の風
体調が悪くて通院休みます
掘り出したハニワが確と見た未来
いかように燃えてもたかが五十年

香川県 瀧井 勝

末席の声に満場風が止む
零歳の全裸写真は誰でしょう
居所が不詳になった未知の街
女だけ背負う重たい業がある
自慢話が様になるのもお人柄
子の縁談事後承諾のことばかり

唐津市 宗 水 笑

美女の横心乱れるバスツアー
横着になれぬ遺伝子親ゆずり
未だ寿命尽きず無傷の自損事故
雲悠悠釣り果なくともワンカップ
街中に演歌の女見当たらず

遠き日の天女人並み老い給い

米子市 鷺 見 正 子

葬送の列に繋がりつつ学ぶ
欲張るとお天道さまに笑われる
幸福はここにいる野の董
少年の学ぶ瞳が美しい
夏服の少女眩しいほど実る
好きな訳これから捜す好きな人

鳥取市 岩 原 喬 水

良妻もちよつと俺には強過ぎる
胃カメラに腹の黒さは写らない
母ちゃんの皺に愚かな僕が居る

弥陀の慈悲生死の境救われた
ご無沙汰が梨の催促だけはする
ちよつとだけ花を咲かせて魔女が逃げ

鳥取市 倉 益 一 瑠

ワntenボ遅れて風を読んでいる
サン格拉斯かけてときどき息を抜き
小火のまま沈んだ恋もありました
枯れた池呼び水打ったのはあなた
スタートをしてから迷うことばかり
ちよつとした噂大きな風に乗る

鳥取市 有 沢 せつ子

目に見えぬ垣が隣を遠のける
折おりの花と語った万歩計
文例の祝電義理の声で来る
朝市のどれも採れたて主張する
夕焼けに信号の赤負けている
死なせない覚悟で金魚すくいする

鳥取市 春 木 圭一 郎

ああ妻よ年中無休ありがとう
心拍が四十テニス好きな妻
大いびき妻がかいててほつとする
スーパールのチラシへ妻の目が光る
振り向けば保護者のような妻がいる
高三の時から四十四年惚れ

鳥取市 録 沢 風 花

W杯の熱気で脳が活性化
夜更けてのベルひと呼吸置いてから
腰痛を忘れて急ぐレストラン
火の蜚静かに闇へ灯を閉ざす
ふる里に想いを馳せるおぼろ月
実りある明日を信じている根っこ

鳥取市 植 田 一 京

私だけの記念日そつと丸じるし
お洒落した日には背丈もちよつと伸び
夢いっぱいあつて余生が忙しい
故郷の町に昔の路地は消え
倅せは語れる友の居ることか
この壁を超えたら思い切り泣こう

鳥取市 岸 本 宏 章

起きて寝るだけで残高減っている
経済という化物が支配する
古傷を真のライバルなら攻めぬ
紛争のたびに九条進化する
熱いうち打ちたい鉄が脆すぎる
すぐどなる奴だなきつと小者だな

鳥取市 近 藤 佳 子

わざわいの神送り出す流し雛
西瓜売の声と真夏がやってくる
安くても買えなかった日懐しむ

世直しの死角で稼ぐ議員たち
盆栽にされて大樹の夢果てる
常識も文化も変えて時うつる

鳥取市 武 田 帆 雀

かあちゃんを女王に立てている平和
瞑想の眼に睡魔襲いくる
神棚を見上げてビール一気呑み
双方の顔が立つよう行司する
坊ちゃんの力で波がくじれない
アドバールンこれから先の道が混む

鳥取県 権 代 康 女

大声で唄う音痴に笑もらう
金を持つよりも楽する機械買う
好い話実り幸せかみしめる
方言を使えば心通い出す
あてつけのようなカラスの仕業なり
偵察のアリがごそごそやって来る

鳥取県 新 家 完 司

着メロがサビサビシと鳴っている
枝いっぱいコロコロ笑うユスラウメ
真剣に記した句箋熱を持つ
銭よりも大きなものを見つけよう
飲み尽くせぬ酒が溢れているこの世
逃亡者も逃れられない消費税

鳥取県 石谷 美恵子

他人ごとへ腹をたててる正義感
どの家も器に合った悩みごと
面白そうな人の隣へ席移す
移り氣を責める私の自己嫌悪
美しい毛虫ねきつとモリハナエ
声にしてならぬ言葉を囁みつぶす

鳥取県 土橋 はるお

俺に似よ虫歯一本ない爺や
人が声かけると狂うパチンコの調子
熱血の男が円の軸にいる
長いながい橋を渡って待っている
梟がまつりの終り告げている
一本の葉にこだわるのも男

鳥取県 石尾 かつ乃

きつと咲く勇氣お日様から貰う
もう我慢出来ない理由聞いたとて
突然に口から漏れたのは本音
五月晴れ野点の席の客になる
しっかりと沐浴あすは挙式の日
まつり笛遠くに聞いて名残り酒

鳥取県 谷口 次男

原告と被告のような夫婦なり
ふるさとの母なる小川泣かすまい
ふるさとの桜を映す澄んだ池

黒幕をあぶり出そうと泳がせる
妻の座に堂々座っているタヌキ
芸人が天下を取った顔をする

尼崎市 春城 武庫坊

追想の中に進軍ラッパ鳴る
漢字ポロポロ脳からこぼれ辞書を繰る
日蝕は恥ずかしがつて顔見せず
人間の弱さを突つく言葉尻
ワールドカップ暮らしのリズム狂わせる
サッカーに興味を持った妻の頬

尼崎市 春城 年代

真夏日が続く惰性を許そうか
黒いパラソル学説どおりの流行
入梅やピアノけだるい音がする
度忘れの老女の背も丸くなる
夏を越せたら仏典などに手を染めん
不意にわが生涯を透く走馬灯

西宮市 門谷 たず子

前向きに生きてご飯はてんこもり
生きるためいくつ越えたか水たまり
シナリオは神にまかせてゆく余生
いつまでを二人で歩く武庫河原
夕映えやまだ描き足りぬ絵の具皿
終章の旅にもあった雨季乾季

尼崎市 長 浜 澄 子

戦後史を見たガジュマルの樹は寡黙
玉泉洞にてサスペンスなどをふと
シーサーよ佳い想い出をありがとう
君に見えるのは私のごく一部
テレパシーが通じたらしい流れ星
一瞬の躊躇い切り口が甘い

神戸市 木 村 貴代子

思いきりくしゃみを出して鬱払う
やがてみな灰になるのに欲深く
束の間のしあわせ寄せて力とす
サッカーの勝負にゆれる世界地図
若者を叱る度胸に不安感
明るさにひかれ下り立つ花の庭

川西市 西 内 朋 月

一言が気になっている苦労性
ケセラセラ苦しいときは飲んで
少ない血瘦せた腕から抜く検査
嫌われる煙を隅で吐いている
高くていつも混んでるラーメン屋
泡盛に嵌ってしまう那覇の夜

富田林市 藤 田 泰 子

肩の力抜くのはとてもむずかしい
いい葉だったと思っている煮え湯
マンションに移り文化が変りだす

人生の放課後だから風になる
幸せな気分をくれる梅ラッキョ
ベサメムーチョ昔々の血が騒ぐ

富田林市 大 橋 鐘 造

時どきが度たびになる遊び癖
のし袋ずつしり重い義理を入れ
背伸びして掴んだ椅子が馴染まない
知る人も絶えてふる里遠くなる
ごめんねが上手に言える生き上手
目をつむり夢の続きに彩をつけ

岸和田市 井 伊 東 吉

自衛隊だけが喜ぶ有事法
どうしても課税ちらつく発泡酒
母の日に劣る父の日プレゼント
多過ぎる薬 間を空け飲んで
政争もしばし休戦W杯
キャンプ地のもてなし温いサポーター

大阪狭山市 矢 野 梓

不況風福祉に歪みないように
お土産の西瓜が夏をつれて来る
怒鳴り声受話器離して聞いている
梅雨最中パステルカラー重ね着る
喪が続き念入りに見る死亡欄
紫陽花が咲いて兄の忌巡り来る

河内長野市 加島 由一

蛇口から貰う大河のひとしづく

面倒をかけて大きくなりながら

いつだってバナナが食えるのもうれし

W杯前に和英と首っ引き

長生きの国からもうヨーグルト

もう蚊帳は死語になりそう千代女様

松原市 小池 しげお

去年とは全く同じ味噌の味

貼り薬はいだとたんに効く気配

自慢する客には安い方の酒

ジョークやと後で言われてから笑う

長い目で見てくれている柿の花

百度石助けてくれたのは薬

和泉市 岡井 やすお

治外法権のままで護りに来

靖国でよろけちゃ霊が浮かばれず

憲法も力持ちには曲げられる

専用機だったらテロは居ないだろ

この指にとまったら大臣の椅子

インドより国のまわりの自衛策

大阪府 初山 隆盛

あじさい忌雨は真珠の玉降らす

葉緑素吸いにおいでと森が呼ぶ

W杯コインと切手買い漁る

口コミで本物の味光りだす

盲導犬チャイム知ってる交差点

てんごしてイエローカード渡される

藤井寺市 太田 扶美代

老犬と長生きごっこしています

重たい方黙ってさげる人が好き

友情はどん底にいてたしかめる

あじさいに雨 男には冷奴

六十歳遊び仲間を募集中

おおかたを終えた男の大欠伸

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

夫婦とは蝶々結びのやわらかさ

占いはずばり心を衝いてくる

水枕母の夢見て熱下がる

うたた寝を許す風鈴鳴っている

ハーブ茶の心遣いを心掛け

地下街に雨を知らせてくれる傘

八尾市 村上 ミツ子

譲られた席には座れそうもない

バランスをうまくとれずにすぐ転ぶ

張りつめたところ弾けばパンクする

ちよつとだが年金のある有難さ

W杯ニッポンチャチャチャお茶の間で

サッカーもいいが気になるタイガース

一ヶ月早い熱帯夜に喘ぐ

八尾市 神原 まさと

室生寺の塔石楠花に似て優し

ラーメンに戦後のような人の列

へその緒も入れてあります貸金庫

妻のことドーベルマンと言う愛も

養生にお子様ランチ食べている

八尾市 井尻 民

いびつだが夫の器そいやすい

冗談と思って聞こう大ジョッキ

生き抜いた事が自慢のネックレス

繕うて七十年の今を生き

色模様歳の差なんていいじゃない

いぶし銀背中に見える孤独色

八尾市 吉村 一風

誘われて雨の日の酒よろこばず

古い手紙また出して読む雨の午後

失敗も苦勞もあって生きている

一生懸命子に付き合ふと子も懸命

噂には負けるな だけどしんどいよ

今を大事にしたいと思う茶が旨い

寝屋川市 太田 とし子

己が国愛でるボールに声しきり

急かす焦らず足跡残すカタツムリ

見る人の心で変る雲かたち

茶番劇演じてそれから貝になる

湯豆腐の鍋に浮かせる明日の計

観念した歳で大安選っている

寝屋川市 坂上 高栄

来るほどに郷愁迫る羅漢寺

人の目がないと抱きたい羅漢さん

陰陽の調和この世が恙ない

象形文字進化の後を振り返り

澄み切った空に銀翼定期便

打ち寄せる渚に悔いの息遣い

寝屋川市 江口 度

キー叩く指紋なくなるまで叩く

自国みな真ん中に画く世界地図

高い鼻匂い音痴という娘

呼び止めてくれると思ひ席をけり

サポーターのマーチで都会動き出す

伝言板多弁になったにわか雨

寝屋川市 森

紫陽花にちよつと隠れてみたくなり

含蓄のある顔で来る盲導犬

鍼さして貰った腰が伸びてくる

原爆碑へ学校じゅうで鶴を折る

身に潜む鬼もなかなか出ていかぬ

がらんだうな軒に燕のマイホーム

茜

大阪市 板東倫子

島国へ怒涛のごとくフリーガン
大学を出てセンスなき漫才師
恨み節秘め紫陽花の七変化
人間国宝言い訳無用の粋な恋
残照の中暮れなすむ今日の悔い
薬屋根を借景にして詩人住む

大阪市 小泉 ひさ乃

根回しの効いたレールに乗る子亀
逞しく育て偏差値気にしない
一本の薬知るほどに温かい
ダンディーな方とふたりのエレベーター
許せない事も許してしまう愛
誰にでもやさしくなれる幸せな時

大阪市 前 たもつ

大阪城にひかれ引つ越す古稀の春
大阪城妻と日課の一万歩
太閤の昔を偲ぶ土の道
外濠へ世相を映す青テント
蛸石がマナーを叱る花見どき
一汗が心を洗うウォーキング

堺市 和田 つづや

熱気球風のご機嫌良い日です
妻の留守淋しん坊になっている
昼食はチンの魔術の温い飯

昼も夜もケイタイ電話中毒者
貰い泣きして戴いて気が晴れる
ふらり出る時をきままに使う旅

堺市 宮本 かりん

思う壺だ少し困った顔をする
無駄な時間いっぱい使い老いてきた
流れにも安らぎのある深い淵
予想せぬドラマ生まれたにわか雨
一匹の蚊にねらわれる風呂の中
もくもくもく入道雲のシヨレばし

堺市 志田 千代

逆らわずでも従わず共白髪
髪染めてきたのに席を譲られた
子育てのSOSもこなくなり
二の腕は隠すお肌は曲り角
頼むのが頼まれるより苦手です
やっぱりネ頼まなければよかったワ

堺市 西村 りつえ

葉脈の流れサラサラ若木燃え
八階から夫見送る髪の高
細い夫に重い私がぶら下がり
W杯ルール知らずに見えます
不器量に若若しいと褒めてくれ
デパートも僕を誘いにくるデフレ

吹田市 山 本 希久子

すいとんを食べる八月十五日
三代同居元氣な風が吹く
男と女にもう戻れない川の幅
鉛筆と消しゴム幼馴染なり
貧しさに耐えるが孤独耐えられず
サッカーに夢中六歳七十歳

吹田市 早 川 棲 世

刺客は内に信長竜馬純一郎
企業保護怒り不況を責める記事
鬱に負けじと愛欲描写拾い読む
躁の日は一生死なぬように言う
一代おきに酒色が好きで父飲まず
ひとと死なん女人いくたり目にうかべ

枚方市 海老池 洋

カラオケの喉でご詠歌遍路笠
デュエットを妻と歌ったことがない
虹の橋渡っていった一輪車
菖蒲園江戸伊勢肥後と競るおしやれ
避雷針の役も厭わぬ正義感
ワンテンポの遅れ処世もカラオケも

交野市 森 本 弘 風

ささやかに妻と外食母の日に
父の日に妻がお酌をしてくれた
空襲は五十七年前の朝

蛇が出る小径は避けて山登り
余呉の湖琵琶湖を分ける賤ヶ岳
掛け捨てを願って介護保険掛け

豊中市 江 見 見 清

西東わからなくてもキタミナミ
挨拶の様子が違う何かある
女房が亭主の若さ比べだす
渋滞に時計の動きだけ速く
音大出カラオケの場を白けさせ
頼まれたはがきを旅の先で出す

豊中市 安 藤 寿美子

ベット囲む柳友のやさしい顔に泣く
鼻柱も骨もばあさん折れ易い
沖縄のドクターハンサムで楽しい
沖縄パワー国吉先生からもらい
元氣のもと沖縄の水沖縄の風
息子来ておこられ娘来て笑われて

豊中市 岸 田 知香子

機能付炊飯老いを手古ずらす
W杯小さな国も威厳持ち
色気より食い気保って太鼓腹
夢に見た隠居遠のく喜寿の日々
眼の手術方々あらが見えすぎる
歳以上働きすぎた日々感謝

東京都 播本充子

少年になる自転車を買ひ換える
僕が監督なら連敗はしない
古い人だから上座と決めておく
悪くなるのを遅らせる薬とか
ああ遺品燃えないゴミと燃えるゴミ

東京都 後藤早智

W杯俄ファンになつてゐる
愛国心駆り立てられる旗の揺れ
改めて地球儀回すW杯
日本中サッカー馬鹿に徹し切る
隣国がこんなに近い釜山港

横浜市 小野句多留

羞恥心忘れ華やぐ野天風呂
甘栗は試食で足りる中華街
あの女医の美貌素直にさせられる
相続の餌食になった汗の金
俺が起き妻が起きたら飯にする

横浜市 菊地政勝

冗談をまともに受けた勇み足
腹の虫収める酒を飲んでみる
けなげにも泥の中から蓮が咲く
鬼百合が立ち止まらせた山歩き
餌運ぶ燕いとおし観て飽かず

横浜市 保田絹子

点滴を睨み孤独の日は暮れて
カーテンのプライバシーに耳を立て
弥陀の掌に無信仰者も縋り付く
また来るね夫の背に愛を知り
幻の飛天だろうか虹二重

横浜市 清水潮華

菖蒲園巡り筋肉痛残る
サッカ一の喚声窓を開けて聴く
引越も転居もご挨拶がない
筒抜けの話へつのる不信任
鳩尾へ刺る無礼な丁寧語

富山県 増田紗弓

店頭の偽名に馴れた深海魚
棘抜いてみればこんなに小さいのに
シリコンで惑わされてる美貌の差
使い捨てだろうと靴は知っている
完済を叫びたいほど晴れた空

富山市 島ひかる

新盆の兄が出てくる夢まくら
送葬のわたしを見てるのは私
供養塔ころろの中に建ててある
ご先祖のおかげで足りる衣食住
いにしえの心あそばす京の旅

富山市 酒井 輝

耕して知る少年に美味しい水
芋粥を知る身に不味い物は無い
恩師より老けてる喜寿のクラス会
安受けが念を押すのをつい忘れ
原発を呼んだ豊かな村に住む

静岡県 園田 漠 杏

ごつい手のマジックネタがばれている
子の絵から笑い声まで聞えそう
クレヨンを持つと童心よみがえり
うるさいと言われる前に外に出る
囁りも馴れの怖さでやかましい

富士宮市 渥美 弧 秀

裸木を前景として富士霞む
月日たち始めの誓いうすれかけ
人間の演技休んだことがない
亡き友もシャンソンが好き偲び聴く
永らえる命家族の荷となるか

可児市 板山 まみ子

お互いにゆずれぬことが多くなり
嫁の顔うかがってから孫に菓子
真夏日の冷えたジュースに胃が悲鳴
病気の名ひとかかえ持ち末期ガン
友達を次々ガンに連れ去られ

京都府 丹後屋 肇

梅雨入りが暦通りでホツとする
雷におびえる犬を抱く夜更け
イレブンの気迫が乗り移るシート
臍出しの学生もいる座禅堂
自治報で回し譲りの松葉杖

京都府 稲葉 冬 葉

スクープを買いますこわいご職業
矢面に立たされている深呼吸吸
脳からの指令が遅れがちになり
神経がいちびつてくる空腹時
姉さんを越えた誕生日の孤独

京都市 都倉 求 芽

ぬけぬけと男の嘘を食う女
納得を頭のどこから司令
摂生は強いず薬出しましたか
割り切れば尊い汗も分泌物
いい日和山の裏まで見えた旅

亀岡市 井上 森 生

棚田ではテロやリストラなく田植
若社家が豊穰神事競馬くらべうま（上賀茂神社）
蒟蒻の花は五年に一度きり
驚いた目からうるこは聖書から
生き生きて熟柿のように艶やかに（母九十八歳）

滋賀県 中 宗 明

ブランドの服着る案山子得意顔

嫁姑年季で勝負隠し味

長寿社会六十代はまだ半ば

テンポよい啖呵で相手煙に巻き

葉桜が春の終焉告げている

大阪府 米 澤 俣 子

精いっぱい生きよう頂いた生命

日がたてばたつほど返事しにくなり

都合よい自分鼻眞の解釈で

心の揺れが言葉の端に表われる

年毎にプライドちびて干からびる

大阪府 澤 田 和 重

馬の骨同士で和む屋台酒

まず靴で踏んで拾った五百円

退屈で鼻毛ゆっくり抜いている

子子孫孫に語り伝えるきのこ雲

四分六の妥協で敵に恩を売る

大阪市 西 出 楓 楽

今思う昔の主婦は偉かった

言うなればシフォンケーキのような人

水琴窟に耳の老化を知らされる

本名より雅号の方が翔びやすい

六十代もうターゲット絞らねば

大阪市 奥 村 五 月

ギャル神輿ちよつと太目も練り歩く

父に似た男は駄目と母が言う

年金で欠かさず払う酒の税

古里の海を見せたい車椅子

杖なしで米寿の母が野良仕事

大阪市 川 原 章 久

写経する窓から風が抜く邪念

淀川を飲んで元気に今傘寿

甘い水飲んで磨いた蛍の火

寝化粧の鏡に映る女の火

待っている書留来ない長い午後

大阪市 川 端 一 歩

いい距離で夫婦長もちしています

相手の目しつかり見つめ聞き上手

精魂を込めた手紙にはてる顔

銀色の雨にバンザイ新グリコ

雨の日は米朝聴いてワンカップ

大阪市 鶴 田 遠 野

種火抱き春待つ恋の導火線

黒髪の乙女が消えている日本

生きている証に恋を繰り返す

説得に自信ありげな示談金

確実な儲け話に騙される

大阪市 中澤伽羅

毎日の小さな苦です夕仕度
落ち着いてどこかが違う苦勞人
溜めすぎた写真整理を苦にしている
古希すぎていまだに宝塚ファン
磨き甲斐無い顔だけどほっとけず

大阪市 榎本日の出

人間も料理にもある隠し味
心にもないお世辞にも顔を染め
甲斐性を裏で支える古女房
宴会で前に座ったのが御縁
若かった証拠を残すハイポーズ

大阪市 鈴木トヨ子

涼風に手を合わせます熱帯夜
雷さん雹土産にかけ巡る
検査日は便に祈りを込めている
五十回忌肩荷降ろすな亡母の声
雑草に負けじと生きる昨日今日

大阪市 小糸昭子

源流に帰巢本能甦る
グラビアの美女の魅力に負けて買う
天にまで届く梯子が欲しくなる
蚊帳と言う涼しさ運ぶ夢の中
疑問符でバニクッてます前頭葉

大阪市 川久保睦子

砂ピユアになってキュツキュツと泣いてます
大臣にあるか言葉の重さなど
駅前にもまた槓山が出来るとか
切り札を使わずすんだよい日和
月の量何とも言わない夫婦愛

大阪市 町田達子

ふわふわと寄り道してる番蝶
カンカン照りヘジューンブライドお発ちです
お幸せにと祈る機影の消えるまで
美しい人にもあった苦い過去
院展へ誘われてゆく暑い午後

大阪市 安達はじめ

限界を悟った日から老い始め
点滴の腕が耐えてる長い夜
物売りの国の訛りが親しまれ
ほろ酔うて無口な貝が泥を吐く
一枚のメモの行方で大掃除

大阪市 大川桃花

身勝手な人科ボツクリ寺が好き
割込んで運を逃がした抽選会
聴診器おんなじとこでふと止まり
シヨッピング結局おかず買っただけ
配役を見て犯人の目ぼしつけ

大阪市 渡部 さと美

サッカーに目を洗われてから夢中
黒檀の箸プレゼント夫も古希
夫大事と立てて来たこと今悔いる
予報官お天気歳時記がたのし
簡単に掌替える気もかわる

大阪市 中村 叡子

喜びは御子抱かれた両殿下
植木みな往来向いて花咲かせ
ええ格好他国援助で国疲弊
うちのボチ僕の散髪より高い
肩が凝る生かされているあかしかな

大阪市 杉澤 汀

河鹿鳴くように喉こす岩清水
青い葉の青い蛙が雨を乞う
この奥に茶屋ないとある山の茶屋
湯舟から社長人間らしい声
不覚にも玉音放送聞きそこね

大阪市 清水 絹子

ミシン掛け済めばすっかり雨上がり
墓参り迎えてくれた雨上がり
お賽銭友と替え合い一の橋（富野山参り）
夜来の雨晴れてそよ風奥の院
まずひと口土産はこれとゴマ豆腐

大阪市 浦田 綏子

娘は度胸男愛敬のリクルート
贗作を描く人売る人飾る人
ブルーギルブラックバスに湖盗られ
けたぐりやうつちやり知らず四つに組む
昼下りかけこみ寺は藪の中

大阪市 津守 なぎさ

露地裏に花咲き競う月あかり
ジョギングの友と互いに癒しあい
口だけは達者三食くすり漬け
デイズニーへいつも行きたいおばあちゃん
お年寄り今日はカラオケ明日ダンス

大阪市 津守 柳伸

なにを今更UVカット化粧品
三枚の水着が古希へ怖じけだす
紫陽花に詫びねばならぬ雨予報
そして朝吸いがあるバルコニー
八月の想い悠ゆう雲流る

大阪市 松尾 柳石子

菩薩にも夜叉にもなつて子を育て
金出せば年中行けるスイミング
うだる身へ八月の雲元氣よい
閉店の増えた街並陽は高し
舌出して散歩しているこわい犬

大阪市 神夏磯 典子

大阪市 中田 あい子

茄子の艶そんな女になりたいな
反対をすればするほど一途なり
みの虫は枯葉のように化けて生き
阪神にサッカードい血が騒ぐ
ステップを弛めて夫と歩を合わす

大阪市 榎 本 舞 夢

苦虫を潰した顔が笑い出し
苦しんで掴むよろこび離さない
苦しみの中から光探してる
苦しさを仏像展で癒してる
重苦しい空気ジョークでぶつとばし

大阪市 本 間 満津子

物の無いときよく働いた頭だが
暮しのリズムひとりで体動き出す
うかうかと道も歩けぬこの世相
雷鳴をじつと窺う夜半の雨
朝顔の生命見えたり二十日目に

大阪市 小 林 トメ子

退院すりや食堂街に様変り
白い雲手をつなぐよう流れ去り
近頃はサイレン鳴つても飛出さず
老いの身へ次々追って来る病
負けるかと医者と鍼とで応戦す

ピカソの絵いまだによさはわかりかね
子を叱る嫁だんだんと姑に似る
長男の手帳に小さく彼女の名
さわやかな小さん師匠のフィナーレ
採算があわぬとヒント没にされ

大阪市 津 村 志華子

六月の利尻礼文は春さ中(利尻礼文紀行)
旅は道づれとなりへ飴のおすそ分け
姫沼の太古を偲ぶ水の彩
残雪を絵にして映える利尻富士
スコトンの岬へ杖の助け借り

池田市 栗 田 久 子

八月はまぶし過ぎます私には
冷や汗が頭皮をすべり出す話
打ち水で涼しい風を呼び寄せる
ゴッホの絵越えてひまわり強く咲く
月下美人妖艶すぎて時止まる

池田市 岡 本 吉太郎

終戦で大臣大将庶民なみ
出来た句を捻りまくって没にされ
花嫁さん少子社会だがんばって
温泉で手すりがほしい歳となる
洪水のこわさ雷鳴におびえてる

茨木市 藤井正雄

娘のおしゃれ妻が好みを押し付ける

腰痛で孫の目線にかがめない

暴君の兆しで昼寝してる孫

飴とムチ帰りに誘う炉端焼き

法要で外車が入りするお寺

茨木市 島元ふみ

炎天の葦簀で食べたかき氷

亡母に似た老女に己が歳忘れ

レジ嬢のやさしさまでも感動し

白衣脱ぎ髪もたらしして別のひと

思い切れたらさぞやさっぱり粗大ゴミ

河内長野市 井上喜醉

好物が並び喉から手が伸びる

若者に超いじられて泣く国語

誤解とけビールが美味いのど仏

退屈で空白だらけの日記帳

時々は頼りないなと思う妻

河内長野市 村上直樹

ドア開けた途端カレーに迎えられ

評判のスープ決め手は骨の髄

腹いっぱい食って不況を嘆いてる

油断したつけ全身を責めたてる

手助けのはずが秘蔵の皿も割り

河内長野市 水谷正子

ふり返る人生有事ばかりなり

快気して絆の紐を締めなおす

せんたく物家内やうちにあつて梅雨気分

湿布剥ぐついでに床のゴミも取り

テンションを上げてサツカー応援す

岸和田市 高須賀金太

なさけない鬼だドラマを視ては泣き

リストラをちらつかせ昇給がない

日帰りになって浮かせぬ出張費

ジャブ出して先ずは相手の出方みる

病窓に生きねばならぬ陽が昇る

岸和田市 原苑子

正装で付き添うママの勇み足

投げ売り日我を忘れて人の群

愛犬の老老介護競争だ

姉妹生あるうちは好敵手

パントマイム目は口ほどに物を言う

岸和田市 原さよ子

付き添いの妻がよく寝てよく食べる

的中と顔に出ているお人好し

あの人も投げ売りらしい同じ柄

肥満度を気にしながらも進む食

皮細工定年のない指の先

岸和田市 長谷川 呂 万

恩人に足は向けない北枕

結ばれた赤糸今はセピア色

投げ売りへフト仕入値が気に掛かる

八級へ誘いが掛かるへボ将棋

イスラエル譲り合わないパレスチナ

岸和田市 岩 佐 ダン吉

五体投地人間かくも美しい

一点を見つめ雑踏泳いでる

おふくろの味は売らぬという女将

八合目これからの汗本物だ

非核ゆらぐ国が印パに説いてはる

岸和田市 藪 野 けい子

W杯応援朝からあくび出る

W杯に出るセネガルはこの国

神様の付添いがある千羽鶴

おみくじが的中しそう縁談くる

帳尻を嘘で合わせて答弁す

岸和田市 宮 野 みつ江

あんたどうしよう再婚話来た

予定表びつしり詰まる淋しがり

誰にでも合う合鍵を下さいな

六年忌未だ迷路の真ん中に

淋しい冬へ冬咲く花を植える

富田林市 中 井 ア キ

ブライドはとつくに捨てた時間給

昔むかしの竹針で編む朱のマフラー

刃向いはしない流れのどまん中

あじさいも愛も重たくなってくる

ひとすじに磨いた腕に虹が立つ

富田林市 片 岡 智恵子

不思議だと思い続けた勘違い

唇が乾く知る振り知らぬ振り

配置換え上司にやる気認められ

みどりに映えて白砂の語る一休寺

青虫毛虫 己れの未来疑わず

堺市 神 原 文

襟あしの化粧を少しまだ女

言葉にもベールをかけて光らせる

お金では買えぬ微笑み切札に

練り過ぎてちぐはぐになる言葉尻

ゆつくりと微笑と微笑通じ合い

堺市 矢 倉 五 月

いつからかガムから飴に変わった歯

飴と鞭 鞭を知らない親も子も

助手席で妻が飴出すタイミング

長雨が上り許す気湧いてくる

雨だれの音聞くゆとり今日ひとり

堺市村上玄也

スーツ脱ぎ捨てて作務衣の庭いじり
定年を淋しがつてる紺スーツ
あの世へは老若男女順不同
振り返る道は遠くて長い道
雨男一緒の旅はやはり雨

堺市齋藤さくら

お隣もほこり騒音耐えている
不景気に仕事あるだけ喜べる
無添加のパンに子供は馴染めない
梅雨入りに待ってましたと蛙鳴く
疑えば水道水も使えない

堺市源田八千代

日本情緒たつぷり飛驒の里めぐり
鮎の串レトロくすぐる囲炉裏端
上高地のシャッターチャンス河童橋
ヘルシーな豆腐づくしのフルコース
お風呂場で足滑らせておととつと

堺市渡辺さだを

敬天愛人 米百俵と格違い

雲に架橋高天原をないがしろ
バスガイド特攻情話客泣かす
流れ星浮気の詫びはよう言わん
日本チャチャチャ俺焼酎でのぼせすぎ

堺市黒田真砂

娘のようなナースの笑顔にすぐわれる
姑と娘の絆しつかり保つてる
車椅子押す幸せをふと想う
車椅子押して落花の通り抜け
淋しい時夜空の夫に話しかけ

四条畷市吉岡修

真つ直ぐな道だからよく事故がある
小者だらうギャグ連発でうけたがる
昔来た穴場昔の匂いする
売れたのはB面だった読みちがい
困るのはそっちだ先に呆けてやる

吹田市瀬戸まさよ

戦争を知らない怖さ有事法
同じ愚痴聞き飽きもせず友の情
投げ出した介護やっぱり続けます
辛抱ができず駆け込む白髪染め
身内よりすべて通ずる友七十

吹田市太田昭

父の日に我が家の父は奢らされ
仏壇を閉めて女房の愚痴を聞く
どちら様妻も冷たい午前二時
恋人が回転ドアに攫われる
部長の前音痴の部下が指名され

吹田市 穴吹尚士

高槻市 生田義一

アリバイを洗われ嘘がほころびる
あの苦笑い話で懐かしむ
うやむやにする気で親に借りに行く
すき鍋に合戦のよう子沢山

勢いでつい言い過ぎた自己嫌悪

吹田市 大谷篤子

立直るまで充電はまだ続く

諍いの悔いを鎮める庭に佇ち

新緑の陽に眩暈して物思う

雲掴む話私を困らせる

健康で洗濯物を高く干す

高槻市 江原秀夫

問診票なしなしの丸つづく

年を経て馬車の鈴の音近くなる

延々と抜け道審議する委員

親方日の丸頼りにならぬ列島沈没

正面の敵より怖い裏の敵

高槻市 西谷治三郎

前倒し見直しばかりの日本国

親子ともゆとりの土日もてあまし

改革の無いとき医療費安かった

厚化粧人柄変える魔力持ち

言うことをハイハイ聞いて平和な日

うやむやにするな宗男の疑惑劇
政治家の決まり文句は秘書のせい
横綱はリストラがなし国技館

大相撲ハワイ蒙古に株とられ
空晴れててるてる坊主誇らしげ

高槻市 傍島克治

口堅き友へそくりの場所秘して逝く

こっそりと子供の笹に願ひ事

休耕田に埋ったままの田植唄

近道をしたばかりに縄のれん

指切りの小指の爪がのびている

高槻市 井上照子

卒寿の師迎えて祝う同窓会

転勤の主治医優しく注意する

一浪の孫に元気をやりたくて

下手くそと言われ堪えてる方が上

次々と食品疑問嫌な世だ

高槻市 左右田泰雄

そっくりと見分けるためにある黒子

マンネリの峠を越えた爽やかさ

ばらばらの食事クールな核家族

手の甲をつまめば皺の山が出来

うちの子に限り決してそんなこと

豊中市 松岡 久留美

御先祖に汗ぬぐいつつ話す盆
墓詣り墓前に愚痴を置いて来る
内緒事聞こえぬ振りで波立たず
二階から降りてこぬ娘を母案じ
捨て犬の目が哀しみを投げて来る

豊中市 田中正坊

八十になったら怖いものはない
古稀という言葉はもはや死語となり
喜寿からの三年駆けるように過ぎ
はらからの命もらって生きている
健康であれば長寿はありがたし

豊中市 檜谷 郁子

地図広げグルメの旅はもう幾度
栄転も左遷も地図で確かめる
世界地図火を噴きそうな国と国
夢いくつ抱いてこぼした青テント
倅せも四捨五入する独りもの

豊中市 山門 幸夫

父の日にくつと浮んだ亡父の顔
父の日に遠くの亡父を呼んでみる
でんとした父は優しく強かった
父の日だ背筋をしゃんと伸ばそうよ
父の日は熱燭一本ついている

豊中市 山門 タミ

気がつけば最終コース二人居る
2DK新婚さんだ老夫婦
母ゆずり娘に伝授ラッキョ漬
半回転 婦唱夫随に逆回り
初めての大阪の夏どんとこい

豊中市 吉田 あずき

中東和平サッカー戦でもしてみたら
ハイテクの悪知恵初心忘れさす
十一桁わたしの背なにバーコード
少し向き変えれば楽に生きられる
即答を避けてゆつくり雲を見る

寝屋川市 平松 かすみ

天国の句座で先生ワンカップ
お身体にやさしい物をお仏壇
粗品もうおことわりです母の部屋
お野菜は姿よしからおすそ分け
野草摘み予定に入れてツアーパス

寝屋川市 酒井 勇太郎

したたかの意味を妻から教えられ
上役の娘断り左遷され
財産はあるが期待と桁違い
ちよんちよんと摘まれ植木にある不満
美しく生まれ短所に触れさせず

寝屋川市 富山 ルイ子

W杯日本燃えに燃えてる日
あの人も歩きにくそう歳のせい
初めから私の居場所などはない
占いにすがりたくなる気の弱り
自我強く人の意見は聞けぬらし

寝屋川市 堀江 光子

借景を奪いマンション完成す
出来過ぎの言訳を聞くほろ苦さ
苦勞性の女のいつも小走りに
悩むにも懸命だった日の日記
穏やかに苦樂と生きる歳となり

寝屋川市 岸野 あやめ

喘息は地球壊れてゆく合図
カラオケでひととき別のわたしです
妻の振る鈴には嘘も見栄もない
異次元へ翔ぶまで清く保ついのち
MRIボディーの脂肪も写される

寝屋川市 籠島 恵子

この辺が引きどきなのに意地がでる
いざこざを玉虫色にして暮す
足組んで少し変った言葉つき
Tシャツが似合う若さに風がある
許された幅でちまちま生きている

寝屋川市 高田 博泉

旅行した記念のタオル取っておく
温暖化ぼつぼつ移住考える
野草から元氣もらいに春歩く
母の手を離れて男らしくなり
引越しへへソクリ行方不明なり

羽曳野市 安芸田 泰子

目をそらし小心者の小さい嘘
透明のゴミ袋から暮し見え
紅の濃さ遺影の夫に見つめられ
旅人となって古里訪れる
休日も女の口は忙しい

羽曳野市 川口 信子

ケイタイの友情ごっこ恋ごっこ
品行の足りぬ自由に泣かされる
客扱いするなど父母がマメにくる
人生の余白に触れる旬の味
人の名を思い出せないまま別れ

羽曳野市 三好 専平

ひたすらとほどほどそつと手をつなぎ
腐つて水に人間すぐ馴れる
汗水をたらして生きるほかはない
貧乏人はクジラと麦を食うていた
UFJここは日本の国ですか

羽曳野市 吉川 寿美

東大阪市 安永 春

陽が落ちる今日得しものと失せしもの
方言の語尾の温さに包まれる

落し穴があつた上げ底のおべんちゃら

修正が過ぎてわたしが居なくなる

ライバルは靴までヤケに光つてる

羽曳野市 酒井 一壺

仕事終え酒また終えて午前様

不意の客午後のリズムが狂い出す

かたくりの花の愁いの午後三時

有名にならぬと過去は生きて来ぬ

昇進へ最初の名刺父に出し

泉佐野市 山本 蛙城

余生平安リストラもなしストもなし

犬マークセコムマークと寡婦の家

南海地震近いとおどす週刊誌

お代官いま新税の知恵くらべ

憲兵を守護霊にして有事法

高石市 浅野 房子

スロースロークイックのないわが余生

もう誰も死ぬな訃報はおことわり

悪口を聞かされ言うたことにされ

焦点をしほれば見えてくる本音

世間には目もあり耳もあるのです

平穏な五月に暑い夏日和

幸せな喜寿になられてお元気で

やつと梅雨紫陽花ほつとしたように

戦没の父のお墓に傘さして

恵比寿さんみたいな友に招かれる

東大阪市 指宿 千枝子

ステッキは卒寿の母のおしやれです

欠伸出る猫と私の昼下がり

お煎餅届き試食と添えてあり

頼まれる頼む二人の仲の良さ

無理なこと頼んだ後で子にわびる

東大阪市 谷口 義

旅帰り大阪駅も雨が降り

葬式を出した夜にも歯を磨く

一筋縄でいかぬ女の可愛い名

目立たぬが喋るとしつかりしてはった

母さんは村田英雄のファンだった

東大阪市 北村 賢子

父母も居た私も輝いていた日

自然の美さえ気付かなかった束ね髪

節くれた指もマニキュアしてあげる

グメンネと言いつつ枯れた花を摘む

許さんと言うて心で許してる

枚方市 寺川弘一

母さんのそばにあふれるものがある

日曜日麦わら帽の父が居る

制帽をあみだにかぶる自己主張

動物と思えば理解できる人

説得の形で平和記念像

枚方市 森本節子

過信していた骨密度標準以下

家のこと気になり出した回復期

うた俳句たしなむ方と友になり

友の句と川柳交換して退院

W杯二三の選手の顔覚え

枚方市 二宮山久

和太鼓を受け継ぐ御師の通夜の席

定年へ指おりすごす趣味仲間

孫がくるその日は飲まず乗る電車

息子また転勤我れとちがう道

幸せな妻の寝息を聞く夜明け

枚方市 宮川珠笑

食堂で隣もそつと出す葉

寄り添うて栄華を偲ぶ無縁墓

すばらしい快気祝を追う計報

孫の進学口は出せぬが金は要り

多弁ではないが二世帯仕切る嫁

藤井寺市 楠 昭子

トイレにも一輪挿して彼を待つ

居るだけで心和ます友である

ごめんねの一言だけで心澄む

あなたは不思議腹の底まだ読めず

糖尿病酒へ私は鬼になる

藤井寺市 高田 美代子

アウトドアという楽しみがあつて夏

二千円札がひよつこり顔を出す

若い頃に掘った自分の穴に落ち

目薬を差して瞳をよるこばす

年功序列とは限らない計報

箕面市 岩津 ようじ

赤字まで超一流のハナエモリ

つつがなくジャイアンツ負けうまい酒

毅然たる態度で帽子捨てやる

初恋の人の苗字が出てこない

水茎の跡うるわしく請求書

箕面市 出口 セツ子

亡父に似た羅漢と話し軽くなる

輝やいた日だけ覚えていた日記

意地悪な神様も居る幸不幸

常識と愛が不足をする夫

世界への扉が開くW杯

守口市 結城君子

街角の麦秋なれど足をとめ

すねているのか今年は咲かぬアマリリス

菖蒲園にしようぶが咲いたと日の早さ

さくらんぼ私のウツを和らげた

雨つづく日は山椒魚読み返す

守口市 井上桂作

いつまでも夢を求めて引くみくじ

今にして還暦はまだ若かった

孫を見る妻の笑顔もまだ若い

星野トラ明るくなった甲子園

わらべ歌なみだ浮かべて聞いてます

八尾市 宮西弥生

ふり向くと過去の自分にまた戻る

身の上は力になれぬ顔で聞く

手を打てば笈は知恵を持つてくる

貸し借りは作らぬ主義で長い仲

嵯峨路吹く風と出会えた七曲り(嵯峨路を散策)

八尾市 高杉千歩

身籠れる人と夏日を地下の街

そう言えば腹から笑ったことがない

ご老体だよと鏡が笑ってる

冷蔵庫覗けば三日は食べられそう

足踏みが続く日記に詫びておく

八尾市 宮崎シマ子

五体満足 何かが欠けているわたし

席譲られ初恋に似たときめきを

髪切ると梅雨のジメジメふつ切れる

夜の愚痴星が拾ってくれました

生き方は泣くも笑うも自分流

八尾市 長谷川春蘭

古い二人無彩の生活水中花

風鈴の舌を今年の句に替えて

補聴器を嫌う媼と初西風

ゴキブリを追う蠅叩き捨てられず

健脚の余裕の自負や汗涼し

兵庫県 大谷幸次郎

葉桜に未練黄砂の雨が降る

カーナビの道案内で故郷へ

朝露をしつかり貰う散歩道

薄い髯伸ばしてみても薄いひげ

男爵もクイーンも在す薯畠

相生市 中塚礎石

真つ白で絵になる鶴の首と足

弱点を握り難関突破する

鉛筆が段だん駄々をこねてくる

考えに考え抜いて踏み外す

たかが腰痛不安な夜がやつと明け

芦屋市 黒田能子

血を吸つてしてやつたりと蚊は逃げる

タンポポは昨年と同じ場所に咲く

観覧車二人に丁度よい内緒

風邪ぐすり能書き通り効いてこぬ

ハイウエーふる里便は朝に着く

尼崎市 田辺鹿太

方言がないと支線の気がしない

ふる里に河童の泳ぐ川がある

死ぬ時は別々ですと妻がいう

ばんぼんの絵馬は風雨を避けて吊る

音もなく老化が進むから怖い

尼崎市 松下比ろ志

大河滔々正義だけでは渡れない

心根が微妙に響く笑い声

父の日やまだ見えている亡父の背

父の日に孫も子も来て酌み交す

滝に来て天地の鼓動聞いている

尼崎市 内田美也子

土産より話大きな旅帰り

暇のない暮らしが老いを撥ね返す

反省と期待に明日がある日記

モリハナエ支え切れないア・ラ・モード

さりげなく長居ですよと茶を出され

伊丹市 小熊江美

度忘れを思い出すまで気にかかる

気まぐれなお洒落も楽し自分流

極楽で待つ約束をした亡夫

ささやかな夢を抱いて生きている

犬の方が日課を知って催促し

伊丹市 山崎君子

花ざくろお前はいい娘刺がない

朝ドラよわたしも逢いたい遠い人

雨しきりナースの温い手にすがる

ワサビ匂う木洩れ陽やさし里帰り

サッカー戦家族で炎える若返る

川西市 米原雪子

鶯の成長気付く初夏の朝

何時の間にかサッカー熱を移されて

沸き上る歓喜サポーターの涙

かわいいが曾孫の守りはもう辞退

大将も油まみれの町工場

川西市 松本ただし

人の気も知らずに落ちる砂時計

撒いた餌食べると散ってゆく雀

紫陽花の気晴らしだろうか衣替え

寄せ集めの出切れみたいな海水着

ひよっとことおたやんでいる路地暮らし

神戸市 山口 美穂

ユーモアが通じぬ人でまた可愛い

番犬にならない犬と住んでいる

知らぬ間に千両蓄つけている

朝顔が支柱をはようと蔓伸ばす

五七五指と脳とにずれがある

三田市 久保田 千代

基地のない島を夢見て三十年

沖縄の歴史見つめて古酒となる

何気ない言葉も弾む嬉しい日

マゼランの海峡近く夫赴く

海外の夫案じつ羽根伸ばす

三田市 北野 哲男

冷や飯と味噌と漬物だった喜寿

老いと言う未知へどこにも地図がない

道草で輝くものを溜めて来た

ステテコを嫌いミニスカ臍も出す

三猿のロボットに椅子蹴とばされ

宝塚市 嵯峨根 保子

室津盛衰位牌に名残とどめおり

凜とした遊女の話さく港

お夏狂乱恋は薄桃いろでなし

裏筋は銀座うらとて変りない

美容室ふた月分を読んでくる

西宮市 西口 いわゑ

神様に無償で命もろてます

子の楯になる度胸なら持っている

万葉の佳人の如し花しようぶ

梅雨の鬱風鈴の音にいやされる

人間の弱み甘い言葉が欲しくなる

西宮市 山本 義子

われはわれゆっくり坂道登ります

近ごろは割り切り肥満気にしない

不平不満言わぬと決めた明日のこと

ときどきはふるさとの星手ですくう

頑張つてね八十の恋をしてる友よ

西宮市 緒方 美津子

カラオケに唱歌見つけて豊かなり

父さんと宇治金食べたことはない

しなやかに頼まれ断れぬ男

青楓バックに気取る雨蛙

夏はそこ食器戸棚の光り出す

西宮市 牧 渕 富喜子

ひとり言ゆっくり聞いてくれた花

オクサマですか違いなけど切る電話

この家にもう来ることはふと思う

西空の錦の帯へ立ちつくす

声高な人からすこし距離を置く

西宮市 坪井孝一

相槌を忘れましたかおとうさん
水割りに気軽な嘘を混ぜておく
爪研いだ女房先に高く跳ぶ
ヨーガ塾宿題足を担げという
天婦羅そば入れる鉢だけ日本製

西宮市 亀岡哲子

藤の房分けてひよっこり母の笑み
割高の少量バックなお余し
雹降って頭の回路目を覚す
度胸試すチャンス狙っている蛙
真似てまだ鳴らぬ草笛空広し

西宮市 井上信子

渡し船無料と聞いて待っている
サイズ優先おしやれ二の次三の次
写真から父の思い出たぐり寄せ
笑ってる父支那服姿北支の地
父恋し五十回忌はとうに過ぎ

西宮市 刈田泰司

苦勞したそぶりは見せぬ太い指
水墨の屏風車窓の雪景色
苦笑してごまかしている人違い
高い高いした娘がスチュワーデスになる
天高い秋へ若さのダイエット

西宮市 井上松煙

初夏の風五感さわやか基に挑む
スポーツの技よりおしやれネックス
老い忘れ気の向くままに翔んでいる
花あげてお菓子をもろう垣根越し
医療事故身内に医者が欲しくなる

西宮市 秋元てる

根回しは要らぬと息子意気盛ん
気負い過ぎ槍の穂先が震えてる
未だ丸く治める力秘める母
頼らねば暮せないから言葉選る
古里の冷たい夏を今も案じ

姫路市 古川奮水

路面電車バスに追われて旅楽し
坊ちゃんに見習い道後だんご食う
パイオフを知らず平和な夫婦独楽
相棒のテンポに合わせ終電車
張合った友が和解もせず逝き

奈良県 渡辺富子

金魚鉢リビンゲ一氣に夏になる
嫁がせて音新しい鉄風鈴
娘の愚痴がおのろけになる里帰り
母の文ゆつくり潮が満ちてくる
一生涯君を愛すと言ったのに

奈良市 米田恭昌

同年の訃報が続く五月間(二月三件)

ミンスカで校則違反の自己主張

ブローケンイングリッシュ身振り手振りが面白い

里帰り潮引いたよう孫が去に

六甲おろしこの一体感は何だろう

大和郡山市 坊農柳弘

言い訳は止そう向日葵見てるから

新車ほしい妻を説得してローン

舌先で転がす男とスコッチと

オーロラの向こうにきらり北斗星

はおずきが弾けて里の盆おどり

和歌山県 中後清史

このラベルほんまもんかと念を押し

力にはなれぬがじつと聞いてやる

隠し芸覚え御披露目したくなり

金貸しのティッシュは僕を見逃さず

チンをする前のひと口コップ酒

和歌山市 桜井千秀

始発駅儀式のように拭く眼鏡

美化された話鵲呑みにされ易し

弾みから言うた世辞です悪しからず

螺子が緩んで反芻さえも覚束かぬ

古新聞の記事から昔呼んでみる

和歌山市 西山幸

咲き終えた花にも声を掛けてやる

おんなひとりを生きてスリムな預金高

新しい朝も孤独と手を繋ぎ

清く貧しく今日のメニユーを考える

標準語がけだるい夏の日の会話

和歌山市 青枝鉄治

胸襟を開けば酒に味が出る

椅子浅く掛けて無心の口火切る

会社での切れ者家で粗大ゴミ

億の税払っていわし食う暮らし

貴方だけ特別ですとダイレクト

和歌山市 牛尾緑良

誤字脱字先ずは気になる仕事柄

川岸で私を待っている小舟

日に干せばかすかに残る過去のシミ

時は流れて脇役が光りだす

名刺入れほどのゆとりと旅に出る

和歌山市 松原寿子

一枚の写真で瞳冴えてくる

愛された記憶網から抜け落ちる

面影を自由に描いて過去を脱ぐ

想い出のレールへこころ走りだす

振り向かず微熱の恋でくい止める

和歌山市 田 中 み ね

預かった双子へしるし付けておく
いい顔をしたい財布が背伸びする
遊んで来た妻を駄までお出迎え
お隣から奇声なかが出たらしい
過信した口から洩れた一大事

和歌山市 楠 見 章 子

六月の雨吹つとばす花買いに
皿一枚きれいに残す魚好き
いたずら書きの中に事実も混ぜてある
鉛筆の濃さライバルに負けてない
反抗のリズムでピアノ降ってくる

和歌山市 上 地 登美代

味方から洩れていつてる内緒事
泣かされて親を泣かせた日を想う
浮かれ過ぎひょいと失言してしまう
ポリシーがあつて右から歩きだす
国会へブツと吐きたいスイカの種

和歌山市 武 本 碧

縄跳びのひもに絡んだロスタイム
4Bでわたしの心ざんげする
腕時計五分進めて初デート
温度差が平行線を引いたきり
人肌が良いつき合いと酒の爛

和歌山市 山 根 めぐみ

挽きながら明日漬ける茄子視野におく
勝手気儘明日の風に今日の風
掌に我慢握つて瀬を渡る
みの虫になつて毎日テレビ守り
大口を悔いて夫の傘の中

海南市 三 宅 保 州

ねつ造でない松島の造形美(初夏の旅から)
瑞巖寺紀州の檜造りとか
奥の細道に観光バスの列
室戸の樹風にひれ伏す姿なり
勤皇の志士に会えそう桂浜

鳥取県 平 井 栄 翁

梅雨晴れの陽が洗濯機回させる
免許証返し八十路が先を見る
札束がころりと落とす官の首
世渡りの裏も表も見のお札
世渡りに死んだふりする道がある

鳥取県 谷 寛 子

改革はいじめじゃないよいたみ分け
老人は医者にかかるな値上げする
薄汚れたバツジ握つてまだ吠える
ブキツチョが精一杯のタテ結び
不器用な家系至つて平和です

鳥取県 さえき や え

夏の知らせそつとみごとに立葵

わからないから聞く恥でないんだよ

花好きを忘れていない夜の雨

清楚な香ささゆりがまた眠らせぬ

ふるさとはのどか棚田で牛が啼く

鳥取県 太田 幸 枝

大風呂敷広げたままでたためない

とんどまつり昨年の厄が舞い上る

待ちに待った皇居に愛の光さす

野焼して春の息吹を誘い出す

庶民からのお后皇居替えさせる

鳥取県 西原 艶 子

初夏の陽に水面が光る風光る

氷より冷たい頬を花で埋め

ときどきは夫に挑んだ妻の乱

輝いた月日が遺影から匂う

音痴でも好きで歌ったふたり酒

鳥取県 奥谷 彩 子

老母が待つただそれだけで里に行く

熱血教師夢の中でも児をしかり

熱弁に一刻洗脳されて出る

プラス思考夫婦のわだかまりを溶き

頂点の椅子に踏絵が落ちていた

鳥取県 乾 喜与志

思うまま首が動かず腰立たず

若者の頭の赤いのはなぜだ

少年の黒い頭を褒めてやり

夕食のおかげグッスリ夢も見る

耳に手を当ててお笑い話聞く

鳥取県 村上 信 子

国の味一つ加えるホームステイ

献立に栄養剤も顔をみせ

わたくしの汗をたつぷり吸うた土

なが生きのお薬ならば笑いましよう

ほどほどにユーモア入れる話好き

鳥取県 林 露 杖

濃淡をなべて青田の風渡る

二十日余の早雷連れて慈雨

大面と猫顔たあいがない夫婦

年金で介護保険をとる狡さ

家中がテレビの前のサポーター

鳥取県 田村 きみ子

大声で笑う淋しいのだろうか

平熱に戻り意地悪ばあちゃんに

頂点でライバル待つている笑い

娘が帰るまで夕食にありつけぬ

泣きにきた野原長閑で凜とする

鳥取県 岩崎 みさ江

バラの棘妻の皮肉に似た痛み
私の顔を刻んだのは貴方

雨しとど豆ふつくと煮えそうだ

月の夜は砂漠の夢をみるラクダ

峠から見る箱庭の泥仕合

鳥取県 鳥羽 玲子

アウトドア鍋に木洩れ日のぞいてる

摺り足の畳でたてるお茶の味

不用品溜める性から抜けられぬ

冷え切った足存在を主張する

抱きあげた時からの縁猫という

鳥取県 上田 俊路

テストでは強く本番には弱い

歩道橋老いの脚力テストされ

火種抱く国がこんなにある世界

虚しくても反核叫ぶでも叫ぶ

植えた田で大合唱の蛙たち

鳥取県 黒田 くに子

寺の風にとつぷりひたる無の心

オクターブあげて男の子が生まれ

待つよりは進んでチャンスつかもうよ

実る日を信じて脛をかじらせる

郷愁の胸に染みいるまつり笛

鳥取県 羽津川 公乃

携帯を持たぬ暮らしを不思議がる
孫からのファックス下手な字も温い

父の日も敬老の日も酒が来る

心太 冷ややっこ駄目夏嫌い

村姑二人続いて極楽へ

鳥取県 原 みさを

物忘れちよくちよくあつて茗荷餅

何も知らぬことが幸せ竹の花

男四人四隅かかえて棺を出す

昨年と同じところに雲の峰

五月病父のパンチにあいに行く

鳥取県 橋本 多哥由

美しい花は手折らず眺めとく

均等法すぐに男も涙みせ

会長のとろろと皆におだてられ

片想い症候群になつてゐる

追い風に浮かれ人生道はずす

鳥取県 西 冲 彰 雄

割り切ればなるほど烏白く見え

居心地のよい末席で腕を組み

石橋も叩けば不安湧いてくる

腹の中晒せば楽になれるかも

割り切ってみれば自分が皆可愛

鳥取県 國 森 武 子

忙しく生きてる事に感謝する
一軒の家でも括るむつかしさ
私よりしつかりしてる娘をたより
娘をたよる歳かな七十一なのに
ゆつくりと生きてみようかこれからは

鳥取県 小 谷 孝 美

一呼吸おいた言葉がやわらかい
薄情な影が私について来ぬ
回復へ祈るリングを長く剥く
共稼ぎ土日休みの子が愚痴る
夕焼けの赤は私の味方です

鳥取県 鳥 羽 直 市

不器用でとてもあの世に渡れない
幸せだ達者で今日も起きられる
ふる里を見る夢いつも温かい
年金のお陰ふたりが生きている
野放しで育ったお陰挫けない

鳥取県 山 本 正 光

スタンドが噴火しましたW杯
ふれあいの楽しさ増えるボランティア
再会に笑顔の用意つづけてる
ごきぶりの足数えてる閑なひと
神様の許しで飲むの何故悪い

鳥取市 岸 本 孝 子

フルコース夫とふたりのまつりです
草餅を食べると亡母顔を出す
ボランティア暇な人とは限らない
親孝行同じはなしを聞いてあげ
金髪を嘆いておれぬ世となった

鳥取市 夏 目 一 粹

そのままの姿を保つ難しさ
字余りのように外れている子供
タイミングよいテレホンに助けられ
少年の声にはいのち満ちている
廃車場の一台とてもよく光る

鳥取市 富 山 檳榔樹

盆の短夜 女の胸に虹が立つ
鼻筋のきれいな女が騒がせる
どじ多い老いの二人は短気なの
ノーと言う決意の裏に凄みあり
もう一本だんだん妻が聞こえない

鳥取市 杉 本 孝 男

梨の花咲いて受粉の愛を待つ
旅先で受けた情けに生き返る
熱唱の演歌にわが身置き替える
ポケットに磨いて欲しい石がある
無農薬自慢のサラダてんこ盛り

鳥取市 前田 一枝

あらためて指折り数え差しむかい
しみじみと話し合ってる歳の数
アーメンも念仏もない輪をつくる
おぼろ月二人歩きに肩よせる
必要な時だけ利用される顔

鳥取市 山宮 愛恵

百歳のパジャマ ピンクのかすみ草
子に還る白寿かわいい母である
好きな花すきな花瓶に誕生日
日暮らしへと入れようかフラダンス
ころころと行ったり来たりするころ

鳥取市 徳田 ひろこ

雲海を泳ぐ女神の夢ごち
コーヒーにふたりの時間溶けている
両の手の趣味シーソーのゲーム中
児らの声垂れ幕にして祭り寿司
振り向いて小さな影を確かめる

鳥取市 福島 庸二

行間に伝えたいこと滲み出る
噴水のようにアイディア湧いて来ず
寝ころべば心の視野も広くなる
国中の心を奪うW杯
あれそれと言葉がすぐに出て来ない

鳥取市 福永 ひかり

親にしたことを子供に返される
頭打つまでは仕方のない若さ
聞いてやるうちに答を出している
写経する一筆ずつに気を入れて
代々の墓改装の大仕事

鳥取市 加藤 茶人

あの時の若さ返せと妻の愚痴
何ですかベイオフ私には無縁
只だから下げる頭にある野心
野村さんの野の字も忘れファン心理
倅せと思えば腹も立てずすみ

鳥取市 田中 瞳子

鏡見る楽しみくれた美人の湯
困難の向こうにきつと広い道
悲しみの極致は笑い声になる
子に渡す星だ汚さぬように住む
元が付き未練たらしくなる名刺

鳥取市 福田 登美

夏祭り不況忘れて踊り抜く
苦も楽も背負って向かう喜寿の坂
逆境の坂で静かに歩を合わす
どん底の過去には触れず陽は昇る
美しく老いたし心あでやかに

倉吉市 山中 康子

天と地の恵みに笑う梢たち
歯車が錆びたのか出不精になる
あやめ池あなたの好きなむらさきに
興奮はサッカー熱に血眼で
雷鳴に梅雨入り宣言されてうつ

倉吉市 米田 幸子

あつさりと負けを認めて野にくだる
宇宙人みたいな顔のガングレロ
年金の当てがい扶持で出ず入らず
幻のように悲しい恋でした
裏通り天下御免の席がある

倉吉市 野口 節子

初任給はたいらしくプレゼント
他人の知恵借りて人間やっている
熱い血がやたら喧嘩を売りがる
母ちゃんの食欲だけは逞しい
老境を女にもどす薄化粧

倉吉市 松本 よしえ

図書館に行くと真面目な顔になる
うちに無い新聞バスで図書館へ
持って見て置いて大きい林檎選る
梨ワイン今日は姑の誕生日
店が開くまでにマネキン衣裳替え

倉吉市 猪川 由美子

お隣の枇杷の実おいでおいでをし
生きたいから死にたいなどと口走る
初物へ値下り待つて食べ損ね
要所要所に時計がないと落ち着かぬ
玄関に靴を余分に並べ置く

倉吉市 最上 和枝

灰汁強い男を水に晒そうか
安々と印押し渋いつけがくる
不揃いの安い苺で舌鼓
花散って燕は母の傘を出る
次世紀の地球を案じつつ眠る

倉吉市 牧野 芳光

生かされているなと思う五月闇
逢いたいと思う鼻鳴く夜は
解剖の台に私を載せてみる
海は素直で喜怒哀楽をすぐに出す
掌に乗る幸せも小さくない

米子市 神庭 詩郎

入手先秘密にしてるイヤリング
W杯テレビワイドの方が良い
ホスピスで医師に感謝をして終える
大手商社も偽の産地を表示する
八月に旗日がほしい終戦日

米子市 本吉宗光

昨夜見た夢の婦人を描いて見る
ボート屋の娘に通う若かった
虎走る六甲おろし今日もかい
永田町泳ぎつかれて嗚呼検挙
舌禍では済まぬ首脳の核の言

米子市 木村 富美子

産声を待つ日は風も味方する
双葉から手塩にかけて待つ開花
野仏の鼻ゆらゆらと蝶の宿
笛たいこ二銭もらった村まつり
風切った肩愁傷と野に下る

米子市 野坂 なみ

どの風も待ち受ける気の風車
はや傘寿 自己採点も大き目に
視野にもう花野が近い丸木橋
暮れぬ間にあの峠まで行きつこう
自叙伝の終り夕やけ空がいい

米子市 林 瑞枝

蘇る影はいもうと花の貌
墓洗う落暉のなかで亡夫と会う
不安残して何処まで飛んだ竹トنب
風の名で情けぶつつけ合う仲間
ひとりじめ屋上風呂で見る夜景

米子市 澤田 千春

うっかりと掃いてしまった蟻の列
わくら葉を集めふたたび地に還す
群ぬけてわたしに足らぬ彩さがす
葉の裏で息をひそめる毛虫たち
充電をしてから待とう好きな友

米子市 青戸 田鶴

蔵書の壁ここは祈りの場所だろう
（司馬遼太郎記念館）
かわらない日々へ風穴あけている
世直しをしてくれる人募集中
朝の水たつぷり今日のエネルギー
梅雨空へ少しはなやぐ服をよる

米子市 木村 春枝

待ちに待った雨は鳴物入りで降る
珍客に光っています家の中
群れの中寂しくなると這入りこむ
良い人と信じ時どき騙される
驚きのテンポも少し遅くなる

米子市 光井 玲子

この先の憂いをいつも抱いている
懐のふかいあなたに打ち明ける
開発の波で荒野は生きかえる
頭切りかえてピンチを抜け出した
散る日まで熱中出来るうた愛す

米子市 門脇晶子

學歷に時々風を入れてやる
梅実り私の出番あてにされ
大ルリが飛来部落もり上がる
実りある余生を過す日記帳
恋人をさがして孔雀羽根ひろげ

米子市 中井ゆき

春愁や誰が恋しいわけでなく
つるばらの盛りに母の忌がめぐる
雷鳴に土砂降りの音期待する
年毎にあやまりつぷりがうまくなる
胸一杯みどりの風をもちかえる

島根県 多々納テル子

寒い日の思い出たたむ衣裳箱
老い二人忘れごっこで日が暮れる
ひと言が前向きにする褒めことば
うぐいすの声に佇む澄んだ朝
おにぎりを二つ並べて留守にする

島根県 神原秀子

若葉萌ゆ食欲そそるような色
神様にお神酒も一度手を叩く
雨のち晴ゆつくり化粧直しする
薬缶磨くお湯が美味しく沸きそうな
サッカーにも優雅な攻めをせよという

島根県 伊藤寿美

春になれば夏になればと病夫に言う
待合所いつもの人も待っている
芋の花咲いてわたしの春が逝く
発想の転換南へ向く磁石
傾いた船に魚が溢れてる

出雲市 伊藤玲子

藪になどならないわたしアメンボウ
僕とパパのパンツひらひら海開き
海の宿 去年の鱗落ちている
残照に胸の振りが揺れはじめ
愛しくて欠けたお皿が捨てられぬ

出雲市 岸桂子

少しだけバカになったら楽になる
成長をしたなと思う友の背
人生の旅路で出合う句読点
捨て猫に好かれしばらく相手する
玉手箱昔話はもう時効

出雲市 竹治ちかし

何年に一度の役がすぐに来る
私が立派に死ねるよう磨く
師に恩を返せず昔話する
ちよつと気が弛むと恥が浮いてくる
妻の手が老いた仕種をして見せる

出雲市 小白金 房子

四国路へ心さわやか朝のバス(四回目巡礼)

オハヨウさん牛と対話の朝が来る

牛舎窓開けて青葉の風通す

共稼ぎのシャツに感謝の汗しみる

旅疲れ芯までひたる我が家の湯

出雲市 板垣 夢 醉

谷川の水登山家を喜ばせ

月下美人咲いた頃には酔いつぶれ

完璧なおんな可愛さなどはない

母強し子等のためなら腕まくり

すつと来て仏間回ってトンボ逃げ

出雲市 園山 多賀子

紫陽花の移り気私の不整脈

不確かな噂くすぶる風の罪

句読点打ってから着る赤い服

無精卵何時まで答待っている

卒寿今延長戦を模索する

出雲市 城 多 喜

輪の中にひとりぼっちの椅子がある

波打ち際昨日をみんな捨ててきた

脳細胞そろそろ喝を入れ直す

ハイカラ好き漢方薬を煎じてる

颯爽と立っても四尺余の身体

出雲市 久谷 まこと

W杯年寄りも皆くぎ付けに

青葉風嬉しい噂乗せて来る

ガス燈の匂いが夜店らしくする

晩酌のさかなに妻の小言付く

思い出を秘めた写真の色も褪せ

出雲市 小玉 満江

転んでもまた立ち上がる手負い猪

世は流れ昔の町が消えて行く

ほうたる来い里の小川のなつかしさ

残り物集め母さんまた太り

人形のドレスは胸を誇張する

出雲市 青山 久子

光ってはないがやさしい靴である

ごろり寝て孤独の影をやりすごす

満月が覗いてくれる部屋がある

青春の墓標南の海にある

あの頃はやさしかったね麦ごはん

出雲市 吉岡 きみえ

誠意をもって詫び状かいてます

兎小屋朝日も夕陽もよく当たる

退屈で何度もポスト覗く癖

母の忌が近く日毎に枇杷熟れる

ほほ染めた人はいずこか流れ雲

松江市 錢山昌枝

残り火が東へ西へ翔び回る
姉妹旅年齢順に草臥れる
茶断ちした訳をしつこく聞く湯呑み
先ず薬服んでから聞く一大事
逆立ちをすると右脳が走り出す

松江市 佐野木みえ

五月晴 乾いた風と薫風と
窓半分開けて百合の香誘いこむ
窓開けて紫煙の行方目で追って
洗い髪月下美人と世を過す
引き返す事も出来ない石ころ道

松江市 小川注湖

松江観光 堀川木橋杵に生きた
色黒の九一の蕎麦は新名所
入社式スタート台は横一線
アイディアが銘菓を育て店盛ん
古希の兄融通きかぬ殻つくる

岡山县 小林妻子

茄子トマト美味しい物は宵に食べ
仏より一つ手前の駅にいる
曼珠沙華憎い男を思い出す
温もりを背に残して男発つ
悲劇続いて再会の夢立ち消える

岡山县 矢内寿恵子

あの人もこの人も居た花の駅
火傷せぬ位置で色々きいている
無駄に歳重ねていない生き字引
誤字当て字誰にも負けぬ温か味
ゼロ金利不況のり切る風を待つ

岡山县 福原悦子

追憶の手紙たどれば亡母の貌
詫び状を神妙に書くペンの先
気の重さ出欠の○に悩んでる
夢追うて蛙ふる里蹴つて出る
古希となりもしもの乳房抱いている

岡山县 大石あすなろ

持ち駒のたった一つに賭けてみる
発想の転換をして闇ぬける
胸襟を開くと靴も軽やかに
欲しがりません我慢で耐えた戦中派
予定にはなかった老いの乱気流

岡山县 山本玉恵

四季知らぬ野菜をえらぶ白い指
帯といて今日をしみじみふり返える
手の鳴る方へ傾き易い老いの性
笑い皺じんわり過去を物語る
変体仮名のような女と差し向い

岡山県 富坂志重

思ひ出にひたる日だまり老い一人
笑い声せまい家から流れ出る
今日よりも明日が面白いように
がらくたの中で気がねのない暮し
天国に遅刻する気でまだ生きて

岡山市 川端柳子

無理はもうよそいい子にならずとも
センタク物かわく位のしあわせ度
安全地帯に咲いて侘しい花一輪
吸殻のひねりつぶされ証拠品
亡夫からわがまませよと指令来る

岡山市 井上柳五郎

さわやかな薫風うれし友たより
単調な日々うちよろで消えてゆく
八十路坂延長戦のようほやき
不審船消耗品に人の子も
北斗七星頭上仰いだ青春記

倉敷市 井上富子

美容室一皮むけた蝶になる
嫁入道具の一つになった縫いぐるみ
寿司ネタが撥ねる海辺のレストラン
泣き虫も男一匹独り立ち
札束の浮き輪を投げる親心

竹原市 古谷節夫

老夫婦一足す一を今日も生き
昭和史の反省点が消えそうで
沈黙が続く激しい怒りかも
太陽も月も好きです千切れ雲
無免許で講座の講師する勇氣

竹原市 岩本笑子

体震わせてファックスが今届く
さきイカのこれから長い長い夜
一休みしたらアジサイ彩を変え
消しゴムが転がってゆく過去未来
梅雨晴れ間 蝶も私も出かけよう

竹原市 石原淑子

夏草と格闘してる梅雨晴間
ひっそりと山紫陽花の人を恋う
鶯とお薄いただく昼下がり
ワールドカップ梅雨前線も押し上げる
人生のパズル解けないまま五十路

竹原市 三宅不朽

五体満足体重計も夏は夏
はやいものがあるかも余命表
蛭とぶこころお寺が荒れている
丁寧なおまわりさんでな恐い
人生暮色さよなら言うも書くのにも

竹原市 時 広 一 路

採血の前日休肝日にしよう
雨模様少しコーヒー濃く入れ
塞翁が馬で私は閑居する
芳名帳すっかり畏まる右手
要点だけで良から頭がバンクする

竹原市 森 井 菁 居

役に恵まれた嬉しい汗を拭く
見る人はちゃんと見ていた陰日なた
スタートのミスがあとあとまで響く
実力に添う野心なら持ち給え
フリーガンの無風へ物物しい警備

宇部市 平 田 実 男

釣り上げた魚がねだるプレゼント
これ以上塗ると仮面になる化粧
変人が凡人となり下がる支持
酒煙草僕は高額納税者
地下足袋に軍手が僕のユニホーム

熊本市 永 田 敏 子

手のひらを返されて知る人の裏
途中から話を奪ういやな風
言いたいのが切り切るほどの力ない
話し合いをこじらせている我田引水
利き腕はまさかの時に温存し

熊本県 岩 切 康 子

週六日プールに通うダイエツト
先生の熱に引かれて従いて行く
念ずればチャンスはきつとやって来る
畑見のたびに草抜く二三本
自信家を痛めないよう言葉選る

熊本県 高 野 宵 草

二十年無事故ペーバードライバー
目にものを言わせるつもりつけまつげ
生垣の伸びた新芽に詫びて刈る
車修理のんびりバスの窓景色
無駄づかいの憂さも詰めてるゴミ袋

唐津市 樋 口 輝 夫

もう駄目と財布が叱る梯子酒
知らぬ間に妻が抱いてた不発弾
心太 突けば涼しい風が吹く
空財布花名刺だけ生き残り
太っ腹と言うが勘定やかましい

唐津市 山 口 高 明

民宿の親父と一夜酌み交す
あの女も苦勞絶えぬと噂され
良いおとこ見れば女房も眼の浮氣
村長の奢りで困む地鶏鍋
同僚のあらを探して伸し上がり

唐津市 井上勝規

ほろ酔いの納得の句が朝しほむ

一生で二軒ぐらゐは建てた酒

車椅子 指図ばかりの父を押す

エンマ庁の関所手形に集印帖

ムネオハウスに似た事業ならタンとある

唐津市 久保正剣

植山の手前で余生折り返す

ラストダンスそれまで天女居てくれず

ペイオフも失楽園にも縁がない

白桃や儂きものを恋と言う

新薬のテストと知らぬ末期癌

唐津市 市丸晴翠

まっとうに生きた証の指の節

休日には孫と並んだ割烹着

リハビリの効果か杖を置き忘れ

地下鉄の駅が吐き出す蟻の群

腰痛も自分で治す医者嫌い

香川県 池内かおり

梅雨空もプラス思考に切換える

お隣と手を取り合つて蜂退治

ニガウリと胡瓜が手足からませる

イメージが膨らむ瘦せる化粧品

ピヤガーデン和気あいあいで暑氣払い

香川県 川崎ひかり

金の要る話になると風邪を引く

六十の手習い先ずはマウスもつ

楽屋裏あたりに落ちてゐる本音

夏草の中に埋もれし無縁墓

スッピンになると幼さ残る顔

香川県 清川玲子

精検の結果に首を長くする

さつきから犬が散歩を待つて居る

支えてゐるはずが逆さに支えられ

始まりを支える朝のフライパン

一〇〇〇号手にする時も元氣です

香川県 成重放任

名水に勝るわが家の井戸の水

予期しない出会いが決めた人の道

明日があるだから人間生きられる

転た寝の間に終わる名ドラマ

苦しくも未来を築く玉の汗

松山市 丹下美津子

五線譜をはみだす夫 祝い船

娘の家へ行つても母は独楽鼠

子沢山あてにはせぬが宝もの

朝夕を土に祈つて土に生き

ひめゆりの塔花を捧げて涙する

松山市 宮尾 みのり

ともかくも柳の枝で生きのびる

劣等感に折り合いつけて生きている

体重計もう昔には戻れない

雑念を捨てると土鈴音もやさし

ふっ切れぬ思いへ雨が降り止まぬ

高知市 北川 竹萌

左右点眼薬の赤と白

晩酌の御蔭安眠十時間

スッキリとした目涼しい朝を起き

さりげない帰郷教え子集い寄る

ふるさとの鎮守に残す句碑一つ

高知県 赤川 菊野

不手際な政治何時までつづくやら

国会へ嘘発見器送ろうか

アリランの哀歌身にしむチマチヨゴリ

七十路まだ老いたと思つた事がない

他人から見れば私は果報者

高知県 小澤 幸泉

ストレスを溜めるお人の過食症

支持率は変われど姿勢くずさない

眉を引く娘の夜が他人めき

六十年生きた男の笑いじわ

そこだけは温もり残す待合所

青森県 西谷 大吾

歳時記に老いのロマンをあそばせる

義理一つ曳きずってゆく蝸牛

輪の隅で蟻がせつせと穴を掘る

よされよされと出稼ぎ村の陽が落ちる

夢売りがどこにも居ない北の街

黒石市 相馬 一花

ケータイはあるがお金も妻もない

心配で夜は眠れず昼眠る

料亭でお膳をまたぐ裾模様

ほろ酔いの獲物を誘うアリ地獄

太棹で津軽の意地を確かめる

十和田市 阿部 進

逢える日を指折り数え待つている

北国の果てはリングの古里だ

誠道を一途に歩む老夫婦

ペイオフが気になりません無一文

己を信じ結果を信じ生きる日々

弘前市 岡本 花匠

かげろうに見えかくれして夏帽子

薄味になれて苦笑の父の背

マイナスイオンあの手この掌で売りまくる

リハビリの尊い汗が虹を追う

ねぶた祭り腰据え見てる岩木山

弘前市 中山雅城

靈山に懺悔ざんげの声がする
参道を横切る蛇の親子連れ
出張の合間を縫った囲碁クラブ
温泉で羅漢に出合う梨花の旅
城下町火縄の匂いする屋敷

弘前市 一戸ツネ

ギラギラの水面に架ける橋を編む
バラを折る恋は闇夜の侵入者
空腹に感情線は支配され
いい風が吹いてくれます絵日傘に
紺碧の空に焦がれた竹トンボ

弘前市 蒔苗果林

眼が見える耳が聞える歩け歩け
白髪でも抜けば痛いぞ生きてるぞ
田植機に馬上の騎士が夫の顔
泥とろり溶けては稲の背を伸ばす
めぐる風稲よく実る指導員

弘前市 宮崎ヒサ子

サッカーが愛国心を掻き立てる
小旅行気持すかっと切り替えて
一抜けて胸にぽっかり穴があく
窓開けて心の笛を吹いてみる
紫陽花がもう咲き出している今年

弘前市 福士慕情

体調が悪くて妻によく当たる
痛痒い出物身体を回りだす
悶々と布団蹴飛ばす吹き出物
薬待つ間も病んでいるからだ
ヘルペスに占領された肩と胸

弘前市 相馬銀波

こねすぎた素案小骨が見当たらず
辻褄の合うまで捏ねるくせがある
憧れも期待も混じる好奇心
明解な説にときどき落し穴
長梅雨に草の元気な休耕田

弘前市 今愁女

W杯地球儀まわす知らぬ国
十二人目の選手サッカー盛り上げる
姦しくやませみが呼ぶ初夏の山
含羞が見たくて触るおじき草
不似合いと知りつつかぶる日除け帽

弘前市 櫻庭順風

ばたばたと黄泉路に友が駆け急ぐ
辿り着く傘寿を踏めぬ新世紀
少しづつ余分を捨てて笑って死
明るく楽しく生きて大往生
一足お先に旅立てたらしいね

弘前市 小寺花峯

和泉市 西岡洛醉

笑い皺消えて酸素が薄くなる
結び目が解けて明日の日が恐い
茜雲夕陽が沈むかくれんぼ
手ごたえはないが明日を信じきる

弘前市 須郷井蛙

貯金箱時々重さ振って見る
私も中古になった老眼鏡
お隣へ行くにも少し化粧する
難民の記事見て粗食もうまくなり

静岡市 安本晃授

ペン牀に余生を託す趣味の道
言い訳の語録集める古日記
不渡りの言葉が溜る蟬時雨
深呼吸するとカラカラ胸が鳴る

大阪市 寺井東雲

どの花も皆早く咲くこの温さ
趣味を持つ女は若く見えてくる
新しい世界待ってる再生紙
妻の口ごめんと言うた事がない

大阪市 玉置英子

スーパが増えて店屋は閉めていく
咲き継いで玉紫陽花が今見頃
日本でゴーン トルシエ名を挙げる
蚊がブーン黙って刺せばいいものを

ゆるゆると生き善人と言う歩幅
心地よい風窓際で妥協する
定退後ネクタイの彩ほつとかれ
地獄見る思いで済んだガン検査

岸和田市 木村正剛

子等も皆すすめてくれるポックリ寺
押し売りを見事に帰す妻の芸
胃薬か鍼のどつちか効いたよう
命より生保会社が心配だ

河内長野市 植村喜代

父似かな姑が言ってた変り者
鯨の靴並んで買った頃思い
幸せな人ばかり見る日は淋し
自由があつても淋しいと言う独り

交野市 山川日出子

サッカーの俄ファンが釘付けに
サッカーで覚えられたよ国の旗
日の丸の手拭い買った外人さん
六月は玉に蹴られて走り去る

吹田市 野下之男

心配と比例している酒の量
隅に咲く花も微笑み忘れない
神様も応じ切れない籤の運
頓堀にジャンプする夢僕も見た

大東市 児玉 蛙

十字路の風が迷いを混ぜかえす

人生の残り火もやし趣味の道

きつと出る芽に声かけて明日を待つ

ころんでもプラス思考でまだやる気

枚方市 鈴木 政子

四条大橋托鉢避けて小走りに

絵手紙にこれなんの絵と鼻折られ

大相撲日本男子が消えて行く

瀋陽の日本領事館四面楚歌

枚方市 安達 忠央

タクシーを頼みましたと追い出され

世渡りに持ち歌二つ三つつあり

喉が涸れ演歌それからうまくなり

下手なりにカラオケ和む場所となる

神戸市 中村 ゆきを

姉のよう汁粉おごられ女専門

赤ちゃんのあくびがひとつ午後となる

ワールドカップ地球儀で国確かめる

チチンブイブイ極楽浄土来ておくれ

神戸市 池田 善守

アンケートうそとまことが混じり合い

電話で喧嘩会えばニコニコ母娘

町中に元氣振りまき神輿ねる

このごろは何でも歳のせいにする

西宮市 菊池 トミエ

柿若葉影ひろがって風揺れる

介護法一人住まいの不安抱く

若人がすべてをかける毬ひとつ

仲良しのサイクリングは颯爽と

海南市 谷口 義男

老齡の計報聞いても気が減入る

終章を飾る頁の墨をする

粘り抜き意地を通した頑固者

マスコミが先走りして書き立てる

鳥取市 西村 黙光

お疲れね喉にからんだ三次会

風荒れて礼儀作法も疲れ出し

疲れとる薬酒屋で買って飲む

疲れたへ笑顔で妻は酌をする

鳥取市 美田 旋風

アジサイがわが家の春に花を添え

ポイ捨ての灰皿になる家の溝

口下手もペンを握れば世相斬る

美人へはお助けマンが来るドラマ

鳥取市 山本 益子

夫の後スローテンポでしずしずと

平等のことばを交わす主義を持つ

エンマにはふるさと弁で語ろうか

四月馬鹿大きな夢を食べました

鳥取市 田村 邦 昭

古時計亡父と同じしかめつら
食欲が甘いチラシに笑われる
熱病が冷めて大人の仲間入り
たより待つ郵便箱を撫でてみる

鳥取市 宮 協 道 子

好きだよと言われた怖さ知っている
幸運の風が頼りで球を打つ(ダランドゴルフ)
床柱というブライトで艶を出す
タンポポの綿毛どこまで飛ぶのやら

倉吉市 淡 路 ゆり子

減反盛り瑞穂の国は今いずこ
階段を上がって下りる物忘れ
病む夫へ丁寧な剪む足の爪
ノーマイクこれも変装公休日

米子市 白 根 ふ み

同じ血が流れる山車の肩と肩
ヒョットコもあすは祭だねむらせる
老いの背なピエロになって野に消える
地に低く咲いて無益な風をさけ

米子市 永 井 三津子

出会い系メールに見えぬ陰の罨
独りっ子分けあうぬくさ知らぬまま
婚約の指輪鑑定してもらう
傘の下小さな恋が芽吹きだす

鳥取県 近 藤 春 恵

長生きしときどき遺書を書き直す
敵に塩送って城を守り抜く
好きな道破門されても迷わない
やりくりをしても赤字が埋まらない

鳥取県 西 川 和 子

町村合併僕の生き方まで変わる
朗らかな人で明るく送られる
辛かった昔話は朗らかに
セピア色集めてみかん箱に詰める

鳥取県 吉 田 孔 美 子

一人には一人の元氣パンを焼く
安心の枠ですながーいローン組む
命なり夜には枠を緩め合う
寝て起きてまたていねいに米洗う

鳥取県 下 田 茂 登 子

古希過ぎたおとこが見せた嫉妬心
古い二人トラブルばかりくり返す
嘘で固めた人生だって道はある
お隣の元氣に少し妬心湧く

出雲市 石 倉 芙 佐 子

一寸だけくすぐってみる足の裏
北壁が好きな男の寒い背
肌寒い朱夏の女にしてみれば
頑固一徹嘘のつけないお方です

出雲市 富田 蘭水
麦わら帽思い出いっばい夏がくる
緑陰に瞑想己れ深くする

同じ道歩かぬ事にした幸い
麦秋の風ふんわりと乳にふれ

出雲市 岡 あきら

踊りたい人ばかりいる楽屋番
手を借りることを覚えた台所
句読点朝の散歩にのびている
踏まれても馬鹿正直のままの雑草

松江市 安食 友子

あやふやな悩み水辺で怯んでる
ハミングで絡ませた指内緒です
親戚で伍長が唯一上だった
スピード化開花せぬ葉に卵ちゃん

松江市 津川 紫晃

母さんのカラクリ鍵が開けてある
遠い思慕紫陽花の雨音もなく
風の日のテトラポットが昼寝する
玉葱の皮に見つけた人の欲

松江市 川本 畔

梅雨空に寝められつづけ梅熟れる
古里へバスはだんだん席があき
譲り合う一等席は空いたまま
焼香の列へすつくと席を立つ

神戸川柳大会事前応募作品募集

課題 「棒」「愛」「石」各1句
未発表句に限る、重複投句不可
応募要領 便箋1枚に題名と作品、郵便番号、住所、氏名(雅号)、電話番号を明記
応募料 1,000円
締切 平成14年8月31日(当日消印有効)
投句先 〒654-0053 神戸市須磨区天神町3丁目1-6 恩塚 治子宛
選者 神戸川柳協会理事
選考 平拔2点、佳作3点、秀句4点とし、全選者の入選句の総合点上位の方を入選とする(同点の場合は受付順)
発表誌 大会当日に配布(大会欠席者には大会終了後送付)
賞・表彰 各句特選1、準特選1(賞状・楯)、佳作3(図書券)
平成14年11月23日開催の第25回神戸川柳大会当日に発表、表彰する(詳細は10月号に発表予定)
主催 神戸川柳協会

第5回井笠川柳会笠岡誌上大会

薬 ひこばえ

課題 (各題2句・3名共選)
「飛ぶ」「越える」「映える」
斉藤大雄(札幌) 小松原英介(神戸) 河内天笑(堺)
和田 宏(今治) 濱野奇童(久米南) ト部晴美(神戸)
川上大輪(和歌山) 北村泰章(高知) 三浦 宏(呉)
応募料 1000円(定額小為替) 発表誌送付
応募要領 B5大用紙1枚に計6句列記
郵便番号・住所・氏名・所属柳社・電話番号
締切 14年8月20日(火)
投句先 〒714-0081 笠岡市笠岡507-68 井笠川柳会宛
TEL.0865-63-5858 FAX.0865-63-6131
お問い合わせは戸田さだおまで
賞品 1位に石碑贈呈(3名・本人希望句・1年以内建立)
3才には楯品呈(句碑獲得者除く24名)
会員募集 新会員募集しています。
年会費1000円、年4回あすなろ発行

自選集

橋 高 薫 風

路郎忌に酒を手向ける比翼塚
その昔も昔のかき水
写真抱きしめる女も居なくなり
鮎吐いてはて面妖な鵜飼の鵜
去ればとて胸にジダンはお屹立す

河 井 庸 佑

風見鶏思案の風が吹き続く
さりげなく気持を探る謎を掛け
ライバルがそつとのぞかすかくし球
親切も程度を越せば疎まれる
冷静さ欠いた短慮に残る悔い

川 島 諷 云 児

八月の記憶たどればきこの雲
慣例を破ると風の的になる
祝電を打とうわたしの誕生日
老残の皿にください花の種
禁酒 禁煙してまで長生きしたくない

木 村 あきら

工 藤 吟 笑

黒 川 紫 香

小 西 雄 々

声涙も下る玉音聞いた夏（八月十五日）
トンネルを抜けると碧い空がある
子に渡す地球を汚してはならぬ
置き手紙リングを一つ乗せてある
ボロボロの地球へ一本樹を植える
緑映え野点の釜に湯がたぎる
残業の帰り熱燭が待つている
お隣の温い情けに救われる
旧姓で呼ばれ和やか同窓会
程ほどの嘘で縁談まとめられ
君と僕歩きながらに未来など
何気なく授けてくれる手が優し
恋人のような顔して従いて来る
頂上は東西南北みんな雲
涙拭いて決意のほどを見せに来る
リハビリへ明日につなぐ汗を拭く
手話の指苦勞実つて笑い合う
逞しい男も魔女の矢に弱い
父の背にほたえた跡は見当らぬ
月澄んだ池へ身籠る予感抱く

小林 由多香

職安へ人を求める影がない

三度目の正直まではあきらめぬ

恋すすむ微熱が出たり下がったり

長男がむかしのように跡つがぬ

求愛に行ったか猫がもどらない

斉藤 晶

チヨークもう持たぬ指先豆を蒔く

美術館の透明感に包まれる

土曜の子汗が輝くボランテア

胡瓜苗のみどりの深さ信じ切る

どしゃ降りのドラマ演じている野菊

田口 虹汀

紫陽花を観に行く車回します

源氏螢が橋の左右に二百匹

幸せ一ばい孫が明治の手を引いて

死にたいと言う老人の気が知れぬ

急がなくとも良い時迎えに来てくれる

竹内 紫鏡

橋に立つ鋳物は花火開くの図(隅田川めぐり 3句)

高欄パネル 川面に透かす力士像

ああ出征 名は勝鬨の橋が建ち

蛍光探傷 柱のひびがたと記録

飛び出しの画像を撮ねるシミュレーター

玉置 重人

遊びなはれカネは貸しますコマーシャル

蹟いて人情薄い街と知る

万歩計お濠の鴨とウマが合い

海征かばあれは老父の泣く声か

織田作がここに生きてる自由軒

月原 宵明

万歩計帰りは何か提げている

ネクタイがうまく結べぬ定年後

絵になった雨は斜めに降らして

落書を笑って読んで通り過ぎ

台所のどこかに金庫ある内緒

恒松 町紅

好きな事出来て治らぬお節介

子沢山は昔話の炊飯器

欲がまだ強くて歳を忘れてる

もう誰も家風は継がぬ花手桶

バスの客内緒話を覗かれる

遠山 可住

素っ裸ひとりの自由ひとりの哀

嫁ぐ娘に立派な母にしてみらう

スリル追う青春切符握りしめ

若者語何や知らんが笑っている

八十路坂そりり地雷が埋めてある

土橋 螢

昔からおなじところに陽が沈む
鐘ひとつ鳴らして愛に応えよう
万緑の隅に蠢めく兜虫
戦いを癒すふたりの立ち泳ぎ
夏まつり男の甲斐性試される

仁部 四郎

火葬場で近代科学を学ばされ
葬列を避けて燕の前夜
死を祀る席に嬰兒泣いてみせ
死を祀る宴にピエロ一人居る
サッカーに倦いて減税論を観る

西田 柳宏子

適切を絵に画いたよに行き届き
何はさて結果よければすべてよし
上役と一緒に並んだ被告席
軽い気で言うた冗談こじれ出す
残念を絵に画いたよな今日の雨

西村 早苗

いもかばちやいくさの事も久し振り
風さつと胸のつかえをなでてゆく
紫陽花の匂い終着駅あたり
風有情ひそかな思慕を聞いている
カッコウに目覚め田舎の久し振り

野村 太茂津

今此処で嘴容れぬ溜めている
ブライドが容せぬらしい無視しよう
遠会釈 白内障という無礼
指痛むラストボールを捻り過ぎ
円画いて昨日の円を思い出す

野田 素身郎

誘致した企業の増設おめでたい
顧みて何をなしたか七十余
好きだった演歌の歌詞も忘れがち
あつてはならんことがまたあるわが日本
自家製の野菜づくしでもてなされ

波多野 五楽庵

函館の駅ほど寒き物思ひ
花いちもんめたつた一人になりました
湯の花やここに修禪寺物語
ヴィヨンの奈落を知つていた枯葉
追憶の中でためらい傷を掘る

藤井 明朗

初盆が来てまた思い出の友の顔
日本の四季も変化地球の温暖化
男女同権女性が強くなるワイン
水害へ負けじと家族役がつき
ワールドカップ四年後の日本期待大

藤村ノ女

三歳児もううそ泣きをする頭

父と息子とまたもめている将棋盤

案内の義理が重たい熨斗袋

自分ながら無欲になったあと寂し

夕顔の仄かさという老いひとり

舟木与根一

八十の坂だ小石に氣をつける

婦唱夫随 空氣が少し汚れてる

火葬場で人間のカス見てしまう

独学が身につき頑固譲れない

仕合せは今日も薬を飲み残す

芳地狸村

神殿を花で染めてる元出雲(出雲大神宮)

幸せを呼ぶ千年の招霊樹(招霊樹)

境内の隅に鎮座の夫婦岩

百年の雛を迎えるレストラン

なで仏ふとんの中の泣き笑い(穴太神社)

宮口笛生

酒酒酒酒が長寿の秘訣です

酒うまい間は元氣印です

盗人酒スリルがあった酒の味

幸せは酒の泉で溺れ死に

怒っていても酒の肴を作る妻

森下愛論

糸緩め情けのかけら落ちる膝

4Bを削って弾む第二章

モノクロの街のビジョンは身透かせぬ

たとう紙に老いの秘め事納めおく

バラ一輪グラスに浮かべ雨の部屋

八木千代

わきまえてからは開かぬ白い花

淡々と話す乱など越えたから

修羅越えたらし柔らかくなる翼

傷ついた蛍よみんな寄つといいで

水草に蛍かくまう部屋がある

八十田洞庵

盛装を脱げば乳房もほつとする

勝者の背は美酒に酔うてる隙がある

鬼瓦欠けて氣位まだ地主

終着駅着く道のりは地図に無い

睡蓮だモネが手招きしてくれる

両川洋々

罪深い両手に無欲言い聞かす

音の出ぬ太鼓で神は起せまい

おしゃべりな枕禁欲しろと言う

ごめんだねあの世の下見など要らぬ

ケイタイで浄土予約をしておこう

単純に過ぎてファイトが空回り
日日達者少し曲った道だけど
微熱少々何かが少しずつ迷う
焦っても駄目よと妻の目が笑う
だまされたふりして小言聞き流す

阿 萬 萬 的

石 川 侃流洞

入院初日雑音もなくいい気分
欲ためて鯉にはなれぬ手術台
手術終え拳開けば汗を溜め
禁酒禁煙力が抜けて行くベッド
湯煙の中に無欲の首が浮き

板 尾 岳 人

故里へ戻って来いと水車小屋
水車小屋水汲み上げて観覧車
観覧車初恋の人だった妻
妻と来たアメリカ村で腕を組む
腕を組む夫婦見ていた東大寺

奥 田 みつ子

王国の名残り豊かな街に佇つ(沖縄にて 3句)
太鼓打ち踊る少女の凛々しい目
哀しみが丘の形に横たわる
新緑に染まらぬ心持てあます
あやふやな心を揺らす青嵐

神様の使いか野火へ風が出る
ああ野火よわたしの恋のよう燃える
掃かれても蟻は一途の列つくり
日向ほこ話が合わぬことばかり
よく見れば蟻にもなまけものがある

越 智 一 水

河 内 天 笑

かまきりの子が紫蘇の森闊歩する
鈴なりの枇杷ひよどりと分かち合い
くつきりとやもりの影の誘蛾灯
土がこもこ みみずが群れているのです
夏ですな蟬にオシッコかけられて

しまね文芸フェスタ2002年 島根県川柳大会

会 場 浜田市総合福祉センター
日 時 9月1日(日) 13時30分～16時30分
会 費 1000円

欠席投句

投句料 1000円 (小為替・切手不可)
投句先 〒695-0102 浜田市宇野町245
佐々木裕 方 (大会事務局)
TEL 0855-28-2917

投句締切 8月20日 (厳守)

兼題と選者 (各題2句)

「日 本」	小林由多香 (鳥 取)
「ゆっくり」	尼 れいじ (出 雲)
「海 」	佐々木 裕 (浜 田)
「山 」	船津 重信 (桜 江)
「芸 」	田中美禰子 (益 田)
「食 べ る」	景山嘉寿子 (順 原)
「隣(となり)」	川本 畔 (松 江)



板尾岳人選

神戸市 木村 忠義

島根県 松本 聖子

定年後豊富な時間生かさねば
今日もまた充実の日にする^なと決め
毎日を動かしているのは自分
文化都市蹴りたい石が見つからぬ
ひまわりに元氣を出せと励まされ

横浜市 川島 良子

争いはいつの時代も女偏
おしどりの仮面が揃うツアーバス
あの日から笑い袋が閉じたまま
ムキになるほどのことではなさそうだ
加速する老いへブレーキかららない

町田市 土田 今日子

茶柱に今日の期待を込めて見る
子育てを終えた自信が若くする
二人きりだから適度な距離を置き
オーバーに笑って暮らす二人きり
実力を過信しすぎてまた転び

無力です仏に悩み問うてみる
仏様今日も無事です手を合わせ
百選の水五臓六腑をかけ巡る
洗濯で心も洗う日本晴れ
洗っても心の傷は癒えません

大阪市 三浦 千津子

ボーカーフェイス母は何でも知っている
三行ではハガキが余る独りです
ひよっとしてもしやもしやの籤を買う
余生かな貧乏話に落ち着ける
ハードルを越えた瞳が濡れている

今治市 渡邊 伊津志

偏差値は低いが福引きよく当てる
葛藤は他人を理解する努力
咲いたから握り返した淡い恋
こまやかに翡翠の光 鳥が舞う
群鳥の食卓となる田を鋤ける

羽曳野市 福田悦子

行く雲が残していった夏の詩
過疎の村 盆は都会の風が吹く
ふるさとに帰っておいで風の盆
まか不思議ラムネの玉が出て来ない
ゆく夏になごりを惜しむ水中花

河内長野市 大西文次

年寄りと気付かず吸うた蚊の頼馬
アルミ貸がおしくらまんじゅする財布
アパートの窓で懸垂する肌着
消えそうで消えぬ残り火とおしむ
遊ぶのも案外楽でない余生

野田市 那賀島雅子

セーターの編目にうづく記憶あり
四角ばる言葉で受ける留守電話
豊かさに馴れてストレスためている
訪販の故郷の訛りに買わされる
のどの飴ゆっくり溶かしひとり住む

松江市 三島 崧 丘

激流に打たれた石の面構え
破壊され地球の芯が怒りだす
野も山も萌えているねと風の私語
野心捨て余生無色の風になる
一枚の落葉が崩す水鏡

鳥取県 細田裕子

ペイオフへ溜め息ひとつ夫の肩
ペイオフへ銀行よりも金庫買い
れんげ草気持ちやさしくなる夕べ
雑草の世界も強いのが残る
降り注ぐ緑のシャワー草踊る

鳥取県 前坂美佐枝

金がなくても天国に行けますか
人の字のようにあなたに寄りかかる
招かざる客と呼ばれぬようにする
先のことあしたの風につてから
今度こそ綺麗な紙に生みたい

鳥取県 西垣美知子

地に還る落葉が何かいつている
夕焼がもうやすもうと野にしずむ
沈黙の人が大きく見えてくる
待つ事に慣れたかあさんひとりごと
八十路でも肌の手入れを女です

鳥取県 平尾菜美

身の丈にあった歩幅で進みたい
幾山河こえて母なる海に出る
やり直しする盲点が弱音吐く
その先は言うまいせめて縄をなう
青空のある稜線にいやされる

鳥取県 蔵本悦子

ワテンポ遅れあなたについて行く
愚痴言うとやさしい亡母の声がする
日焼けした夏にハートを取られそう
しっかりと地球に握手しておこう
不景気に赤い服など着れませぬ

鳥取市 永原昌鼓

家事以外できぬ女で丸く生き
愚痴ちゃんと詰めて袋の口閉める
割り勘に無理して飲んだ二日酔い
脳みそをいじめて呆けを予防する
念入りに化粧 やる気があるらしい

鳥取市 森美智代

雨音に紫陽花生きる顔をする
雨つづき三面鏡も開かない
細胞をとろとろにする小糠雨
明日吹く風を信じて身の軽さ
アルバムは空白のまま遠い過去

日立市 加藤権悟

善人の掌からこぼれる下手な嘘
雑兵の我が家ベイオフなど無縁
無冠だが父の背凜と山になる
どの子にも死角に父の傘がある
六甲の虎は王者の貌になり

東京都 やまぐち 珠美

こめかみで誠意の塵をかみくだく
地蔵様ころのトゲは抜けますか
ジョーカーをまだ掌に見つけない
反転の途中で軋む風見鶏
妻にまで手軽なウソをつきたがる

札幌市 三浦強一

涙壺笑い袋は持っている
地価下落また遺言状書き直す
猫はもうねずみを追わぬ進化論
胸中に鬼心仏心住んでいる
花曇り薄墨で描く古都の塔

川崎市 中村泰竜

ベルが鳴るトイレの列がまだ長い
旧姓で呼ばれ瞳が遠くなる
券売機日本に駅が多すぎる
鼻唄が聞こえる長湯無事らしい
電話取る妻へ居留守のサインする

川崎市 塩澤ひで

マイペース等と逃げ込む無精者
うす味が身につき感性忘れ去る
気紛れの運に善人酔って居る
待ち呆けそれならそれで別の夢
出雲から遠い娘に縁が無い

横浜市 石原三郎

補聴器に頼つて見たが裏切られ
芍薬にいたずら雨が妬いている
無口でも気の合う人に喋り過ぎ
姿見よ少し正直すぎないか
お変りはないが毎日医者通ひ

横浜市 山梨雅子

池の鮎もどれるつもり餌を食ひ
半袖に肘の手入れを慌てさせ
不況風社宅こわされ売り出され
新聞を読む体調を知らされる
去年の今日入院とある日記帳

横浜市 巖田かず枝

日韓の歎喜の波の青と赤(W杯 3句)
ルールなど知らぬ私もオーレオレ
若者の君が代聴いて安堵する
友からのピタミンEのメール来る
厄除けにいつでも赤を身に着ける

神戸市 両川無限

いい人だ必死に嘘をついている
影法師僕の器を確かめる
子に譲るルートに種を蒔いて置く
なあ蟻よ遊び心はないのかい
脱皮してそれから僕の進化論

神戸市 伊勢田 毅

バツサリと家裁が切つた赤い糸
年甲斐もなく直球を投げ急ぐ
鼻寄せた妻にバレてる盗み酒
突っこみとボケで夫婦を四十年
年金の範囲で済ます軽い旅

神戸市 田中章子

人生の向かい風をも楽しもう
友のあさがす自分に花を買う
空々しい世辞でも今はうれしいわ
雨の日に幸せの数かぞえます
健忘症わたしの昔友に聞き

京都府 前上英一

徒花になれない意地を茄子がくれ
沙羅双樹の花が無常の音で落ち
満たされず不遇をかこつ腕枕
バラ色の画布に未来の絵を描こう
ゆつたりと時流れゆく盆の風

橿原市 安土理恵

それからの恋です叱ってくれた人
無理したが酸欠つづくフルムーン
原点を辿ればそこに妻夫
ブラスマイナスなにも考えない二人
これでよし幸も不幸も平均値

奈良市 乾 春雄

捨て切れぬ靴が知ってる修羅の道

あだ花と知るもときめき抱いて待つ

水面下レールが敷いてある人事

別れ際握手の中にある内緒

やすらぎの椅子は妥協の隅にある

和歌山市 松尾和香

エイサーは祈り平和の風になる(沖縄 2句)

宝物珊瑚の泳ぐ母の海

墓参り生きた証の日課なり

説得の言葉やんわり首をしめ

頂きへ挑む私の八合目

和歌山県 中村君枝

行列へ何はともあれ並ぶ癖

鼻唄で湯船溢れるほどの幸

メロドラへ気丈な妻の涙つば

嘘ぼろり口止め料の効果なく

橋杭岩赴任の夢を懐かしむ

高知県 桑名孝雄

利休からオーイお茶までお茶という

午年で走行距離が伸びている

あじさいも都合あつての色替わり

補聴器の値ほど入って来ぬ噂

君が代もちゃんと歌えるサポーター

今治市 野村清美

凍りつく心へ母は湯をそそぐ

目を誘うあざみに刺の護身術

紙切符渡すルールの縄電車

もう少し眺めていたい陽が沈む

待つ事に慣れて笑顔の月見草

香川県 伊勢八重子

手を借りて貸して余生を長らえる

もう間近 菩提樹咲くという便り

母の住む里へ向かつて行く螢

また来ると納骨すませ子等帰る

アルバム of 昔を開く雨の午後

香川県 原 賢

燦々と大地を走る車椅子

半世紀過ぎても消えぬきのこと雲

金持つと人の道から外れそう

文明のボタンが押せぬ老いの指

いつ出るか椅子を蹴飛ばす虎の貌

富田林市 稻川恵勇

限界を知りつくしてる向こう傷

冬眠を知らぬわたしの好奇心

生前の艶はなしあり満中陰

美人には聞きわけがいい福の耳

初恋の素敵大事にして夫婦

大阪府 前田 忠子

吹田市 須磨 活恵

雨だれに濡れて遍路のありがたし
鶯が優しく招く遍路みち

へらず口叩かずいい子したい古希

脳みそをOFFにしている日向ぼこ

ひらひらとダンスパーティー金魚鉢

大阪市 熊代 菜月

歯にきぬを少しはきせて輪の中に

困るほどもてる夢みてうなされる

逢えそうで逢えない人にやつと逢え

市場籠あしたの元氣疑わず

杵組の通りにならぬ自我を持ち

高槻市 大崎 侑子

当てにせず頼んでみたら首尾やよし

頼むのも頼まれるのもお付合い

やるべきをやりもしないで神頼み

闊歩する破れジーンズ超おしゃれ

二駅で化粧仕上げた女の子

八尾市 平川 幸枝

視界から亡夫を捉えて離さない

しみりの話に昼を慎ましく

バランスを保ち富山の薬売り

年金とバランスをとる保険料

三人居てひとりボーッと風の道

曖昧な妥協を嫌う花しようぶ

生命線確かめて見る水無月

冷奴 器に夏のセリフなど

ひと鉢の花を余生の友として

悪友と言う名の友でうまがあい

吹田市 二宮 栄子

労りがなかった足に詫びている

厄年の息子に神のはしごする

ペイオフに名義貸すよと子の電話

人の愚痴拾って勉強しています

古里を山ほどつめて荷が届く

吹田市 木村 無祿

あの頃の兎は月にもう居ない

秒針は無心に僕を過去にする

公害に地球逃げ出すかも知れぬ

通勤のラッシュに遇うて若返る

老いらくの意地でも男捨てられぬ

吹田市 木下 敏子

ついて来て背筋伸ばした影法師

このままの倅でいいモーニング

割り切れてひそかにはずむ老いの毯

参加する意義に拾った自分の絵

二人だけになった夫婦の旅靴

東京都 清原悦子

結末が意外な方に向いて行く
お互いの汗を氣遣うありがたさ
悩まずに人の心は悟れない
咲いていく花もいつかは枯れていく

川崎市 小林久美子

旅に出て萎えた心の数伸ばす
消化せぬ怒りをにぎり湯に沈め
花好きの友がいるから旅に出る
出しゃばれば陰でみんなに叩かれる

藤沢市 妹尾安子

年金の暮らしそよ風にも揺れる
別腹を用意して行くバイキング
雑巾になつて母をなお絞る
信用も包む老舗の包装紙

横浜市 鈴江純子

丸呑みの噂私を変えてゆく
曲がり角若葉マークが舞いそこね
ママに似たキミの欠点目を瞑ろ
天国の師に逢える日へ技磨く

横浜市 三村八重子

油断した隙に本音が軋げ出る
くやしさをごまかす道化の高笑い
説得に別れてからのほろ苦さ
嫁姑隙間をうめるアリガトウ

横浜市 荒井広和

ほっとする景色を描く雨上り
旅好きを花と団子で誘うバス
ほどほどの至福で酔っている頑固
千匹の鬼も靡かす母の愛

横浜市 長島亜希子

改札機わたしの惚けをはじき出す
弱味握られているから距離をおく
花よりも団子で夫婦息が合う
毒のない人で友達寄ってくる

横浜市 布山嘉信

がま油筑波みやげに生きている
排煙の街路樹山を恋しがる
あら探す心に鉾が向いてくる
夢見るは澄んだ山河の水芭蕉

横浜市 秋元和可

青虫も一緒に買った無農薬
残り火を燃やして飾るエピソード
食疑惑自給自足を考える
つなぐ手に母が重なる花の道

横浜市 金森徳三

ひがみ出る老後の記事が多過ぎる
銀行もタンスも変り無い浮き世
意地にでも日本の野菜買っている
W杯熱気を冷やす梅雨の入り

新潟県 高野 不二

サッカーが嫌いな者もいるテレビ
まだ生きる積もりで古稀を武器にする
父の日へ今更ほしいものがない
一円の利子を葉書で来る通知

岐阜市 平野 あずま

苗木植え地球の緑子に残す
種も仕掛けも消えて夫婦の渋い味
私を褒めていたのは私だけ
値引きにも黙って浅蛸耐えている

草津市 久保 和友

玉碎も戦友会も死語となる
ブーゲンビアア友の遺骨はないだろう
あの花は南の島で覚えた名
火を見れば折鶴見れば原爆忌

京都市 清水 英旺

一つだけ胸につかえるしまい風呂
亡き母の命日の朝沙羅が咲く
真夏日を露払いにして梅雨の入り
ぬるま湯がすっかりなじむ歳となり

大阪府 高木 道子

ホームラン打って味方に叩かれる
飼い主に似て老犬が手抜きする
甘い水見付けて蛍乱れ飛ぶ
お気にいり花を見付けて蝶二匹

和泉市 小坂 凡英

有事法案 暢気と真面目同居して
説明を聞いても解せぬオフサイド
力抜くコツを教えて欲しいのだ
DNA身体に染みる浪花節

泉佐野市 稲葉 洋

足音の歩調合わせときな臭い
これだけがたのしみですと酌手真似
口だけが何とか老いを防いでる
縁切りの神と知らずに掌を合わせ

大阪市 伊藤 博仁

菅公に母屋とられた道明寺
もう一度元にかえって考える
墓参り ようきんさつた藤の花
嫁取らぬ愚痴をこぼしに墓に行く

大阪市 岩崎 公誠

よく読むと葉の効き目書いてない
老骨は首肩腰と弱音吐く
自分史の虚飾の橋に穴があく
肩書きを捨てた転身殻を抜け

大阪市 中村 忠敬

安心が不安にかわる有事法
手古摺った次男に今は介護され
想い出を泣いて断ち切るシユレッダー
鍛えてる猛暑の夏よどんと来い

大阪市 平井露芳

梅田出たついでにジャンボ買うて来る

前の前何だったかな銀行名

身内から認めてもらた部分ボケ

風呂好きの湯カンで清め永遠の旅(母九十歳死去)

大阪市 辻本登季子

プロ野球ない日は心静かなり

阪神が勝ったと言つてまた一杯

約束を軽く考え友無くす

私がブランドですと古服着

大阪市 寺井弘子

阪神が負けて夫の嘆き節

健康にお金のかかる歳となり

重い税納めて軽く遣われる

嫁姑 本音で絆確かめる

大阪市 伴洋子

ジंकスをイチロー軽く吹き飛ばす

やましさに墓穴を掘っている多弁

退屈を見ていたようにチャイム音

夫の知らぬ妻はキラキラ光ってる

大阪市 池上清治

伴奏を物ともせず節はずれ

新人が億で買われる野球界

入札に頼み甲斐ある私設秘書

予定表すぐ塗り替える妻の風邪

大阪市 尾崎黄紅

焼き芋が好きは昔の貧に耐え

貧知った頃から識った詩ごころ

古書の舗 明治大正近くあり

絹と木綿で恙なく老いを過ぎ

柏原市 永浜加津子

梅漬けるおんな冥利へ梅雨の入り

見たくない物まで見えて老眼鏡

絡み糸業が深くてほどけない

ストレスの解消それはヒミツです

河内長野市 木太久正一

ふる里は我が足跡と知る旅路

健康にこだわる妻のプロッコリー

一杯のコーヒー朝のセレモニー

餅は餅屋 鶏肉店で買う卵

岸和田市 亀井皎月

盆栽が大樹の肌へ夢託す

目標が嬉しくなつて日が待たれ

あの肌が好きで望んだ志野茶碗

足の爪切る専用の鉄買う

堺市 藤井一二三

姑の愚痴 夫へ倍にして返し

青テント男の夢を仕舞い込み

くず餅の跳ねて青葉の皿のうえ

二人きょう若葉のなかを結ばれる(平井太郎君結婚)

大阪狭山市 羽田野 洋介

いつの間にか口数増えたひとり言
ライバルのミスを密かに期待する
ご常連と言われるほどの柄でなし
夕焼けが一番似合う鐘の音

大東市 南 原 正 和

生きるため知りつつ渡る地獄橋
那智の滝 唯一筋を永久に生き
打ちようで丸い太鼓も怒り出す
潮騒に海女の息笛生々し

高槻市 乙 倉 武 史

豪快な男歌い手村田逝く
失敗と挫折は人を大きくする
長い目で若気の至り目をつむり
晩酌で苦楽ひと日を締め括る

高槻市 執 行 稲 子

子離れに親馬鹿またも躊躇する
大絵皿見事に咲いた牡丹刺し
兼用傘にすべて委ねる雨予報
花嫁を窺うベール風に舞う

豊中市 藤 井 則 彦

名曲を聴いてる顔はベートーヴェン
カタカナの社名と合わぬ首脳陣
干し物を狙い撃ちする俄雨
甲子園雨なら今日は休肝日

羽曳野市 森 下 一 知

合理化に昔気質が背を向ける
投げ売りの時刻を妻は見計らい
突つかれた図星に眉を吊り上げる
還暦を過ぎて見え出す人の顔

枚方市 二 宮 紫 鳳

転勤にエールを送る宅急便
傷心の心をいやす童歌
童歌唄うと母が近くなる
梅雨晴れ間洗濯物の大合唱

藤井寺市 西 村 栄 一

コスモスが風と可憐に遊んでる
サンマ焼く煙で今日も無事に昏れ
身の丈の合った暮しで平穩で
夕焼に感謝しながら鍬洗う

藤井寺市 吉 田 喜代子

紫陽花の首を心配てんこ盛り
来る夏に買った水着にダイエツト
家事終えて避暑に行きます図書館へ
炎天下お好み焼きが出来そう

藤井寺市 若 松 雅 枝

飴と鞭使い分けた母の知恵
うやむやに終らせまいと旗を振る
母笑顔胸の奥とは裏腹に
爽風に老いを躲して靴が鳴る

箕面市 寺井柳童

衣替え和牛に化ける輸入肉

横町の居酒屋大將ばかり来る

青大将ことわりもなく顔を見せ

夫と行くフルムーンなら辞退する

八尾市 山本宏至

若い日に積んだ苦勞が生きている

コンビニのくらしのしむ妻の留守

お経よりガイドがうまいお坊さん

改札機なんとかしこい奴だろう

八尾市 田中トシエ

一坪の庭にも自我の種を蒔く

敗戦忌 故郷の海は夕焼ける

責任が無くて有るような祖母で居る

独り立ち さて身は軽い荷は重い

兵庫県 安達厚

一つだけ持って逝きます内緒ごと

彼岸まで行けず流され喜寿迎う

ラッキョ漬け老いの一日暮れました

最高の暮しと思う古希の日々

兵庫県 岩本美緒子

千五百掘れば湯の出る火山国

ライバルの奢りサービス軽く受け

早い目の身仕度笑う老い追うて

ひとり居に花風景の和み庭

尼崎市 山田耕治

おしゃれしてもハンドバッグを櫛かけ

ネクタイを直す母の手うるさがり

初出勤後姿を母拝み

カラオケで菊池章子を歌う歳

尼崎市 河津正治

気まぐれな風におびえる冬苺

氣を揉ます落ちぬ約手は冬の底

生さざまを晒す鯛より雑魚であれ

ライバルも変人という変り種

池田市 多田契子

糸くずを拾う目と腰まだ若い

別れたと嬉しがる友いるのです

黄昏に想いふくらむ雲一つ

街中に独りの私溶けていく

川西市 井本清山

ご無沙汰の顔が揃っている法事

孝行のつもりで墓の草を取る

立てば腰歩けば膝に出る老化

欲少し捨てれば楽な老いの坂

神戸市 山口光久

過去の染み人目憚り折り畳む

自己主張ぶつかり合って雨模様

頑丈な突っ支い棒の妻の腕

割り勘で本音の話できる仲

篠山市 谷田多美子

子等が来て湧いた力で鋤を振る
えんどうと玉葱もたせ子等は去ぬ
レモンティー恋の行方を聞くニュース
初なりを夢に植え込む黒い土

宝塚市 飯西ミサヲ

かくれんぼ上手な彼は行ったまま
往復切符あれば行きたいところあり
荒波にもまれはじめたランドセル
そこで結構そばで咲きたいかすみ草

奈良県 江波正純

しみりと自分の顔と対話する
出来たての草もちを手にチャイム押す
ライバルはピカソ セザンヌ ルノアール
お土産は買ってくるなと念を押す

和歌山県 森下順子

究極のかたち両手を合わせてる
賑やかに南の話するつばめ
大阪へ出ると背筋がシャンと伸び
身の丈に合うた荷背負うかたつむり

和歌山県 橋爪佐一

階段の手すり持つ癖つい覚え
プロポーズ余生考え焦り出し
皴はなし自信を持てと言う鏡
検査好き医師にそのつど血を採られ

和歌山県 根田美子

絵手紙でアンパンマンが飛んでくる
定年の夫いばって台所
お互いに加減みてする腕相撲
ケータイで娘にメールする夫

鳥取県 竹信照彦

酒飲めば時が止まった顔をする
サングラスかけて涼しく日焼けする
川掃除缶や袋の怨み聞く
有事法 軍需景氣を目論むか

鳥取県 岩崎和子

砂浜に寝て平等に陽を浴びる
小説の中でわたしは主人公
日本語も気候も何か変な世だ
晴れた日の胸の高鳴り靴みがく

鳥取県 吉田弘子

僕よりも三日長生きせよと言う
汗知らぬ横領億の値がついて
がらくたも子供の目には宝もの
熱いうち打った鉄にも謀反あり

鳥取県 橋谷静江

三文の徳と早起き六十年
一本のシュート泣く国笑う国
小砂にも妥協する気がある力
また一つ今日も学んで暮れました

紙一重境界線の運不運

鳥取県 澤 裕子

半端では引けぬ女の意地もある
てんこもりの夢が指から洩れて行く
糟糠の妻とテンポが添うてくる

鳥取県 鈴木 一弘

部品変え器用に回す口車
核の傘さして地球は踊ってる

古時計ねじを巻いても休みがち

喜寿の庭春雨に咲くほけの花

鳥取県 福西 茶子

腹括る時は戦闘服を着る

野あざみの棘はブライドかも知れぬ

野仏に往く道問うた渡り鳥

縁談もキャンセル待ちという不思議

鳥取市 山口 千代子

生きてる証爪や白髪がよく伸びる

紫陽花も人も暮らして色変わる

昼も夜も海を見ている赤い靴

何気ない会話の中で知恵を得る

島根県 毛利 幸

元氣だと風の便りに安堵する

新緑の薫りの風に酔うている

風向きが弱い私に味方する

恥ずかしい気持でおしゃれ六十路坂

入れ知恵はやはり無理ですお人好し

青汁を一気バリウム飲むように

同情は要らぬが聞いて欲しい事

斜めから吹く風だから避けられる

安来市 原 煩惱児

農婦古い棚田の手植えはかどらぬ

日本語が下手でカタカナ語をしゃべる

興国論 亡国論や松枯るる

生きて行く顔が乗り合う朝の渡船

出雲市 荒木 英子

春うらら好みの匂う部屋にする

甘酒にそろそろ頬も桜色

大波小波越えて七十路趣味の道

高野山延命願う老い二人

松江市 松本 知恵子

サポーターめいて蛙が雨に鳴く

パイオフの窓口の花見て帰る

時間さらさら止められぬ砂時計

しとしとと青い雨降る胸に降る

松江市 山根 邦代

腕時計外し田舎の風の中

気分には負けない意地が顔を出す

変化する社会私を置いていく

笑顔には負けて怒りを吞んでいる

岡山県 国 米 きくゑ

九官鳥が巷の噂しゃべってる
昨日今日速さが違う砂時計
悪女にはなれぬ目尻の笑いじわ
逆らわず流されずして今日がある

岡山市 藤 原 一 平

腕つぶし強いが情にもろい人
時どきは酒で洗って丸く生き
口出しをしたばかりに流れ弾
許すとは言わずに父は逝ったまま

倉敷市 撰 喜 子

介護した重い足どり月優し
松林抜けてみどりに染まる顔
サスペンス終章に来て夜が明ける
朝が来てにつこり今日の無事祈る

因島市 村 上 和 輝

きこの雲あれは悪魔の吐く息よ
妻の吐く吐息を僕が吸ってやる
吸い取った吐息で僕の重い肩
五十年いうこと聞かぬ妻という

竹原市 正 畑 半 寛

大石小石みんな無口で仲よしで
大好きなお地蔵さんの石頭
石一つチャボンと海の旅に出る
いつの日か石よ語ってくれないか

北九州市 岡 田 幸 生

旧友と街でばったり拉致される
幸せな手帳につまるスケジュール
寝たきりにならぬ努力の万歩計
輪の中に横向く顔のある不安

唐津市 坂 本 兵 八 郎

上役が小さくなってくるお酒
嫁さんを鎮守の森が募集する
取り巻きの世辞が掘ってる落し穴
語り継ぎ祖父を偉大な人にする

唐津市 岩 崎 實

植込みで筆取る吾に鳴く小鳥
感触のズレが互いの気をそらし
老人会おしゃれ話が喜ばれ
食べきれぬ料理三泊して帰り

香川県 松 村 輝 夫

玉の汗真面目な人に見えて来る
朝風呂に菩薩の顔で浮く余生
切れる世に昭和の知恵も借りてみる
誤魔化してハッキリ言えず干支で言う

愛媛県 黒 田 茂 代

紫陽花の雨に唄えばウツが晴れ
幸せ行きの電車なかなか来てくれぬ
オーイ鳩そこは立入禁止だよ
君の名はと問いたい花が多くなる

愛媛県 安野 案山子

深緑の鼓動を聞いた風車

好き好きと書いて私の恋終わる

紫陽花の色鮮やかに梅雨へ入る

少年の日に帰れない蟬時雨

今治市 塩路 よしみ

人間の森でひしめき合って生き

振り向けばわたしひとりの影法師

泣きごととは言わず添うてる紅しうが

乱舞乱舞蜚は恋のランデブー

松山市 高橋 宏 臣

丁寧にお客帰してからの愚痴

法的に問題のない不人情

やんわりと攻めてきたのは修飾語

胃に悪い話は止そう君と僕

松山市 古手川 光

マイホーム ローンを知らぬカタツムリ

立て板に水が私を疲れさせ

自己主張強い胡瓜は落ちこぼれ

バブル後の世相や平家物語

高知県 百田 幸

苦勞した過去の扉は鍵をかけ

馬鹿にされ馬鹿になりきるむつかしさ

三拍子揃っているにまだ独り

財産がなくて兄弟仲が良い

高知市 小川 てるみ

度を越すと分かる手足の油切れ

老化する脳へレモンの丸齧り

山幾つ越えねば行けぬ親不孝

四面楚歌芯の強さを試される

南国市 小原 圭 二

放流をされて天然になる鮎

手のひらに世間知らずの蜚乗る

正座したまんまで死んだ籠の鳥

米粒の頭脳で生きていた小鳥

青森県 福士 ト キ

出かけますまず仏壇に留守頼み

朝食は背中合わせの飯とパン

スニーカー今朝もわたしの出番待つ

落ち椿あなたにもあつた花盛り

秋田県 秋野 宏

群れを出て初めて知った怖い風

深呼吸いくら吸っても無限大

とんで行く草の種にも運不運

ころまで写して見たいレントゲン

アルゼンチン 松井 美稚子

熟年も育ちが知れるねぶり箸

カラフルな女の知らぬ首の皺

姑との同居知らずか豆焦がす

移住地で山はなくとも餅する

東京都 井上 つよし

鶯が練馬まで来て啼いてくれ
二度三度眠れぬ枕裏返し
組板の鯉も冷や汁虫歯抜き

武蔵野市 亀井 円女

見事な花を今年も見せた草の意地
心の中に背中合わせの鬼が居る
病人が笑ってくれたつらい嘘

横浜市 吉田 裕峰

瓢箪の簾夢見て種を蒔く
親も子もライバル同士愚痴り合う
縊り戻し削除メールのゴミ探し

横浜市 芦田 鈴美

足し算を忘れないでと諭す雲
嫌なとこばかり姑を真似ている
まだルール覚えていないサポーター

横浜市 平達也

どの星か恩師を探し天仰ぐ
案じる子案じ控える酒一合
年寄りの酒の肴はほうれん草

横浜市 近藤 道子

人生に難問奇問多すぎる
少しずつ捨てていこうか溜めたもの
生きることに死ぬことに全部八分目

川崎市 浦野 昭志

先代のくれた時計が手に重い
里の駅振子時計に迎えられ
新緑の道ストレス消してくれ

川崎市 大島 三四朗

八十路坂越えてもつれる踊りの輪
梯子酒心のひだが乱れだす
褒められて世辞と本音を透しみる

静岡市 中西 雅

ラップして明日を夢みる冷蔵庫
長生きは立派とほめた医師が逝く
ごぜの三味今は華やかライト浴び

尾張旭市 三浦 きぬ

自分史はあの世でゆっくり書くとする
生命線長すぎるのも良し悪し
頑固者めつきり減って淋しい世

京都市 三宅 満子

ルールなど知らず日の丸振っている
ハーフタイム トイレタイムになつて
ロスタイム時々作り楽に生き

大阪府 大屋敷 婦美子

頬なでるみどりの風で癒される
老いてなお出来る言の葉ありがとう
頑固さは親ゆずりかと納得す

大阪府 藤井郁代

墓参り素敵に生きた五十年
苦しみも笑顔に変えて元気です
夕立でちよつとお話し骨休み

大阪府 畑中節子

青虫がうまいうまいと春キャベツ
焼肉屋ビンチも峠を越えたよう
見残した孟宗の子が服を脱ぎ

大阪府 野田栄呼

いらいらをコップに込めて伏せる夜
除草剤二度にも堪える草の意地
針の矢を向けて山椒は身を守り

大阪府 東文江

毒だみを干してくすりに飲んでます
夏野菜植えて今年も頑張ろう
目の方向かえて素直に余生生き

大阪府 桑田ゆきの

ブランコを押して押された日の記憶
木洩れ陽を背なに揺らして池の鯉
沢庵をさかなに呑んでる独り酒

大阪府 小栢こずえ

山里の夜のネオンはほたるです
お世辞でも言えば歯車よくまわる
切り花にするよりそつと咲かせとく

大阪市 星野きらり

十年先そんな話に乗れません
相合傘へ雨止んでますお節介
おすべりが上手で頂点望めない

箕面市 北川ヤギエ

節目ごと父の鳴らした古時計
お茶でもと誘う真昼のメロドラマ
年金の我が家にもある不明金

交野市 田岡九好

気が良うて気があかんとは変な人
ハイテクとスピードを追いたてる
矢絰がケータイを持つ京の辻

和泉市 横山捷也

少しだけ嘘を交えて妻を詠む
大掃除隠した過去を見つげ出す
言いわけに女口紅塗り直す

泉佐野市 備後三代子

試歩のばすアイスクリーム買いたくて
正調を手古摺るヤング盆踊り
しゃぼん玉ボクもいっしょに風にのる

門真市 矢阪英雄

苔の香を待ちわび鮎にまかせてる
魯山人ゆかりの鮎がこの底に
冷酒を鮎にも飲ますつもりにて

八尾市 中島春江

河内長野市 印藤智子

旅疲れ新茶一服癒される
駅前の一等地住む燕です
重き餌を引っぱり行くも蟻の意地

八尾市 松葉君江

岸和田市 坂口英雄

豆腐から力を貰う喜寿米寿
釘付け軍隊仕込み役に立ち
病む妻に初めて炊いた三分粥

八尾市 與田明

堺市 藤原恵

氣にすれば食べるものない毒ばかり
ノースリーブ美女は腕まで美しい
氣楽そう見るほどでないひとりの灯

寝屋川市 岡本勲

堺市 荻野像山

定年後キッチン夫に占領され
片手間で出来ない趣味と分りかけ
カードでも冥土の切符買えますか

羽曳野市 永田章司

堺市 大橋錦

青天の霹靂実は待つていた
自分史を手がけしみじみ過去を見る
齧る臍 骨が出てきたこの不況

羽曳野市 山本たけし

堺市 河盛龍三

再会の誓い指切りしたまんま
氣負わずに手の鳴る方へ行く余生
時計なら今何時だろ僕の歳

釣り上げるタイミングずれ鮎笑う
忘れない疎開で食べた蒔の味
いつまでも多感な日々でお楽しみ

高槻市 安田 忠子

龍安寺吾唯足知知識

いい仲間集まりゴルフ山つつじ

早朝に二言三言話し声

藤井寺市 伊藤 アヤ子

いつの日か吐いた言葉がはね返る

うやむやにしたいくないから口喧嘩

右ならえすればストレス拗ねてくる

東大阪市 今岡 貞人

いい話風に任せてなど置けぬ

大空へ少年の夢背伸びする

心臓も傘寿の音で脈を打つ

東大阪市 田中 美弥子

夏の日をカンナの赤に負けぬ恋

夫は旅行たまの孤独を楽しまん

若返り期待してゆく美容院

東大阪市 笠井 欣子

銀行で様と呼ばれてかしこまる

不整脈生活までものらくらと

酢生姜の差らうようなピンク色

枚方市 莊司 弘之

雷もにったりしてるへそルック

ワイン持つ小指おしゃれにはねている

温暖化季語の選択迷わせる

枚方市 大昇 隆広

生き下手も上手も里は俺お前

まばらにもアルバムからも娘は嫁ぐ

捨てられぬ浮世暮らしでまだ迷い

枚方市 小川 良吉

朝刊が笑顔で読めて気が晴れる

お互いのチョンボを笑う老いの日々

有事法に軍靴の音を思い出す

兵庫県 徳平 毬子

凍らせて旬の味出す娘の料理

新茶の香亡母笑ってるかしわ餅

嘘ひとつわたし笑って聞いてます

兵庫県 黒崎 美紗子

晴れやかに空も気分も旅を行く

パソコンを叩き若さを呼び戻す

カラオケで気分転換元氣出る

尼崎市 桑原 東園

ピアノ音にタイムスリップわらべ唄

お人好し責任そっくり肩代り

沈黙にこらえきれずに流れ星

尼崎市 軸丸 勝巳

ピカソの絵見せて帰ったサポーター(W杯)

知り合いのレジはおまけに会釈だけ

正直に言いたい事を呑む役所

伊丹市 延寿庵 野 霧

生駒市 小 西 稔

しっかりと罌を仕掛ける出会い系

澄んだ眼が一途にのぞくおもちゃ箱

一步引き死角を突いた立ち話

篠山市 円 増 純 子

生駒市 飛 永 ふりこ

草笛が心に沁みる帰り道

粘り強いだけが取柄の無骨者

念入れた設計図にもある死角

姫路市 服 部 一 典

茶柱が立たなくなった朝のパン

母の愛、袋の口が開いてる

吊革も今は美人を避けて揺れ

三田市 辻 開 子

記念の木花つけ活気もらいましょ

宝くじ何十年も夢ばかり

娘育ち料理も服も若作り

三田市 石 原 歳 子

空の青 鷺の飛翔が調和する

垂直に空に上昇雲雀の子

不況風吹いても平気出世魚

奈良市 田 中 賢 治

カチワリと浜風を待つ甲子園

齒の浮かぬ改革ですか正念場

峯峯を洗って駆ける低気圧

浮世絵の昔なつかし人ごころ

旅先の素敵な眺めEメール

老夫婦 素敵な暮らし助け合い

生駒市 飛 永 ふりこ

針の穴突つけば嘘がたんと出る

浮き沈み越えて夫婦の背が丸く

かしましい声に酔います花菖蒲

和歌山県 堂 上 泰 子

初茄子は先ず新婚の娘へ届け

情念は女の川を越えてより

無位無冠 夫と二人の野菜園

和歌山県 辻 内 次 根

大空は自由 鷲が輪を描いて

有り余る時間球根買ってくる

見上げると空がきれいで腹が減る

和歌山県 村 中 悦 男

家屋敷一巡をして試歩とする

はめ言葉うますぎるから嘘がある

点滴のむこうに見える梅雨晴間

和歌山県 今 一 歩

里帰り宅急便が手ぶら追う

星空が歌っているよ子守歌

ワールドサッカー応援隊もお国柄

和歌山市 宮本三喜夫

人づてに昔の友の噂聞く

旅支度どんな出会いが夢描く

衣かえ気分も新た若がえる

和歌山市 土屋起世子

感動とドラマ サッカーボールから

親背負う息子が白髪染めしてる

心では詫びていながらまた喧嘩

和歌山市 北村光男

仕事なし色々忘れ小鰯釣り

徳利ですああなたの愚痴はもうあきた

仲直り今夜のお菜そつと褒め

和歌山市 前岡健三郎

捨てられず大切にして粗大ゴミ

月下美人妖星白く咲く夜半

人工の孵化で鈴虫義理で鳴く

鳥取県 山下節子

悩むだけ悩んだあげく断わった

余命表テンポだんだん速くなる

人並みにペイオフ悩むふりをする

鳥取県 竹森富久江

淋しい蛾だろう灯りへ寄ってくる

角笛にまだ叱られている農地

妻という籍から荒む手の甲ら

鳥取県 池澤大鯨

立ち向かう勇気があつて講義する

田を濁すことだけならば十八番

出しゃばつて挨拶をする出来る奴

鳥取県 岡村孝明

道草が役立ち今の職に就く

天敵が居て世の中は保たれる

人知れず積んだ善意が幸を受け

鳥取県 河本晴子

風呂嫌いさせないように髪洗う

ポケットできれいになつていた軍手

戸を閉める間に止んだ名なし雨

鳥取県 平木公子

水やりと一緒にことばかけてやり

縁薄く諭吉はいつも通り抜け

魚つり四時起きだつて苦にならぬ

鳥取県 奥田保子

雑草に負けぬ元気が欲しいのよ

愚かでもないのになんで愚妻なの

それぞれの役目があつて生きている

鳥取県 山岡久枝

打水の涼しき庭にホタル舞う

古里の雀恋しい時もある

きれいだな花にもことばかけて水

鳥取県 松川 行男

値下げ分飲んで罰金高くつき
時めいても一度はたく紅の色
生きている妻の指針がまだ恐い

鳥取市 谷岡 清子

燕の子かわいい口で親を呼ぶ
親燕真つすぐ餌を宙返り
分子よね思い切り犬抱いてやる

鳥取市 横田 春名

修羅抜けて小鳥の声がいとおい
ワントンボ合わぬと音痴文句言う
五十年愚妻のままでお付合

鳥取市 岡田 信恵

いじめにも見本のような人がある
説得も無駄だと思ふ反抗期
下着こそこだわるおしゃれほんまもん

鳥取市 近藤 秋星

級一番の美人がいつち嫁き遅れ
カレンダー早半分は過去になり
どこへ行っても日本列島みな暑い

鳥取市 河田 のり代

生きる知恵亡父の姿に諭される
孫の守り出来て幸い生きて居る
バラ色の主の便りは卒寿とか

鳥取市 西尾 敬之介

入れ歯にはアイスクャンデーしみこまず
洪団扇 涼風招んで夏を愛で
掛け声の大きさにほどに神輿揺れ

倉吉市 牧田 賀寿恵

砂すべり草履で下りた大山寺
リストラで泳ぎ疲れて山の宿
草笛を鳴らし得意なおじいさん

倉吉市 前田 喜美子

金づちは浜辺の傘で昼寝する
薄ものに気が重くなる多汗症
除草剤まけば地球も痛からう

倉吉市 大下 智子

星月夜今夜は外で寝たいほど
パソコンに今日の予定を聞く社長
噴水のかからぬほどのおつきあい

倉吉市 森川 あらた

騙されてみようあなたが好きだから
人形は醜いわたし知っている
歯を磨くきれいな息をするために

米子市 小塩 智加恵

少しずつ虎の勝利が見えてきた
どくだみが手ひねり花瓶茶花顔
レントゲン背骨脛骨みんな駄目

(病院で精密検査)

米子市 猪 森 スミエ

出雲市 加 藤 スズコ

議事堂の空で迷った伝書鳩
招かない台風と言うお客様
散らかした部屋に蓋する不意の客

島根県 菅 田 かつ子

鯉のぼり君は未来をどう生きる

出雲市 川 島 和歌子

阿蘇山も風の流れて向きを変え
（九州旅行）
ペイオフに関わりないとパンの耳

島根県 持 田 多輝子

私のホーブは小さな皿に盛る

岡山市 大 森 純子

七難をかくす化粧はほんのりと
その先は言わぬが花と黙秘する

島根県 福 間 博利

蹴躑き骨折の罪道が負い

岡山市 清 水 金太郎

見学でテレビに出ます老人会
縄のれん今日の汚れを洗います

松江市 松 浦 登志子

丘ひとつ越えたら雲をつかめそう

広島県 福 島 万年

空き缶も乾いた音で淋しいよ
手のひらにコトリと落ちた乾き豆

出雲市 梶 ミツエ

待ちこがれ花の都の春が来た

府中市 馬 場 利子

鯉のぼり大きな口で語り出す
北の空満天の星子を想う

鉄入れに未来に架ける虹を見る
ナイターのドラマ重ねる缶ビール
カタカナ語老いも小幅で歩み寄り
花替えて亡夫の笑顔が見える朝
世代交替そろそろ渡す姑の座
粽巻く器用に動く指の先
マスコミが勝て勝てとかましい
いい試合でした結果は負けただけ
浜風も手のだしようなない凡打
また一つ悩みがふえた歳になり
まだ生きて居るのに墓をたててくれ
無人駅だれが咲かすか四季の花
映像にぐうの音も出ぬ領事館
サッカーの陶酔も去り暑い夏
鳥になりたい貴方の側にいる私
衣更え部屋のタンスも置きかえる
この悩み少し溶かして澄むコップ
ワールドカップ世界は一つ弾む毬

府中市 岩本雅代
星光る向こうに恋しい亡母がいる

蛭の灯小川の花火百ボルト
リストラの蛭一匹ひる寝する

宇部市 高山清子

柔らかい嘘で包んで行く見舞

今日も無事亡夫へ感謝の香を焚く

亡母偲ぶ山菜並ぶ実家の膳

沖繩県 杉谷一栄

再会が正夢になるエアポート

信号で乗りたいバスが止つてる

タクシーに客がいようと手を上げる

愛媛県 宮本末子

素足より覚めて棚田の雨を待つ

あの色が文には出せぬ鉄線花

旅疲れさらりと解きし博多帯

愛媛県 花岡順子

二歩三歩歩いて出来た句を忘れ

夕茜母さんがいて僕がいる

胸張つて生きる目線を高くする

愛媛県 山之内八重美

おはようの声が可愛いランドセル

声かけて見れば許せる事ばかり

もうやめて茶髪が美人ふいにする

五十年朝寝願望まだ続く

紫陽花に何色ですと聞いてみる

白寿までの望みページの幕がおり

高知県 貞岡佐紀子

自分史の余白、曾孫顔を出し

年金をためて飴玉買つてくる

夫婦茶碗少し欠けたが未だ割れず

日高市 根岸方子

自尊心余白に埋める笑い顔

歳よりも若いですねと皺みつめ

父の日はビックリ箱に何入れる

第33回 奈良新聞川柳大会

日時 8月25日(日) 10時開場
会場 奈良県文化会館 バス県庁前下車3分
TEL 0742-23-8921

お話 「どうなるこれからの食生活」 武内哲夫氏
席題 「 」 黒川正之進 選
宿題 「直線」 福田秋雄 選
「過去」 大村美千子 選
「涼しい」 芳野多佳子 選
「歩く」 鶴本むねお 選
「智慧」 杉森節子 選
「こぼれる」 西村茂 選
「化粧」 田中新一 選

各題2句 〆切り11時30分

会費 3,000円(昼食、発表誌含む)

出席申込 8月16日まで下記へ

〒630-8244 奈良市三条町606

☎0742-26-0335

欠席投句 500円同封下記へ(発表誌呈)

〒630-8261 奈良市北市中町71

杉野睦朗宛(8月15日必着)

麻生路郎物語

(8)

—古マントと「土団子」—

東野大八

『雪』は大正六年二月に十九冊目を出して廃刊した。その全巻に目を通して筆者の眼を捉えた一つのコントがある。「僕のマント」と題するもので大正五年一月号（六冊目）に載っている。人間路郎の一面を伝える消息として以下、主要部分を抄録しよう。

僕は冬が来ると、きまつた様に叩いたら埃の立ちそうなマントを引ずり出して平気な顔で着て歩く。以前はみつともないと思つて、押入に突込んでおいて夜遅くか、余程寒い時でなければ着て歩かなかつた。それがいつか昼間でも平気で着て歩けるようになった。

このマントは、僕の死んだ親父から兄へ、兄から僕へ譲られたもので、親子三代に仕えてよく忠なるものである。僕がまだ小学校の門を潜つていた十幾年の昔、島之内あたりの名もない洋服屋で進水式をしたのがこのマントである。なんでもある人のついでで羅紗を安く買つて貰い、洋服屋で五円ばかりで仕立て

さしたのだと思う。その時分の親爺は、ある合資会社の一審番頭で月給は僅かだが相当広く交際していたので、会計はとかく足らぬ勝ちであつたらしい。それでも遊び好きであつたから自然、着類の方へは手が届かなかつた。マント代の生地・仕立料三十幾円はそんな苦しい会計から支出されたものだ。

以来、マントの冬が幾度か巡り巡つた。明治四十二年の夏、大阪に未曾有の大火があつて間もなく親爺は脳溢血で亡くなつた。引続いて人のいい兄が戸主になつたので、自然マントは兄の手に移つた。兄はその後、萩の茶屋の郊外に安い家を借りて会社員生活を續けていた。西風をまともにもうけて、毎朝葱畑を抜けていく兄は、いつもこのマントにくるまつていたが、会社を退いて自分で商売するようになったから、殆んどマントの必要がなくなつたので僕に呉れることになつた。

兄でも僕でも段々と親爺に似て、背はすらりと高くなるし、肥つていた肉は自づと落ち

てしまつたので、寸法の上からは左程見苦しくはなかつたが、さて貰つてみると迷惑でもあつた。その頃の僕は高商出のチャキチャキで、ひとかどの青年紳士になりすましていたんだもの、月賦の洋服やオーバーコートは着ていても三十年式の古マントは御免蒙りたかつたのだ。

それからの数年間は僕の野心が東京へ走つたり、大阪へ舞い戻つたりして夢の様に暮らしていた。幾度か病魔に翻弄されたのもその間であつた。それから結婚もすれば金銭問題の苦痛も現実を知るようになった。そうした僕の身体をしつかり抱き締めて僕の心的革命を助けてくれたのはこのマントであつた。僕は毎日平気な顔で旧世紀のマントを着て歩くようになった。僕に第二の心的革命が起つた時分には、僕は一人の子の父になつていた。この調子では僕に二人の子ができることがあつてもマントの新調はとてども覚束ない。僕は天の恵みの甚大なるを想いこのマントに深く感謝している次第である。

「土団子」が『雪』にかかつて発刊されたのは大正七年六月である。上質アート紙八頁からスタートした「雪」にくらべ、こんどは新聞用紙のザラ紙二十四頁、いかにも「土団子」らしい体裁である。同人は川上日車、斎藤松窓、松村柳珍堂、服部ふくべ、麻生路郎

の五人。表紙は小出権重画伯描く二色刷だ。

創刊号目次を眺めると「雪」同人だった藤原游魚、兼崎地橙孫、宮林重哉の作句には、ゴシックカッコ入りで（俳句）。路郎ら五人の作品にはこれもいちいち（川柳）という肩書のカッコ入りである。「雪」誌上には全くみえなかった川柳の文字が、正面切つてここに登場する。かわりに、新短歌の文字はカケラも見えない。本文のはじめに掲げた古マントの感触を、角張ったゴシックの川柳の文字の底に感じざるを得ない。「高商出のチャキチャキ」が「心的革命」の第一次試験に精神陶冶され古マント（川柳）に還る象徴とも受取れぬこともない。

新柳誌「土団子」の誌名は、六厘坊が「葉柳」を創刊する以前に発刊した同名の柳誌（二号で廃刊）を路郎が復元したものとみられる。（葉柳Ⅱ第三卷九号にも「土団子」の標題で六厘坊作品六十二句が掲載されている）

「土団子は六厘坊の句および、彼の想い出を載せる目的で出した。これは丁度トルストイ研究の雑誌があるように、六厘坊を研究しまた彼に関する材料蒐集に資するためであった」

（山南樓メモ）

余談だが、右のメモの中に出てくる「トルストイ研究」は大正五年九月創刊号を出し、大正八年一月終刊号で閉幕全部で二十九冊。

ロシア文学研究家を中心に、大正文壇を担う作家がすべて網羅されていた異色A級文芸誌であった。

この本が出た大正五年は、第一次大戦勃発の三年目にあたり、ロシア十月革命の前年で経済界は戦乱の余波をうけて利権あきりに狂奔していたが、同時に大正デモクラシーが国内において頂天に達しようとした頃である。白樺派の理想主義が世界の注目を集めたいわゆる民衆芸術の台頭期である。その時点で思想家トルストイは人道主義のシンボルであった。路郎らがこうした文芸誌に着目したことは、いかにも彼の青年期を抱きかかえた往時の文芸復興期が、ロシア文学を焦点づけて推移していたかがよく看取されよう。もつとも彼の場合、六厘坊がトルストイであったわけでもないが、「土団子」には翻訳もののトルストイの家出より臨終、までのせ、センターウィッチの短篇を収録するなど、路郎のロシア文学への傾倒ぶりがうかがえるよう。

だが、そうした「土団子」も結局、四号をもつて終刊する。時に大正七年十月。この辺で「雪」から「土団子」で再スタートした作家としての路郎の気組は一体どのようなものであったか、その創刊号の巻頭の言葉を要約してみよう。

▼青い玉は静的である。池の中の水である水底に沈澱せる黒い土である。その土に圧せ

られた朽葉である。彼等は遂に自己の流れ行く運命をさへ知らないものである。

▼赤い玉は動的である。天上に燃える太陽である。世にありとあらゆるものを焼かんとする火である。この故に頗る危険である。然しこの危険のない処に真の革命はない。中略

▼宝暦明和の川柳は、この意味で青い玉である。完成した芸術である。江戸趣味の謳歌者は青い玉を憧憬して現代に死せんとする。

▼赤い玉は未完成の芸術を完成した芸術にしようと努力がある。どうしたらこの芸術を完成させることができるかという煩悶がある。

▼ここに我等は青い玉の上に赤い玉を建設することを宣言する。わが「土団子」は、柳界の平和を打破して、新しい川柳王国を築くために放たれたるピストルの一弾である―路郎生。

このような意気込みの中での路郎作品とはどのような傾向か。同誌創刊号に「須磨雜観」と題し、二句三行組で新作十一句がある。

○

ひるのふろ

あを葉のかげの

おとこ

○

いいたいことは

風に吹かせて

海へうみへ

○
右のようなスタイルの句で、「土団子」四冊に計三十八句を発表している。

—手紙を書いていれば朝顔の花

—よくきてくれましてと髭がのびている

—泣き顔をみせずお茶漬だけは食べ

以上の路郎作品は、いわば「雪」の新短歌後遺症?ともいへば傾向のもので、後年の彼の作品系列からすればとるに足りない句が多い。

「土団子」は菊判24頁だが、これが廃刊の直後の大正八年六月、路郎の印刷発行人で「後の葉柳」が出たが、厚紙二つ折四頁の一見ハガキ通信を拡大したような体裁のものだ。その創刊号に川上日車が次のように書いている。

「ゾラは自分の書いた物に自然主義という名をつけていた。そして其主義のもとに自分の作品を公にしていたが、了いには主義そのものの為に束縛されて、終りに書いた二、三部はごく窮屈な物だったさうである。私は遂に窮屈で終わったゾラ其人をほんとうの自然主義であつたといいたい。

私等がかつて雪という雑誌を出していたのもやはり主義の爲であつた。それから雪を廃刊したのも主義に縛られて動きがとれなくなつた結果である。この頃ではこう思っている——人間は余り主義とか、主唱とかは持たない方が結局、世の中が太きく渉れて面白い。少

くとも自分だけは自由である。けれども主義のない行動は往々、動かされ易い欠陥が生じる。それさえ気を付けていれば、主義なんかはこしらえぬ方がよいかもしれぬ。

元來、川柳に主義はない筈だと思う。川柳そのものが既に大なる主義である。和歌俳諧の踏込めぬ領地を全部川柳が拓いてゆけばよい。それを川柳であるのなのと自ら狭くする必要は更になのである。自覺して新しい道に進む者も認めてやれば、江戸趣味を研究してその道に止まっている者も認めてやるがよい。所詮は皆川柳のために力を尽しているのである。邪道だからと言って新しい道を塞いで了へば、残る水の中はきつとほうふらがわくに違いない」

筆名は日車だが、あきらかにこの主張は路郎そのもののそれと考えてもよさそうだ。

この「後の葉柳」の同人は木村半文銭、川上日車、麻生路郎の三人である。エリート意識を満喫した形の文芸誌「雪」からみれば、はたまた故六厘坊をめぐる活気横溢の「土団子」に較べれば、寂寥そのものの同行三人との感慨は深い。わずか三枚のこの二つ折の柳形の柳誌から、その三人の作品を抜き書してみよう。

—人に使はるゝ身のともすれば腹立ち 日車
—水に逆らふとはせぬ船の親子ぞ 〃
—蔵の戸前はかく鎖されて三昧の音色 〃
—親となる其日くゝの手の脂 半文銭

—貧しさの素直に生れ来りし子 〃

—貧しければ此人間のもつ力 〃

—天井の低くさも知らず子はうまれ 路郎

—踏込めば卵が風に吹かれてる 〃

—正直がなびのたしにもならず死に 〃

三人三様、川柳を聞いとる氣のその同人の三つの貌の貧しさが、こうした句の背後から次々と浮かび上る。彼等はそろって貧しかつたようである。特に、ことあれば柳誌、柳誌、印刷屋としがない古本屋渡世の身でありながら、ちと並はずれた道楽でのたうち回る主人を抱えた、その一家の暮し向きとは……それを「後の葉柳」三部の当主路郎自身の句に眺めてみよう。

—一つ蚊帳にさかなのようにならぶ夜ぞ

—酒ふまいとすれど月給はたりず

—酒のめぬこのかなしみを捨てにゆき

—食うだけもないのに今日の手がよこれ

—溜息となつて出てくるものがあり

「娘（二女）の死、米騒動、百度に近い暑さが頭の中に渦巻く日々。時計が一時をうつ世間はシンとしている。みると長女が掛布団をタライ回しにしている。長男は枕外に乗り出している。これも親の務めかと三度目の布団をかけにくい。寝顔はあらゆるこの世の罪を父に委託したという軽さが現れている。こんな夜、こんな時、吾々は川柳や俳句どころではないという頭上の圧迫を厳しく感じる」

（土団子第四号編集後記）

愛染帖

波多野五楽庵選

京都府 都倉 求芽

円周率いつまでたっても遠いひと
輪を丸く書いて自分も入れておく
手も十指 足も十指の役どころ

海南市 三宅 保州

告白は候文で致したし

視つめると仏の顔になった石
喝采の舞台にも幕降りてくる

米子市 政岡日枝子

火柱になる人だらう待ってみる
沖を見るまでに実ってきた少女

和歌山市 木本 朱夏

くちなしの匂う指先から墮ちる
海鳴りは遠く魚に顔がない

弘前市 高瀬 霜石

貯金したつもりで今日も本を買う
背比べしていた頃のいい話

弘前市 斉藤 劔

白魚の哀しいほどの透明感
白い薔薇咲いて結婚記念日なり

池 森子

ある時は悪女で居たい花の芯
雨期最中 半熟卵を抱いている

西山 幸

生かされる日の眉墨を淡く引く
許し難くて白紙のままの日記帳

川島 良子

嫁姑 小姑 面を使い分け
予想外でしたと笑い止まらない

西原 艶子

人前で飾る言葉が嫌になる
輝いていよう独りになったから

春城 年代

年輪の渋さうまさはどのあたり
ほうほう 蛭 亡母の笑い声がする

東京府 やまぐち珠美

あなたにはもう差し出せぬ傘だった
軽口をかるくたたけるしたたかさ

三浦 強一

よく喋るほくろが口の横にある
減塩に野心が少しずつ萎える

中島 志洋

奥の手はまさかの時にとつておく
上見れば切りなし今の幸でよい

栗田 久子

あなたにはあなたの都合あるんやね
激論をおおる更なる風が吹く

弘前市 岡本 花匠

絵灯笼 父母の追憶まなうらに
胸底のわくら葉捨てりや笑えそう

青戸 田鶴

一匹の蛭宿して生きている
まだ女 花の吐息が聞えます

鍛原 千里

初夏の街タンクトップを着て泳ぐ
振り向けば戦の顔になっている

福井 桂香

海に目を向けて潤う女の忌
タイミングずれて一人の喜劇なり

瑞枝

西口いわゑ

岳水

八月の疼き水平線ゆがむ
バラ園を出てカルメンが消えて行く

中山 雅城

放神の胸満たされているのかも
また一本歯が欠けていく老いてゆく

福士 慕情

紫陽花の饒舌逃げるのがうまい
雨の音辿れば僕の始発駅

町田 達子

牧野 芳光

鷺見 正子

梨の木に梨の実が成るふるさだ
梨の木に梨の実が成るふるさだ

とじ蓋と言われてみればそんなところ
吉岡 修

平熱になると鶏は黒かった
倉吉市 野口 節子

少し譲って少うし狭く生きている
羽曳野市 徳山みつこ

一病と向き合い赤い色に落ち
横浜市 芦田 鈴美

花びらに好きか嫌いか決めさせる
大阪狭山市 羽田野洋介

思いがけぬ私と出逢う霧の中
米子市 光井 玲子

アクセルを踏み込みすぎて病んでいる
和歌山市 上地登美代

水色のワルツ踊って別れます
大阪市 浦田 綏子

花手毬やさしい音が大好きで
米子市 澤田 千春

前略で駆け込んでくる花の私語
松江市 津川 紫晃

喉ぼとけ曝してプロレタリアなり
富田林市 中井 アキ

婦唱夫随いつの日からか妻が決め
岡山市 井上柳五郎

あれからというものに妻に歯が立たぬ
高知県 桑名 孝雄

まねをしたように春風邪妻も引き
今治市 越智 一水

背中合わせの水と空気でまた夫婦
東大阪市 北村 賢子

傘寿からユックリズムに徹しよう
豊中市 田中 正坊

ゆるめ過ぎた頭の捻子ももどらない
鳥取県 土橋 睦子

目薬の力も借りる正誤表
東京都 播本 充子

頼まれる前からダメと言っておく
堺市 矢倉 五月

計算に合った仕事をしていきます
倉吉市 米田 幸子

せめてもの革命 弁当屋替える
唐津市 仁部 四郎

雨の日は雨の演歌と橋渡る
寝屋川市 江口 度

書いて消した書いて消す余命表
和歌山市 桜井 千秀

人間も賞味期限という掟
高槻市 乙倉 武史

出る幕でない場で恥の重ね塗り
尼崎市 内田美也子

抜擢の椅子で感じる後ろ指
宇部市 平田 実男

ひき潮のまま真実が話せない
鳥取市 徳田ひろこ

素っ首を取られた修羅の勇み足
和歌山市 中後 清史

夜が明ける老いに二つの安寝感
泉佐野市 稲葉 洋

仕切りなおし三百六十五歩の道
鳥取県 さへんきやえ

修羅の過去忘れた老母の笑いジワ
香川県 川崎ひかり

哀歎に生きて苦菜の水を飲む
弘前市 一戸 ツネ

倒れるまで素顔は見せぬ独楽の芯
奈良市 乾 春雄

ことここに自説曲げない蟻になる
弘前市 相馬 銀波

嵐呼びそつなリズムだ津軽三味
八尾市 宮崎シマ子

しがらみが結び目すんなり解かせぬ
大阪市 板東 倫子

こんなにやくの裏と表にあるいくさ
富田林市 片岡智恵子

戦争を知らず育った長い脚
唐津市 樋口 輝夫

有難いことにお腹が空いてくる
八尾市 高杉 千歩

見たくない悲劇涙腺弱いから
鳥取市 美田 旋風

菌車の軋みで心落ち着かぬ
高槻市 左右田泰雄

愚痴に愚痴聞いて心はおさまらぬ
鳥取県 橋本多哥由

しがらみの糸が細身に纏い付く
鳥取市 岸本 宏章

ライバルを踏み台にするど根性
川崎市 小林久美子

いい顔を分別しよう多面体
出雲市 園山多賀子

藤井寺市

太田扶美代

胸底をまだ出て行こうとせぬ殺意

唐津市

井上 勝視

老いも嫌末世も見たくない傘寿

弘前市

櫻庭 順風

身の潔白を疎明することもなく

日立市

加藤 権悟

老農の十指に鉄は良くなじみ

河内長野市

水谷 正子

乗り替えの旅が始まる喜寿の駅

大阪府

初山 隆盛

もう七十まだ七十のスニーカー

大阪市

本間満津子

自宅で最期とは羨まし別れ方

アルゼンチン

松井美稚子

浦島もア国で亀を見失う

愛媛県

花岡 順子

夢覚めて蛭は黒い虫になる

大阪市

三浦千津子

口下手の嘘だ信じた振りしよう

唐津市

田口 虹汀

無駄のない親の教えを聞く炬燵

横浜市

吉田 裕峰

借景も入れてマンション売り出され

黒石市

相馬 一花

一杯の酒が薄める論理観

鳥取市

近藤 秋星

一生を無職と書いた淋しさよ

愛媛県

中居 善信

猿多居さてさて何をしてたのか

苦労性引き算ばかり上達し

鳥取県

谷口 次男

あの世から平家蛭が飛んできた

美祿市

土橋 螢

絵空事コメントなんてありますか

香川県

安平次弘道

接木したバラにも刺はついてる

大阪府

木村あきら

小鉢にも小さいなりの花が咲き

倉吉市

松尾柳右子

正論が愚痴と気付いた身のあせり

豊中市

山中 康子

無位無冠 この部屋だけが安住地

和歌山市

櫻谷 郁子

梅干しにもランクがあつて桐の箱

米子市

山根めぐみ

待つ人も待たれる人も夕暮れる

奈良市

木村富美子

習性 愛相笑いがさみしいね

横浜市

米田 恭昌

緋のリボン解けばドラマ生まれそう

三田市

秋元 和可

結論を急こう妻が一緒です

北野 哲男

五穀には入れてもらえぬ蕎麦が拗ね

坂上 高栄

おしゃれよりセンスを褒めて下さいな

枚方市

海老池 洋

早とちりしてから急に運が向き

八尾市

生嶋ますみ

上等の器へ気取るいもかぼちゃ

鳥取県

石谷美恵子

赤ん坊に妻をしばらく貸してやる

妹尾 安子

面白い男でいつも金が無い

鳥取県

上田 俊路

ほほ笑みと錯覚してた薄笑い

岸和田市

木村 正剛

一週間待ったら欲しくなくなつた

愛媛県

黒田 茂代

マイフェアレディー綺麗に降りる脚線美

唐津市

久保 正剣

かげろうがゆらゆら眠い野の仏

松原市

玉置 重人

七十年洗った顔に染みがつく

香川県

松村 輝夫

資産価値何時しかゼロになる株価

海南市

谷口 義男

静寂がこわれないよう目を瞑る

寝屋川市

森 茜

いずれ地に還る我が身に落花など

米子市

白根 ふみ

怖いもの見たさ昨日を振り返る

横浜市

鈴木 純子

時々相手のミスに目をつむる

鳥取市

春木圭一郎

さんさんとバス停に降る紫外線

熊本県

高野 宵草

あるだけの電気を点ける淋しい日

大阪府

澤田 和重

誹風柳多留二四篇研究 44

山田昭夫・伊吹和男
大野秀二・小栗清吾
橋本秀信・粕谷長生

清 博美・佐藤 要人

338 船に乗る時分正味の高尾なり

山田 三浦屋高尾。

仙台伊達綱宗は、高尾の体重と同じ重さの金で身請けしようとした（三浦屋の主人はその重さを増すために、うんと厚着をさせ、さらに小袖の中に鉄を入れて置いたりしたらしいが）。しかし、それでも高尾は公の意に従わず、三又川の船上で吊るし斬りにされたという。

首題句は、この逸話を詠んだもの。高尾は、船に乗った時は一切の柵を離れ、遊女としてではなく、人間としての本心を吐露した。その結果無残な結果となった次第だが、彼女としては幸せ、はたまた不幸せ、果たして如何。

そのままで高尾かのとしづむ也 一七三五

傾城のあいそづかしを船でい、 二四八

あいやでありんすを聞拔はなし 一四四二

伊吹 賛。句のウエイトとしては、「人間としての本心を吐露」という方よりも、正味の体重に戻ったという方に重きを置いているように思う。

小栗 同。秤にかける時に厚着をしたことを裏側から詠んだ句。

清 山田氏の心情わからぬでもないが目方だけの意。

佐藤 同。

339 朝喧嘩となりの芝居まで邪尸し

山田 待ちに待った芝居見物。そろそろ出掛

けようとする矢先、お隣でとんだ荒事が始まった。捨てても置けず、ともかくその仲裁に入って仲直りさせたは良いが、小屋に着いたら芝居はとつくに始まっていたという次第。まさに傍迷惑とはこの事であろう。

うら店のけんくわハあらひざらひい、

安四梅 3

夕べのハくぜつ今朝のハけんくわ也 八三九

寐て済すけんくわに口も入レにくひ

明元信 1

粕谷 賛。原因は朝帰りか。

清 同。吉原からの朝帰りでしょう。

佐藤 賛。

330 酒呑ミのきうあくの出る土用干

山田 土用干風景。前に酔っ払って付けたタバコの焼跡や、酒のシミなどが露見した。さーで、さて……。

おのれまあいっこかしたと土用干 一五三

土用干おのれ白伏しおらぬか 安五満 2

土用干袖からかびたするめが出 紅晶 3

大野 賛。酒や汁をこぼした跡にカビがはえている。

橋本 同。衣服。

清 同。カビに触れないと正解ではない。土

用干しの前の梅雨時にカビが生えたのである。

佐藤 賛。

331 あの後家ハ堅いやつじやと色がふれ

山田 イロが触れてりや世話はない。念には念を入れよということか。

その当座後家たて通しそうに見へ

安四信 7

しるまひと思つて後家のかたひ顔

安四叶 1

相應なへの子が有るて後家を立て

末四 2

清・佐藤 賛。

332 評義まちくさらへれた娘なり

山田 擽うは掠める事で、ここは駆落ちであらう。それを知つた近所の連中が、その娘のことを色々噂をしている場面。それを「評議」などと勿体つけた所がミソ。

罵の子されわれそふな器量也

七八 15

やられぬといふあくるばんかつかれる

天二梅 1

かついだハうそ手を引いて逃た也

三十 6

清・佐藤 賛。

333 吉野丸どたりくと掘へつき

山田 吉野丸「江戸時代、隅田川の船遊びに用いられた最大級の町屋形船の名。納涼・花見・雪見をはじめ川施餓鬼にも用いられ、その豪華さは川一丸などとともに、隅田川の名物であった」(『日本国語大辞典』)。

首題句は、隅田川での豪華絢爛な遊覧を終り、山谷掘に着いた吉野丸を詠んだもの。船体が大きいからか、「どたりどたり」とは云い得て妙。客はこれから吉原であらう。

掘へ行ふくとよしの丸

首四 29

猪牙をのむやうに吉野ハ掘へ付ケ

七 31

よしのから手のひら程のふねへのり

伊吹 賛。軽快である猪牙とくらべると、よけいにその感がある。

安六松 3

清・佐藤 賛。

334 筆まめな徳意にこまるかし本屋

伊吹 現代にくらべると、本ははるかに高価なものであったから、文化年間には、江戸に六五六軒(天保年間には八百軒といわれる)の貸本屋があり、大名でさえ貸本を読んだと

いう記録が残っている。

句意は、落書き好きの得意先に困る貸本屋ということだが、なかには、自分の本と間違つて思わず書込みをしてしまったという、悪気のない者も含まれるのである。

無料見物にハこまる貸本屋

一〇五 11

橋本 賛。但し、自分の本と間違えることはないと思う。

清・佐藤 賛。

335 情なき一言ン娘ハふだんき

伊吹 「情なき一言」、姑の嫁いびりの句。冷酷無比で、人を背中からグサツと突き刺すような姑からのひと言を、嫁は毎日のように浴びせられているのである。

じやうふだん鬼の念仏娘はき、

一七 18

朝晩ンに鬼のねんぶつ娘ハき、

玉 13

小栗 「情なき一言」は何かありそつだが。

橋本 同。何か具体的な言葉があるような気がするが、わからず。

清 「情なき一言」ではなく、「情なき一言」と一気に訓むのであらう。情無いは思いやりのないという意。

佐藤 賛。

苗香のむ

宮西弥生 選

晩学にまだまだ酒れぬ海がある
もう死んでと言うまで生きていて母さん
摩擦避け川は蛇行をくり返す

沈黙を守る賢い口である

葬式と法事に帰るふるさとだ

転んでもバネが利いてた若かった

野に在れば野の仕来りの色になる

ディケアのバスが平和な刻をくれ

負けを悟ってから願らしい顔になり

昨日よりきれいな顔で目を覚ます

子を抱いた数ほど女つよくなり

実るまでそつと添え木になつている

おおよその予定をたてて生きている

砂あらし走れなかつた悔いがある

記憶食う虫が頭に住み出した

寝顔なら妻も天使の部に入る

鏡にも嬉しい顔を見て貰う

生々流転 次はなりたいたいの野の董

雨は斜に思い上りの傘叩く

富田林市

中井 アキ

樫原市

居谷真理子

東大阪市

田中美弥子

藤井寺市

高田美代子

米子市

鷺見 正子

和歌山市

楠見 章子

米子市

政岡日枝子

東京都

播本 充子

和歌山市

西山 幸

和歌山市

吉村さち子

八尾市

生嶋ますみ

米子市

木村富美子

芦屋市

黒田 能子

西宮市

西口いわゑ

堺市

矢倉 五月

八尾市

宮崎シマ子

鳥取県

岩崎みさ江

寝屋川市

岸野あやめ

羽曳野市

吉川 寿美

淋しさは言わぬと決めている土鈴

置きかえてみたいてにをは過去未来

無気力な時間を泳ぐ今日の憂い

伝統を学ぶ童の顔やさし

それ以上問えぬ何かが起こりそう

悟りには遠く時計のネジを巻く

ばあちゃんのだけた話にあるほんと

履き替えていつもの白い道を行く

後始末ふと考えるフルコース

無視してた小石如きにけつまずく

ハングリーな頃思い出す芋の蔓

磨いたら女際限なく光る

彫り続け仏になった人がある

母の名のない私に長い母の日

掌に持てば重い運命の紙コップ

いい姑さんと言われずじまいになるだろう

花の種もしもしもをくり返す

アルファ波に乗ってこころの傷癒やす

能面をしたたかに打つ夜半の雨

平熱になると何でもない話

自分の目自分の足で切り開く

飾りにも武器にもならぬ涙です

許し続けてやがて忘れるように母

川幅を読んで未熟な目を伏せる

強い方へすく振りたがる尾氈骨

尼崎市

長浜 澄子

寝屋川市

籠島 恵子

尼崎市

内田美也子

鳥取県

土橋 睦子

川崎市

和泉あかり

横浜市

近藤 道子

横浜市

保田 絹子

西宮市

牧淵富喜子

堺市

志田 千代

大和高田市

鍛原 千里

吹田市

山本希久子

藤井寺市

太田扶美代

米子市

澤田 千春

熊本市

永田 俊子

岡山県

山本 玉恵

寝屋川市

太田とし子

西宮市

門谷たず子

和歌山市

福井 桂香

鳥取県

ささきやえ

鳥取市

徳田ひろこ

八尾市

村上ミツ子

東大阪市

北村 賢子

米子市

白根 ふみ

三田市

久保田千代

箕面市

出口セツ子

響くものまだありルージュ塗り重ね

陽は燦々言い訳などは似合わない

あやとりの昔むかしに戻りたや

細やかな心を拾う大きな手

永久の眠りとは違ひます昼寝です

ニッポンニッポンと叫ぶ茶髪の愛国心

きのうより今日が幸せ宿浴衣

陽炎を残して追った夢も消え

泣きに來た古巢に母の匂いあり

夏野菜手間ひま掛けた恩返し

ゴキブリ団子優しい顔で分けてくれ

空腹の祈りの中の仏様

介護してされてふたりに陽が沈む

最後まで煩惱尽きぬ螢火よ

主役にはなれぬが磨く馬の足

信用をせずに何でも食べてます

国引きの力借りたい北の四島

雑踏の孤独に耐えている背筋

先ず母の顔見て下ろす旅靴

母の愚痴聞いて今夜の暮おける

泣くも笑うも同じ一日夕焼ける

のんびりと出来ない性で不眠症

生き様はわたし一人の蚊帳の中

する事がない病人の手が荒れる

旅帰り黴の匂いのなつかしく

藤井寺市 鴨谷瑠美子

弘前市 宮崎ヒサ子

岡山県 矢内寿恵子

倉吉市 野口 節子

米子市 青戸 田鶴

大阪市 板東 倫子

富田林市 藤田 泰子

八尾市 井尻 民

奈良県 渡辺 富子

横浜市 秋元 和可

熊本県 岩切 康子

松江市 川本 畔

鳥取市 録沢 風花

生駒市 飛永ふりこ

大阪市 神夏磯典子

和歌山市 福本 英子

大阪府 米澤 俣子

香芝市 大内 朝子

寝屋川市 堀江 光子

横浜市 田中 笑子

大阪市 本間満津子

八尾市 高杉 千歩

和歌山市 桜井 千秀

大阪市 津守 柳伸

和歌山市 山根めぐみ

待つ人があつてうれしい台所

歎びは隠しておこう楽しみに

月下美人孤高の顔で匂い満つ

看護師は怖いぞ嫁にするでない

日焼け止め夏と仲よくしています

どの彩で私飾るか余命表

キノコ雲忘れてならぬ忌の巡り

心得てなかったことにする話

しばらくはさつぱりメニユーのごまだれで

肩の荷を下ろすと気付く丸い背な

命より大事と見える薬好き

仕舞い風呂呂差し湯もせずに一〇〇数え

残されて時の流れで独り立ち

飾りても素知らぬ顔の初節句

妥協する事も余生の過こし方

子や孫の老後気にするのはやめる

鳥取市 岸本 孝子

鳥取県 西原 艶子

今治市 塩路よしみ

鳥取市 永原 昌鼓

羽曳野市 徳山みつこ

大阪市 三浦千津子

寝屋川市 平松かすみ

池田市 栗田 久子

寝屋川市 森 茜

今治市 野村 清美

和歌山市 田中 みね

米子市 小塩智加恵

豊中市 櫻谷 郁子

八尾市 中島 春江

鳥取県 西川 和子

横浜市 長島亜希子

アキさんの句―与えられた人生を少しでも有意義にしたいから、

晩学など志す。次第に活性化された脳は一層に活動する。可能性に

挑戦する人生は楽しい。真理子さんの句―誰もが切に願うこの句の

真情に偽りはない。どこでも正直に母親の存在の高さを物語ってい

る。美弥子さんの句―世の摩搦や惨事はすべて人間の罪からで、あ

の悠久たる川の流れを少しでも真似てみたい。美代子さんの句―

「君子危うきに近よらず」の日本版。物の良し悪しを見計らうのが普

通の大人。一言の余計な言葉の罪深さ、みんなこの口にあるし、私

達も今日まで多くの人に傷つけた事をこの句で反省したいと思う。

平和

米田 幸子選



有事法平和が軋む音がする
 銃とった父の忘れぬ平和論
 平和だと想う国にもある火種
 無茶しても母のタクトにある平和
 慣らされた平和で命終りたや
 聞き流すことも覚えて平和主義
 青春の平和茶髪が街を行く
 一番風呂の父の鼻唄きく平和
 平和呆け戦争ごっこしたくなり
 戦中派 平和の味を噛み締める
 お茶漬を食べて平和を噛みしめる
 海底に平和を知らぬ戦友眠る
 日めくりを今日も剥がしてつがなし
 サッカーサッカーサッカーこの平和
 退屈をしながら平和な椅子がある
 鶏も放し飼いでいる平和
 あやまちは繰り返しませぬという平和
 この平和忘れてならぬ傷もある
 九条をかざせば平和透けて見え
 平和とはかくなるものかゴミの山
 昭和史の戦 静かに語りつく
 子等が寝て平和になったオモチャ箱

富子 洞庵 慕情 セツ子 玉恵 たず子 洛醉 清鼓 昌鼓 義男 一壺 喬水 保州 次男 早智 順風 あやめ 活恵 宏章 哲男 正子 シマ子

草原に草食む牛のいる平和
 おまわりが軋た寝している駐在所
 お巡りが釣りをしている島の波止
 アフガンの子らにいつ来る平和な日
 アフガンに平和を知らぬ飢餓の民
 臍出しルック平和の証かも知れぬ
 傘の中妻も子もいて平和舟
 古い殻脱いで平和の彩に溶け
 平和画く色が足りない絵の具皿
 年金の絵皿平和な彩を溶く
 素晴らしい笑顔に出会う日の平和
 定位置に笑顔の母が居る平和
 予想せぬ平和を乱す乱気流
 地球儀のどこかゆがんでいる平和
 自爆テロ平和の女神目をそらす
 佳
 金魚鉢の平和に石は投げられぬ
 リストラが平和の水を濁らせる
 今日明日の平和を遺産として残す
 日本より平和な国はないそうだと
 戦争はいやだいやだと油蟬
 人
 鳥取の砂丘で聞いた平和音
 遺伝子に平和の種が日々育つ
 天地
 太陽が真つ赤平和なクレヨン画
 軸
 平和とは何かと神に問いたです

霜石 高明 水笑 喜子 玄也 妻子 彩子 寿恵子 典子 柳弘 鉄治 南花 雄々 和枝 登美 日枝子 螢 みつこ 雅城 公誠 三浦強一

コップ

阿部 進選



にぎやかなビールへコップ総動員
 ししぶとコップを伏せる休肝日
 コップ酒今じゃ一杯もてあます
 パーテンがコップを磨くひまな夜
 山盛りに酌いでもらえる縄のれん
 黄金のコップで飲んで魔女となり
 豪快にコップ酒飲み憂さ晴す
 コップなど要らぬ若さのラッパ飲み
 独身のコップ淋しく主を待つ
 命日の親父をだしにコップ酒
 居酒屋のコップ誰とも馬が合い
 グラスでもコップでもよし乾杯だ
 紙コップお前も俺も使い捨て
 幸せを浮かべ飲んでるコップ酒
 潰されてボイ捨てられる紙コップ
 一日の疲れを癒すコップ酒
 誘われて苦楽を語るコップ酒
 紙コップ疲れをいやす飯場の灯
 手品師のコップは鳩を飼いならす
 赤のれん浮世忘れるコップ酒
 思い断つ時は一気にコップ酒
 花嫁の父のコップが泣いている

あすき 勝呼 栄久 章子 妻々 雄明 徳三 洛醉 清山 彰雄 次男 正雄 南花 一粹 順子 照子 洞庵 義男 尚士 (編) 洋士

仮面脱ぎ凡人になるコップ酒
縄のれん情け溢れるコップ酒
言い過ぎた言葉憶えているコップ
立ち飲みのコップ極楽酒の味
要らん事喋りはじめたコップ酒
ビール注ぐコップに今日の愚痴こぼす
言い出せぬリストラの身のコップ酒
尿検査順着待ちの紙コップ
リストラの風が冷たいコップ酒
愚痴一つコップに落とす夕暮れる
外務省のコップは只の酒が好き
さりげないコップの花に和む部屋
乾杯のコップ同士がキスをする
盛り上がるまで注いでるコップ酒
ひと仕事終えて屋台のコップ酒

佳

遣る瀬無さいくつ捨てたかコップ酒
肩書きを捨ててなじんだコップ酒
注ぎ合った二人のコップ愛あふれ
マジシャンのコップから夢溢れ出る
花いちりん活ければコップ喋りだす

人

妻の酌コップにや線が引いてある
嫁がせてひとり淋しいコップ酒
天

軸

愛に飢え愛に溺れたコップ酒
車座で話が弾むコップ酒

哲男
愛論
しげお
武史
寿恵子
敏子
恵勇
玄也
重人
栄子
あずま
庸佑
一花
ただし
和重

笑子
玉恵
圭一郎
鉄治
霜石
輝夫
一風
高橋岳水

再 び

西村りつえ選



再会も傘寿も祝うクラス会
再会を約す電車を追つかける
再会を約してからの一人ぼち
再会に手こずっていた君の名は
土地の値が再び上がる夢を見た
新しい仮面で挑む二度の戦
再生紙使ってますと言う名刺
しがらみを捨てて再びする門出
二度となない今日を粗末に生きている
悲しみは再び聞けぬ友の声
目を入れてからは再びそり返り
再発は丁度今頃梅雨の頃
出来すぎの大吉みくじひき直す
来世も逢おう見事な二枚舌
再婚と言われるほどの若い妻
再婚の友ひとり若返る
明日と言う間に軍靴の音がする
戦中記書こう悲劇はもういらぬ
弁解の二度目梯子を外される
再会に過去をゆくり引き寄せる
再会の握手に通う熱い脈
再会のたびに丸みが出る握手

再会の涙でくもる花の彩
雑魚だけが再度残った縄梯子
再びは戻れぬ椅子を撫でている
再びの誘いに花が狂い出す
いま一度言ってきかす故郷の親
再びの証言聞へさす光
かつこよくあしたまたねと別れよう
再びの戦に挑む戦士たち
職名を変えて再び雇われる
再びの職で何とか食いつなぐ
二度となないチャンスにミスをしてしま
再びのチャンスを狙うキュービッド
うまい洒落昨日と今日と二度笑う
もう一度仏の顔をして置こう
再びを夢見ているか ハナエモリ

佳

再びの約束守ったのはさくら
次ぎの世も添おうと妻にヨイショする
もう一度妻と添うかは考える
折り返しできる電車がうらやまし
土砂降りを再出発の糧にする

人

再会の眼に炎あり 好敵手
再来を約した鶴が戻らない
一回り大きくなって返り咲く
楽しみは母とふたたび天の川

軸

たず子
雄々
典子
紫見
四郎
ミツ子
庸佑
妻一
千壺
千里
泰竜
しげお
朝子
千代
尚士
たもつ
保州
霜石
珠美
日枝子
播本充子

初歩教室

題一 笑う

吐田公一
はん だ きん いち

時々のことではあるが、川柳の中に差別用語を使われることがある。特に初歩の方達にとっては何気なく使われるのであろうが、これには十分注意して欲しい。例えば

金増やす掃除婦までして働いて(増やすの響き)
なぜなら、例えばご自分のことであつても、その意識の底には掃除婦とは卑しい身分であるという観念が見受けられるからである。

秋風の中で乞食に拜まれる 豆秋
この作品が作られた時代はいつか知らないが、差別用語が人口に膾炙(はいし)されていた時代ならば、この豆秋のような句も名句として採り上げられたが、現在ではそうはいかない。

添削句
○デフレでも笑いとはして生きていけ 真一
ストリートに詠みすぎ。世相からすると

▽リストラで笑い忘れている家族

○肩書きも野心も消えたその笑顔 洋介
てにをは添削

▽肩書きも野心も消えてから笑顔

○健康は薬飲むより笑う事 稔

説明句。表現が乏しい

▽笑い声絶えぬ家族で医者知らず

○手鏡に何度も笑う片えくぼ 鈴美

手鏡へ笑顔を映すのは何故かを詠んで欲しかった

▽手鏡へ笑顔何度も支度部屋

○阪神が勝つて大笑仰直り さらり

▽阪神が勝つて家中大笑い

下五がとつてつたよう

▽阪神が勝つて家中大笑い

○こんこんと開けばそこにある笑顔 アヤ子

○あかちゃんの百面相は可愛いな アヤ子

二句を合成すると

▽あかちゃんの写真見たさにノックする

○嘘ついて笑わしている白い部屋 輝夫

敢えて白い部屋と詠む以上は何故かを――

▽病室を笑わせている見舞客

○失敗を笑って誤魔化す知恵が付き 道子

下五からすると幼児のことと思うので

▽失敗を笑ってすます孫の知恵

○よそさまへ笑顔内では別の顔 (寺弘子

外面・内面と使えば――

▽外面は笑顔内面怖い顔

○あいさつは笑顔明るくにこやかに 郁代
笑顔とにこやかは同義語。同義語は無駄な言葉としてできる限り省くこと

▽にこやかに挨拶交わす仲となり

○長電話遊び笑いでひそひそと 欣子

忍び笑いとすれば当然にひそひそとなる。それより人の心裡そのものを詠んだ方が

▽長電話遊び笑いが気にかかり

○散歩道互いに笑うあいさつ 和香

単なる情景より、あの人など小道具を入れると句の情景が生かされるのでは

▽あの人と笑顔を交わす散歩道

○戦友会八十の笑い泣いている 和友

戦友会・戦陣訓もいいが、着眼点を色々変えて作句してみること。初歩教室を読まれても色々な笑いがある。

▽戦友会いじめ話へ泣き笑い

○家じゅうの笑い集めて福を待つ 栄呼

下五の着想を変えてみると

▽家中の笑い集める歩き初め

○結納を終えて淋しく父が笑む 惠勇

原句に軍配か

▽結納へ父の笑顔が淋しすぎ

○笑うといふ仲ようしてすますゴミ出しを 錦

下五の見付けが甘かった。

▽笑われてもおどてつないで老夫婦

○豪快な笑いでいつも元氣そう 弘之

下八音字の表現は当り前すぎる

▽豪快な笑いで小心を隠す

○美人より笑顔よしとやせがまん 満子

説明句の域を抜け切れてない。

▽この女の笑顔に惚れて悔いはない

○故郷へ帰省自然に笑い顔 裕子

自然に説明句にしてしまった。

▽故郷へ帰る笑顔を老母が待つ

○笑い顔仮面の裏の闇魔面 大鯨

下五の表現をもう少しやわらかく

▽サラ金の仮面の笑顔にだまされる

○核家族そろい家中よく笑う 栄子

この句では背景を創ってみるといい

▽帰省して笑顔が絶えぬ核家族

○笑われてそれが人気のバロメーター 業月

中七が説明句にしている。

▽笑わせて笑って稼ぐ新喜劇

○じいちゃんのあやして嬉し笑顔良し 登志子

祖父が孫をあやして嬉しがるのは当然で川

柳にならない。反対現象を詠めば

▽じいちゃんの笑顔も泣く児には勝てず

○話す夢母は笑顔で聞いてくれ 賢治

話す・聞くは対語（対義語）で冗長になる

ので、川柳ではできるだけ省くといい。

▽僕の夢母は笑顔で聞いてくれ

○気に入らぬ貴女の笑顔に刺がある 円女

上五が冗長

▽あの女の笑顔に刺が感じられ

○待つていてくれたように微笑む菩薩 像山

解らぬでもないが具体性に乏しい。

▽願ひ事菩薩の笑みに手を合わせ

○鏡台に笑顔写して「行つてきます」 輝美

下六音字は語呂が特に悪く、よほどでない

と成功しないと思う。

▽鏡台の笑顔で自信つけて出る

○母親が笑顔見せれば家和む 孝明

原句もいい。川柳だから世相も反映しては

▽リストラを母の笑顔が元氣つけ

○しわの寄るほどに笑つておらが春 節子

一茶のおらが春をうまく使われたが

▽笑い皺にしながらのおらが春

○ライバルの笑うて見せている余裕 敏子

同じ内容だが、憎いほどのという感情を挿

入してみては

▽ライバルの笑顔が憎い余裕見せ

○ここは先ず笑いで愛想闊所越え 敬之介

少し視点は異なるが

▽急所突く言葉へ返すが笑い

○カタカナの発音下手を笑つてる 栄一

もう少し内容を充実させて欲しかった。

▽横文字へピント外れが笑われる

佳句

笑い皺増えたと覗く三面鏡

よく笑う人の隣が温かい

笑われているとも知らず笑み返し

亡き母が笑つたようなお月様

福の神笑う一家の戸をたたく

人柄がにじみ出ている笑ひたり

嫁ぐ日に娘泣いたり笑つたり

言い勝つて笑い忘れた日が暮れる

笑い声たえぬ娘の里帰り

いい夢を見たのか孫の笑い声

泣き笑い悪口は出ぬ通夜の席

生きぬいた笑顔がおくるいい余生

年月は亡夫を笑顔だけにする

同窓会歳をとらない笑い声

孫がくる笑い袋の紐とときに

初孫の笑いのテープ届けられ

お迎えの笑顔に溶けてつい長居

同じなら笑つて暮らす余命表

（下五をうまく）

微笑みが毘とも知らぬお人よし

（ユーモアがある）

瀋陽の領事を世界中笑う

（時事の見付けがいい）

私の句

笑うほど儲けたバブル懐かしい

ゆきの

益子

安子

忠子

昌鼓

英旺

照彦

美代子

文江

更紗

侑子

清

宏子

勝久

ヨシ枝

（山）雅子

よしえ

美弥子

ヤギエ

和輝

— 薫風先生喜寿の日に —

なにわ柳壇同窓会

穴 吹 尚 士

今年の七月十一日は、薫風先生の喜寿の誕生日に当る。その当日に、(大阪) リーガロイヤルホテル・スカイラウンジの席を埋めて、なにわ柳壇同窓会が開かれた。

先生は二十二年前になにわ柳壇の選を始められて、昨年までに選をされたのは五四二題の多きになるとか。一題で七百〇八百枚のはがきが来るそうだから、約四十万枚のはがきの百二十万句に目を通されたことになる。

喜寿を機会に各題の入選句を見直され、各題三句を選定し『朝日なになわ柳壇同窓会抄』として一冊に編まれた。

投句者には、十年以上に亘る長い投句歴の持ち主や、入選句累計百句以上を誇る常連が大勢居られる。今回の催しは、薫風先生の喜寿と『朝日なになわ柳壇同窓会抄』の発刊を記念して、これらになわ柳壇の常連九十九名が先生を囲んだ初めての同窓会であつた。

世話役代表の北畑金治氏、友人代表の伊藤篤氏、同窓生代表の日野愿氏はご挨拶で、長年月に亘りなになわ柳壇への投句を欠かさず、発表の土曜日がいつも心待ちであつたこと、この柳壇で偉大な師に巡り合せて幸運であつたこと、なにわ柳壇が絶えることなく続いて欲しいこと、などと交々語られた。

花束贈呈は、薫風先生と同年同月同日誕生の喜寿の水谷正子さん。

薫風先生はご挨拶で、名前は良く知つていても始めてお目に掛かる顔もあるが、今日からは全員が同窓生でありこれからも長くお付き合いをしたい、今日の集まりは一期一会のつもりであつたが、九十九名もの皆さんが集まり頂いたことで、九十九歳の白寿までは生きようとの想いが湧いて来た、元氣を出そうと思うと、しみじみお話しになった。

冒頭の乾杯の発声は、入選句数、三百余を誇る藤井正雄氏。正に同窓会の雰囲気の中、賑やかに懇談、会食が始まった。

会食中に、各テーブルを薫風先生が順次訪問された。一人一人の名前と顔を脳裡に刻み込むように確かめられるお姿が、先のご挨拶を思い出させて印象的であつた。

後半は、丹後屋肇氏の詩吟、石森利昭、大

内朝子両氏(デュエット)や本郷浩二氏のカラオケが会を盛り上げた。薫風先生と岸野あやめさんの青い山脈で余興はお開きに。

瀬川幸子さん、田中正坊氏、太田昭氏のスピーチと続いて、お互いの今後の健吟を誓い合い、『朝日なになわ柳壇同窓会抄』を頂戴して、散会した。

この同窓会の縁の下の力持ちは、川柳塔の前たもつ氏と長浜澄子さん、NHK川柳教室の皆さんでした。有り難うございました。

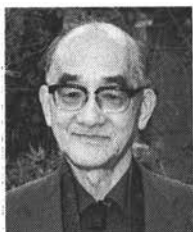


会 場 風 景 (太田 昭氏撮影)

柳界の不死鳥

正本水客さん逝く

黒川 紫 香



六月三十日早朝、けたたましく携帯のベルが鳴り正本水客さんの死を告げられた。昨夜（二十九日）夜遅く養生先で亡くなったという知らせ。まさかとは思いますがも永い闘病生活なので或る程度の覚悟はしていたが、矢張りショックだった。動けなくなつてからもう十年余になる。

その間、手足はもちろん言葉も出ない有様になりながら、川柳塔目選句は欠かさず出していた。勿論奥さんの手を借りながらである。指は動かさず言葉も唇が動くだけで、私には通じなかった。奥様には曲がりなりにも判つたらしく毎号発表されていたが、今年の二月号でピタリと止つた。

不審に思つて電話で奥さんに聞いてみたが、その奥さんもお体をこわされて居るらしく要領を得ず、気にかかりながらもそのままになっていた。

思えば水客さんとは遠戚でもあり、同年の

十日違いの生まれだが、性格は全然違つた。

同じ大阪の生まれでも、成人するまで彼は東京で育ち私は大阪。そして何時の間にか彼は国鉄大阪鉄道管理局、私は阪急電鉄に勤めていた。当時は省線と言ひ官鉄、阪急は民鉄、共に鉄道マンである。

全てが違うが意外と仲良しで趣味も一緒。

昭和八年、彼の職場の厚生施設に麻生路郎先生のご指導で川柳会を開いているからやらなにか、との誘いで小学校時代から仲のよかつた丸尾（後の若柳潮花）と共に句会へ出た。

それ以来川柳の虜となり、路郎先生時代には三羽鳥と言われるようになったが、それぞれ性格の違いを見せた。

子沢さん 使いにやつたのを忘れ 水客

女よよと泣いてる間の手持ちぶさた 水客

等是有名であり、好きな旅の句として

絶壁の底に摩周湖音を消す 水客

草もみじ果ての果てなる陽の名残り 〔尾瀬〕 水客

僧正ヶ谷雨も寿永の色なるか（京鞍馬） 水客
草千里霧は重たきいろになり（阿蘇山）

麻生葎乃先生をして「水客さんは矢が突つ立っているような感じの座り方をする人」と言われるほど生真面目で、どちらかと言えば付き合にくい人だった。

私等より数等頭が良く、後世に残る句を沢山作つた。

旅が好きで国鉄を退任してからも、貰えた無料キップを行使して全国を回り句を作つた。遅れ馳せながら私も会社を辞めてから、水客さんに連れられて旅をした。私には無料パスはでないので羨ましかったが、それでもリユックを肩に一回十日か半月で回る旅をした。

思い出せば書きたい逸話は数知れずあるが、タイトルに水客さんを「柳界の不死鳥」とつけたのは、昭和八年から今年まで約七十年間、良き月悪しき月もあつたろうに、川柳雑誌から川柳塔と変わつても一月も休まず投句を続け、手が使えず言葉が言えぬ無念さを克服しながらも続けた執念を、賛美したいという気持ちのあらわれである。

法名 釈佳秀、本名 佳雄、柳号 水客

享年九十六歳

心静かに眠つて欲しい。（合掌）

あの世での旅も一緒に又しよう 紫香

水客先生逝かないで

都倉 求 芽

戻り梅雨の暗い空がなお一層黒い雲に覆われてきた朝の七時半、いつもより激しい音で電話が響いた。「紫香さんからよ」家内の声は平常通りだったが私には「水客さん!」ピンときた。

『川柳塔』自選集も二月号を最後に途絶えていたし奥様からも相当お悪いように聞いていたので、予測はしていたがとうとう六月三十日にその日を迎えてしまった。

思えば先生には四十年以上のご指導を頂いている。職場川柳会で初対面。先輩たちと同じように水客さんと気安く呼び合っていたら、実は路郎門下の三羽鳥と聞いて大びつくり。その先生に初投句で天位に抜いてもらったのが川柳に病みついた原因なのだが……。

定年後もそのまま職場川柳の会長を続けられ、杜的さんがはじめられた京都塔の会へも紫香先生、潮花さんとその三羽鳥が帰りの遅くなるのも厭わず遠路毎月出席してくださった。その頃はまだまだとてもお元気で、現職の時

からの趣味の旅も紫香先生と方々へ行っておられたし(その旅の句は路郎先生も激賞されていた)、塔の会の吟行にも若い者に負けずに歩いておられた。その間にも「千社札」の原稿を毎月、これはお体が不自由になられてからも、つい三、四年前まで奥様との共同作業で、合同句集の序文も第四集まで選んでいた。そして、小生の退職時の句集「花野」の序にも、心のこもった名文をくださった大変感激したのは忘れることができない。

それともう一つ。塔の会のはじめの頃「西陣」の題が出た。その時に「西陣の織子さんが帯を織るのに爪をギザギザにしているそうだがそれに呼び名があると思うが誰か知らないか」と聞かれた。ところが誰も知らない。それがずっと宿題のように心にたまっていた。西陣会館なら?と誰かに教えてもらったのが十年以上もたつてから。「あれはツメをつける」といいます。早速先生に報告すると「永い間の疑問がやっと解けた」と大変喜んでくださった。

思い出は数えきれないほどあるがこの辺で先生を偲んで紙数の許すかぎり句を紹介いたします。

大鉄川柳から

半分に折って嬉しい葉書持つ

先生はいつもキチッと折った葉書やメモを胸のポケットに入れておられた。

ポストまで近所の犬が従いてくる

先生のお家にはいつも近所の犬が自分の家のように寝起きしていた。

ひっそりと白い障子に待たされる

先生の「白」に対する執着は有名であった。

また紫香先生の肝煎りで平成八年、正本水客とその仲間「和」が発刊されたが、その記念紙上句会の課題「二人」の軸吟に

影法師二つならんで池見てる

潮花君も亡くなり三羽鳥も紫香君と二人になったなあ、という心境ではなかったか。

千社札最後の軸吟

覚悟しておけと自分に言いかけ

大往生はとうに覚悟しておられたのでは。ご冥福を心からお祈り申し上げます。合掌

戻り梅雨なぜ先生を連れてった 求芽

最後の作品 (14年2月号)

手さぐりでできた人生をよしとする

花のない季節も私のすきな月

満月に関係のないくらしよし

お互いにかかわりのない電話さる

二番煎じの話をだまって聞いている

花と美術の旅

オランダ紀行

田中正坊

今春、オランダ周遊九日間のツアーに参加した。川柳塔同人二名と私たち夫婦を含む一行二十四名は、四月十八日朝、関西空港からKLMオランダ航空の直行便で出発、十一時間余のフライトでアムステルダム空港に到着し、翌日から観光の日程に入った。

専用バスでアルクマールへ向かう道路の両側は一面の平原で、色とりどりのチューリップが咲きそろう花畑や青々とした牧場が展開し、放牧の牛・馬・羊がゆつたりと草を食んでいる。至る所に運河が流れ、オランダ名物の風車が立っているが、広告の立看板らしいものは全く見当たらなかった。

市街の教会前広場では週一回、チーズ市が

開かれており、たまたまその日に当たっていたので、大勢の見物人が取り巻く広場には、一つ四キロぐらいの円形のチーズが何百個となく、地面に並べられている。取引が成立すると、白いユニフォームに色さまざまな帽子をかぶった屈強の男が、木製の轆に積んで運ぶのだが、それがまるでシヨウのように展開されていた。

次の日は、北ホラントと対岸のフリースラントを結ぶ全長三十キロの大堤防をドライブした。私はツアーに先立って、司馬遼太郎の街道を行くシリーズ『オランダ紀行』を再読したが、その中に「オランダの地面は火山がつくったわけでもなく、地殻変動によってできたものでもなく、すべて人がつくったものである」と書かれている。即ち遠浅の海の周辺を少しずつ干拓し、陸地化することによって国土を形成したのだが、この大堤防はそのような工事の典型で、一九二〇年から十二年の歳月と国の財力を傾けるほどの巨費を投じた大事業であった。

山のない国なので、石材をドイツやベルギーから買い、それを一つずつ積み上げて築いたもので、これによってかつてのゾイデル海はアイセル湖となった。この巨大な湖はいつでも干拓して農地にすることができるが、今

はそれをせず、淡水魚の天国となっている。

第四日は、中世の面影を残すオランダ最古の都市、マーストリヒトの旧市街を散策し、近郊のセント・ピーテルスベルク丘の洞窟を訪れた。カンテラの明かりを頼りに、巨大な迷路のような地下トンネルを歩いたが、至る所に石工が描いた絵が見られた。この丘は軟らかい砂岩から成り、ローマ時代から建築材料として大量に石が採掘されたという。

次いでオランダの最高地点である海拔三百二十一メートルの丘に上ったが、ここはオラ



キューケンオフ公園

ンダとベルギー、ドイツの国境線の結び目と
なっており、三国の国旗がはためき、展望台
も設けられていた。

さてツアーの中日にあたる第五日は、北上
してデルフトに入り、旧市街や有名な陶器工
房を見学した後、キューケンホフ公園を訪れ
た。この公園は、かつてのテイリングン城の
敷地跡二十八ヘクタールを英国式庭園に設計
したもので、森あり池ありの変化に富んだ地
形の中にチューリップをはじめフリージア、
アマリリス、ガーベラ、ヒアシンス、水仙な
どの球根植物が群落をなして植えられ、色・
形さまざまのあらゆる種類のチューリップ七
百万株が咲き競っている。多彩な花々をカメ
ラに収めながら約一時間半にわたって花の楽
園を歩いたが、花に目のない人なら一日中、
見て回っても飽きることはないだろう。

そして第六日は、時折テレビにも登場する
国際司法裁判所が設置されているハーグ市。
オランダ第三の都市ながら、ここには王宮を
はじめ国会議事堂や諸官庁があり、実質的に
首都としての機能を果たしており、日本の大
使館も置かれている。これらを車中から展望
しながらマウリッ・ハイス美術館に着いた。

この美術館は昔、宮殿であった建物で、王
家のコレクションを中核として収蔵・展示し

ているが、まず目にとまったのは大阪市立美
術館に出版されて注目を集めたフェルメール
の「青いターバンの少女」で、レンブラント
の「トウルブ教授の解剖学講義」も展示され
ていた。

翌日は、第一日に訪れたアムステルダムに
戻って、ここで二つのミュージアムを見学し
た。一つは国立博物館で、玄関から入った一
階正面奥に国宝的名画と言われるレンブラン
トの「夜警」があった。この部屋は二重の天
窓によって外光を調節できるように設計され



マウリッ・ハイス美術館

ている。この作品は、画集で何度も見ている
ので、初めてのようない感じがしないが、現物は
思ったよりも大きかった。

市内を縦横に流れる運河をランチ・クルー
ズした後、期間限定の「ゴッホ・ゴーギャン
展」が開かれているゴッホ美術館を訪れた。
ここでは、日本語の音声ガイドを貸してくれ
たので、その順番に鑑賞したが、百二十点の
作品がほぼ制作年代順に並べられ、また、世
界に散らばっているゴッホの「ひまわり」三
点を集めて展示するなどの工夫が見られた。

最終日の前夜は、アムステルダムのホテ
ル・オオクラ二十三階の展望レストランでフ
ルコースのディナーを賞味し、宿泊したが、
最後のハイライトは十年に一度、開かれる世
界的な花と緑の博覧会フロリアードの見学で
あった。園芸大国オランダの花を中心に世界
各国の花や木が仮設温室や野外に展示されて
いたが、あまりにも広大な会場で、全部を見
るには数日かかると聞き、時間に急かされな
がら駆け足で見学せざるを得なかった。

九州の八割という狭い国土でも、やはりす
べてを見尽くすには短い日程であったが、好
天に恵まれ、開花時期にもマッチし、二つの
公園と三つのミュージアムを見学することが
できた、心穏やかな旅であった。

秀句鑑賞

同人吟 岩 津 ようじ

— 7月号から

四十年近いサラリーマン生活の後、カルチャーで川柳を習いはじめた。面白く続けてきたが、次第に川柳と疎遠になってきた。

「川柳は文芸的でなければならぬ」という最近の説に従ってゆけなくなったのである。お恥ずかしいが、文芸だ、文学だというのは私の苦手とするところで、私の川柳は「暇潰しで習いだしたもの」にすぎない。運動不足でゴルフではじめようか、という人に、タイガー・ウッズの練習法を説いても、所詮身につくまい。私は「川柳は面白かったら、ええがな。なんば文学的でも解かり難いのはごめんや」と、思っている。川柳文芸派の方々から見ると、鼻持ちならぬ存在である。

こんな私が選句することになった。見る人が見れば、これこそ秀句、佳句という句を見落としたのではないかと心配している。

秀句、佳句の見落としの場合には、何卒ご寛容のほどお願い申し上げます。

あるいは、はじめから選者を「辞退申し上げるべきだったかも」と反省している。

義母逝去長いドラマが今終る

藤田 泰子

お姑さんがお亡くなりになったのであらう。嫁姑の確執がなければ、日本文学は随分変わったものになっていたに違いない。私の亡母は「息子の嫁は使うもの」と思っていた。当然、嫁姑の仲はよくなかった。ドラマが終った時には、私までホッとした。

入院を前に満喫大自然（ネーシャランドの旅から）

保田 絹子

どんなご入院だったのか。大きなご病氣だったら、余計大自然を素晴らしくご覧になったことであろう。私の亡父は瀬戸内の田舎町で育った。亡くなる前「海が見たいなあ。波の音聞きたいなあ」といったことがある。

本当に呆けたら呆けたとは言わん

西出 楓楽

その通りですね。「物忘れがひどくて、ひどくて、どうも呆けたらしいで」などという友人が多くなった。私もその一人である。その度に、この句のようにいつたり、いわれたら、

慰めたり、慰められたりしている。

むなしさは何時まで続く自爆テロ

小糸 昭子

むなしくて悲しい。わが国も、あの戦争の最後には特攻隊という自爆戦法で立ち向かった。私は猫の額か、鼠の額ほどの土地に小さな家を建てて住んでいる。急に見知らぬ他人がきて「ここに、おれの先祖が住んでいた。出て行け」と追い出され、その後も迫害が続いたら、私だっていつそのこと自爆テロやつたらか、と思うかもしれない。

空襲の話になると起き上がる

杉澤 汀

私も現役のころ、癢に触ることがあり、帰宅しても眠れなかった。気がついたら、ベッドの上で起き上がっていた。「腹が立って、腹が立って」というより、「起き上がる」は数等優れた表現で、読む人に訴える力がある。ちなみに、会社で腹を立てた先輩で、気がついたら、電車に乗らず、道を歩いていた人もいます。

雷が一蹴をした軽いウツ

神夏磯 典子

W杯をテレビで見えたら、何万、何十万人の人が踊ったり叫んだり大騒ぎをしている。大の大人があんなに騒げるころはない。あ

れだけ騒げば、ウツなんて逃げてゆく。巨人、阪神の甲子園も似ている。そのうちウツの患者には、健康保険で甲子園の入場券をくれるようにならないか。この句、その通りであるが、雷を健康保険で起こすことは出来まい。

私を騙しましたネ總理どの

太田 扶美代

読んで文字通りの意味の句であるが、大いに共感を覚える。あまりにも素直に詠まれているからか。

訥弁の兄で説得力がある

矢野 梓

テレビの討論会なんか見ていると、立て板に水の意見より、訥弁の方が説得力があることは多い。鈴木宗男なんて、国会の証人喚問の前に、同僚議員にリハーサルまでしてもらったそうである。

飛び跳ねてみても生け簀の中である

新家 完司

いろいろに解釈できる句。優雅に泳いで金魚の生涯は金魚鉢の中。ジェット機で飛び回り、人工衛星を飛ばし、宇宙船を打ち上げても所詮は太陽系の中。わが銀河系には太陽のような恒星が一千万個もあり、宇宙には銀河系がこれまた一千万個ぐらいある。人間なんて小せえ、小せえ、といったくなる。こん

なのも解釈の一つか。

金の成る木が見事に生えた試験管

井上 富子

最近の分子生物学の進歩は著しく、専門家でもなかなかついて行かぬところである。ES細胞とかいう万能の細胞を上手に扱うと必要な人間の部品ができる。脳味噌が出来たら高くても買うよ。取り替え取り替えて物忘れを防ぎたい。私の生きているうちには間に合うまい。

年金をケチに暮して死に金に

一戸 ツネ

「死に金」を広辞苑でひくと「①死んだ時の用意に貯える金銭。②ためこむばかりで活かない金銭。③無駄に使って役に立っていない金銭」とある。この句の死に金は①であろう。私も葬式代ぐらい残したいものと思っている。わずかばかり子供に遺しても感謝もするまい。この死に金は③かしら。

体調の好すぎる老いも困り者

舟渡 杏花

私の母がこの句の通りであった。九十代の母は七十代の私たち夫婦の生き方に干渉するのが趣味で閉口した。「親が子供のすること口を出して何が悪い」と口にして憚らなかった。これが母の生き甲斐だったらしい。

歌つてとせがむホステス聞いてない

安達 はじめ

これはきつい。いい気になって歌っている連中の顔が見たい。

性格が役所の女性口開かず

井上 照子

昔、役所へモノを聞きにいった人の話。係長ぐらいの奴が「私は二度と同じことをいしませんから注意して聞いてください」といった。注意して聞いていてもはつきりせぬ個所があり「それはこういうことですか」と問い直した。すると「さつき申し上げた通りです」と答えたそうである。こんなの性格ではなく、仕事が出来ない、横柄になったのである。

強かにこの年金で生きている

野下 之男

政府は、この年金さえ将来は払えなくなる、とおっしゃっている。ちよつと早く生まれて、たとえこの程度でも年金を貰えたことを感謝しなければならぬ世になるのかも。

リストラの風は議員を避けて吹く

井伊 東吉

日本中こんなに思っているに違いないのに、選挙するとまたまた同じような奴が当選する。リストラは民に押しつけ、自分たちの安泰を保証することばかり考える。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 7月号から

石谷 美恵子

ややこしくなった三色ボールペン

三島 淞丘

スムーズだったお付き合いいも、だんだん地が出てむづかしいものですね。三色ボールペンの着眼が素晴らしいと思いました。

不器用な蝶であなたに止まらない

福西 茶子

ひと知れず一生懸命止まろうとしている姿が見え、出来るなら手を貸してあげたい心境になりました。がんばって下さい。

静いへ呑んだ言葉を吐く日記

秋元 和可

ああそうだ。私にもよくあることです。せて日記にその思いを書き慰めています。

政治家も食品も皆嘘をつく

高野 不二

よく言って下さいました、本当に何を信じて生きたらいいですか。腹が立ってきます。

長生きがよいとばかりは言い難い

大西 文次

そんな淋しいことは言いますまい。折角いだいた命ですもの、だいに生きようではありませんか。

決意して要らないものをやつと捨て

金森 徳三

同じ世代に生きてきた者同士、モッタイナイがさきだちなかなか捨てきれません。その点若い人は思い切りがいいですね。

無理したと顔に書いてるプレゼント

山本 宏至

なんと頬笑ましいでしょう。きつと正直なお方なのでしょうね。ある時は少し背伸びしても見栄が張りたいですよ。

嫁と娘に逆転されてえびす顔

亀井 円女

負けてもちつとも口惜しくない。それどころかお二人に安心されて、嬉しいえびす顔が羨ましい限りです。

お土産は一度仏壇経由する

橋谷 静江

幼い頃から、先ず仏さまへと繋げられ、お下がりがおヤツでした。現代っ子はやれ線香の匂いがするなどと喜んでくれません。これも時代の流れでしょうか。

この本に眠り薬が沁みている

秋野 宏

哲学の本でしょうか。読んでゆくうちに眠くなり眠り薬と錯覚してしまひそうです。

パイオフへちよと案じる振りをする

上地 登美代

思わず口の端がゆるみました。うちの図星をつかれた気がしたものですから。でもこのくらいの見栄は誰もが演じれると思うのだけれど…。

言うまいか言おかコーヒーまぜながら

野村 清美

揺れ動くおんな心、経験のある女性もおられますよね。いじらしいではありませんか。

逃げそにするから影を踏んでいる

辻内 次根

面白いですね。どちらに転がって行くかわからない人の影を、しっかり踏んでいるのですね。逃がさないように充分目配りをしなければ…。

くちなしの花の香りに頬寄せて

藤井 郁代

主婦として、つぎつぎ切りのない家事の間。こんないいひとときがあったらと願望をこめて。……ちよつぱり郁代さんを羨んで。

現代川柳を教科書に

井上桂作

日本の短詩型文芸には短歌・俳句と共に川柳があります。なかでも俳句と川柳は、五・七・五の十七音詩型の文芸ですが、現在、川柳は全くと言っていいほど教科書に採用されていません。

このような川柳の地位の向上を図るため、全日本川柳協会では多方面からの運動を起こすためのプロジェクトチームを、平成六年より結成、活動が続けている。そうして現在日川協が主催者となって、毎年各都道府県の回りもちで全国川柳大会が行われています。

現在小学校の国定教科書では、地域によりまた教科書メーカーによってその差異はありますが、三・四年生でやさしい詩を五・六年の高学年では短詩型文芸として、

短歌と俳句が学習対象となっています。中学生になれば短歌はもとより、自由律俳句などがみられます。

自然と触れ合う機会の少ない都会っ子には、稲を知らない子供がいます。さらに草花については、最近外来種が多く名前を覚えるのに大変だそうです。アスファルト道路とコンクリートの壁を見て育っている子供たちに「季節の移り変わり」や「自然の美しさ」を、俳句で表現さすのはなかなか困難です。

世間では俳句と川柳を峻別せよという人もいますが、俳句という文芸からは「俳句」の面白さ、川柳という詩型からは「川柳」の面白さを味わえばよいわけです。

話は少しそれますが、OECD（経済協力開発機構）による十五歳を対象とした学習到達度の調査結果によると、日本の平均得点は、数学の応用力がトップ、科学的応用力は二位だそうです。大事な文章の読解力は八位になっています。深刻なのは勉強への意欲が際だつて低いことで、学習意欲を高めようと思うなら学ぶ面白さを伝える必要があります。

川柳など一番言いたいことをいえる文芸

を教科に入れるのも方法でしょう。最近の生徒は、どうしても読まなければならない時しか本は読まないそうです。

大阪の言葉遊びに使い、笑いを生かした作品の多い田辺聖子さんの「川柳でんでん太鼓」の一部が掲載された教科書もありました。川柳作家岸本水府師の句が、教科書で紹介されたことを我がことのように喜んでいた片岡つとむ先生のことを思いだされます。「もつと教科書にも川柳を」と、独り言のように呟っていたのが、たしか先生の最後の授業でした。

以前に、江戸時代の古川柳が教科書に紹介されたことがありましたが、こうして若い方々の川柳にたいする興味をもつ機会が増えれば、川柳愛好者にとっても大変うれしいことです。川柳は年齢の相違により発想が著しく変わることを痛感します。最近若い愛好者が多いようですが、教科書採用についても生徒を指導する「教師の育成」が大事です。高齢化問題はこと川柳界だけの悩みではありませんが後継者の育成、資料の収集と保存は川柳会の大きな課題だと思います。

一賞選考規定（要約）

- ① 路郎賞 川柳塔欄の入選句から8句
川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から8句
昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、8月10日必着で本社宛郵送する。
- ② 第一次選は名誉主幹・主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長・選考委員で行い、各賞20編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。
- ③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席（五点）、第二席（四点）、第三席（三点）、第四席（二点）、第五席（一点）の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。
- ④ 第二次選者
本社関係 名誉主幹・主幹・理事長
地方関係 【一】ブロック（一）選者数
北海道・東北 関東 北陸（2）
【京都・奈良（1）】【大阪（6）】【兵庫（3）】
【和歌山（2）】【鳥取（4）】【島根（3）】
【岡山・広島・山口（2）】【四国・九州（2）】
計25名
地方関係の選者は、適宜交代制をとり、均衡をはかることにする。
- ⑤ 川柳塔欄・水煙抄欄に六ヶ月以上出句した人に応募資格を認める。

川柳塔社各賞選考規定

- ① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年十月に表彰する。
 - ② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。
 - ③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を授賞しない。
 - ④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には授賞しない。
 - ⑤ 路郎賞・川柳塔賞の選者は、その任期中は路郎賞の対象としない。また、愛染帖・茴香の花欄の選者も、路郎賞の対象としない。
 - ⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、別途に定める。
 - ⑦ 愛染帖賞・茴香の花賞は、それぞれ選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。
 - ⑧ 一路賞・各地柳壇賞は、それぞれの選者が候補作品を主幹に提出し、授賞句を決定する。
(備考)
- この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成十二年度から実施するものとする。

平成十四年度二賞選考委員

第二次選考（十名）

橘高 薫風・河内 天笑・板尾 岳人・奥田みつ子
仁部 四郎・波多野五楽庵・小島 蘭幸・西出 楓楽
前 たもつ・木本 朱夏

第三次選考（二十八名）

本社関係 橘高 薫風・河内 天笑・板尾 岳人
地方関係（二十五名）（一）内は人数 ブロック内五十音順
北海道・東北 関東 北陸ブロック（二）
清水 潮華・播本 充子

京都・奈良ブロック（一）坊農 柳弘

大阪ブロック（六）

江口 度・加島 由一・塩満 敏

高杉 千歩・谷口 義・八十田洞庵

兵庫ブロック（三）

長浜 澄子・春城武庫坊・古川 奮水

和歌山ブロック（二）福井 桂香・松原 寿子

鳥取ブロック（四）

新家 完司・鈴木 公弘・鷺見 正子・中原 諷人

島根ブロック（三）

西村 早苗・原 章峰・松本 文子

岡山・広島・山口ブロック（二）

大石あすなろ・森井 善居

四国・九州（二）川崎ひかり・久保 正剣

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を
選択して応募してください。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳
塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、
間違いないようにお願いします。

平成十四年度各賞選考者

愛染帖賞 波多野五楽庵

茴香の花賞 宮西 弥生

一路賞 高田美代子 西口いわゑ

各地柳壇賞 川上 大輪 山本希久子

勝ち進む星に縁起を担ぐ髭

Vセールのびるさうなタイガース

人工の昼に照らされ菊のびる

妻の留守今日はのんびり背伸びする

延長戦どこまで上がるボルテージ

踏まれたらのびるスカートははいて

棒グラフのびて友情褪せはじめ

伸ばしたり縮めたりするテレビ局

のびのびになった返事が胃にたまる

いらんこと言うから話またのびる

隅っこ意見売り上げ伸びて来る

好奇心のカルチャーにも手をのばす

ブランドで飾るむなしい背のびです

パンツのゴムも赤字ものびて梅雨の空

伸びる子と言われてからの目の光

バックしてのびした数はすぐ戻る

ゴム通し母の髪がまだ生きる

お隣の気になるバラがよくのびる

伸びる芽と信じる母のプランター

この努力きつとのびるぞ見守ろう

物差しをのばしちぢめて腹たため

約束はのびのびになるエルニーニョ

介護法のびる命の跡始末

セールスへ頑張った甲斐棒グラフ

人形の髪の毛のびている蔵の中

佳

業績をのばすトップのあめとむち

預金帳のびる寿命と睨めっこ

やっと終るローンをはす梅雨の漏り

一知

セツ子

たもつ

萬的

光久

瑠美子

達子

舞夢

希久子

伽羅

民

シマ子

はじめ

たもつ

ダン吉

たもつ

千歩

英子

洋

雅文

篤子

房子

章久

達子

朱夏

久峰

隆盛

一志

のびるだけのばしてニタリ写真集

つめ切つてあげてようやく伸び直り

人

無精髭のびたまんまのゲンかつぎ

地

大好きなあなたへのびてゆくハート

天

大の字にのびて天下は僕のもの

軸

無精髭女に尻を叩かれる

兼題「友」

宮西

いつまでの三羽がらすかクラス会

友達知恵を借りて手帳

金欠の友から知恵を借りて手帳

幸せは誰にも負けぬ友の数

終生の友自伝史にいる温かさ

戦友のメールが届く茄子の花

文部省推薦という友はいず

友達の数だけ宝持っている

雨も友風も友にと山頭火

活字より友の癖字が懐かしい

一番に友が輸血を申し出る

友達の友達だったわが夫

禁酒禁煙したら悪友来なくなり

親娘かと聞かれたほどの友が居る

友ひとり大根に似て母に似て

百までも生きて友達いなくなる

親友は金を貸しても理を言わぬ

弘風

月子

昭子

朝子

鹿太

泰子

雅文

英子

鐘造

ダン吉

鹿太

保子

希久子

ダン吉

恭昌

高栄

千代

保州

かすみ

睦子

はじめ

一歩

親友よ先に死んではいけません

一本のザイルに友と血が通う

笹舟の小川を友にした仲間

友だちに貸すと返つてこない服

友達の言うことは聞く反抗期

友は良い休めばすぐに電話来る

悪友が力をくれた保証印

友は好しおんなじ海の匂いする

金策を頼める友が浮かばない

メル友が着きましたか長電話

老友も互いに匂うサロンパス

友の通夜ゆつくり来いという写真

教えようか友のボタンの掛け違い

妻と言う命預けた友がいる

本気の友は普段を飾らない

佳

約束の日を友達も忘れてる

友達と思つていたのは自分だけ

相談をする友達は別にいる

夫より友と元気で暮したい

友だちが欲しいだらうな昼の月

人

友情で埋めてあげる花櫃

友達と言われ迷惑しています

友達の数だけ笑い袋持つ

天

友達が寄ると癒しの森になる

軸

充子

武庫坊

比ろ志

月子

修

房子

比ろ志

弘一

千歩

章久

正雄

英子

鐘造

太郎

求芽

千里

義

舞夢

典子

扶美代

洋

楓

楽

兼題「だます」

田中 正坊選

イミテーションあやしく光り気をそる
真贋のオーラに迷う骨董市
知らぬ顔してこだけの話聞く
だまされてみよう相槌深く打つ
騙すつもりいつか騙されてる自分
核の魔力にまだ騙されていませんか
国民を手軽にだます民営化
難病をだまして生きて生きている
今朝もまた自分をだます化粧する
最後までだまし続けた胃潰瘍
膝関節だまして歩いて歩いている
良妻賢母坂の姿でございいます
騙されてならぬと思う有善法
鶏をだまし続ける食文化
手はじめに母からだますEメール
だますのにすこし飾っている言葉
おおかたはだまし上手が出世する
ブランドのコピーに満ちた虚栄心
だまされた自分に腹を立てている
母だます前に優しく肩をもむ
酒の力借りて自分をだましてる
鯛雲母をだました事がある
だまして後味悪い万愚節
だまされて裏の裏見る癖がつき
だまされる方も方だと言う刑事
だまされていても我が子は信じたい
だまされてだまし男と女なり

照子 哲男 比る志 かりん 昭 ダン吉 柳弘 セツ子 篤子 遠野 千代 賢子 洋 保子 英子 太郎 修 一知 瑠美子 シマ子 求芽 扶美代 千代 憲太郎 あやめ 尚士 希久子

計算の合わないうそを聞き流す

病名はだまし笑顔で看護する
足腰をだまして通路杖
もうあかん妻だます種切れてもた
恙なく騙しだまされて夫婦
だまされた分だけ財布軽くなる
悪友にまたアリバイを作らせる

住

だまされた挙句の果ての青テント
国民を上手にだますのが政治
歳五つ若く書いてる定期券
だまされてハウスの苗熱れてくる
消費者をだますラベルが貼つてある

人

だまされたままの幸せだつてある

地

私より淋しい人はだまさない

天

ほんとうのことを知らない父の咳

軸

だまされる振りをしておく妻の嘘

兼題「凡人」

住田英比古選

凡人が市民講座を梯子する
裏表ない凡人の丸い鼻
凡人の顔でラーメン屋に並ぶ
マイベース凡人でよし目刺し焼く
右向け右凡人を向いている
賞罰なし凡人同士冷やっこ

民

武庫坊 鹿太 弘風 朝子 瑠美子 月子 房子 吐来 正雄 朋月 希久子 いわゑ 鐘造 保州 充子 諷云児 武庫坊 恭昌 笛生 一志

凡人のままでゆつくり傘寿です
朝顔をかぞえ凡人歯をみがく
凡人と凡人すぐに群れたがる
凡人が上手に食べるところそば
凡人の吐いた言葉はほんまもん
凡人の暮しに似合うお味噌汁
凡人だからまわり道いといわない
凡人で窓際さほど嫌でなし
凡人も燃えねばならぬ危機に立ち
凡夫婦仲よしごっこかもしれない
凡人でよかった熱い熱い飯
ステテコの凡人二階へよく逃げる
凡人ですやっぱり葱をきざむ朝
凡人は御座候の列にいる
ハッピーエンドの映画凡人はつとめる
凡人で暇だとロクな事がない
凡人も役に立ちますボランティア
凡人の集いで天下論じてる
割り勘へ凡人らしい飲みっぷり
凡人に金魚すくいのある祭り
凡人で肉じゃがが好き妻が好き
凡人で灸の跡が消えてない
凡人で先祖大事にしています
許し合うコントが溜る凡夫婦
凡人が上手に描く無題の絵
凡人と言われコツコツ貯めてます
凡人の耳雑音によく揺れる
味噌汁が炊けたと凡人起こされる
凡人が見栄をはつてる披露宴

章久 保子 房子 瑠美子 鐘造 朝子 千歩 つづや 良子 かりん 月子 保子 ばつは 義 節子 昭子 保州 三男 洋 瑠美子 克巳 萬的 一歩 アキ 楓楽 重人 節子 シマ子 日出子

凡人だからやさしい貌をしています
 凡人の暇は鼻毛を抜いていた
 凡人の愚痴だらけ雑巾のしずく
 凡人のボツケに馬券宝くじ
 凡人で明日にいつも期待する
 凡人ですすっぽんぼんの夏が好き
 凡人の僕にもちゃんと税が来る
 凡人の明るさ諍いを知らず

軸

兼題「弟子」 河内 天笑選

後継ぎにしたい男を弟子にする
 弟子が売れその先生に陽が当たる
 いい弟子を持つて親方昼寝する

螢 朱夏 笛生

見込みある弟子へ厳しい鞭を打つ
 吞兵衛に弟子入りをして飲んでいる
 先生をうんと手こずらしてやろう
 弟子たちもいつか裏切る日を思い
 じいちゃんのバソコン孫の弟子にされ
 破門する弟子に娘が付いて行く
 麻雀も競馬もみんな妻の弟子
 サシセソわたりを弟子にしてる妻
 出来悪い弟子やつたあとあの世から
 青い目の弟子から盗む英会話
 もう別派たてたい弟子の天狗面
 左官屋の弟子は金髪イヤリング
 ギラギラと変身をした弟子がくる
 馬鹿な弟子利口な弟子もいとおしい
 先生もたまには弟子に褒められる
 蕎麦する弟子の扇子がよく動く
 名人よりテレビ受ける弟子が売れ
 辛抱と言う薬のむ弟子がいた
 内弟子の頃ねたにして笑わせる
 一番弟子だから崖から突き放す
 盆踊り一日だけの弟子になり
 師匠より貫禄があり困ってる
 人間国宝弟子が大事にしてくれる
 二代目が古参の弟子を煙たがる
 バッカスの弟子だと自認してござる
 医は仁と弟子に教える外科部長
 ライバルは弟子だと気づく舞扇
 神さまの弟子の顔して布教する
 美人しか弟子にはとらぬうちの人

朝子 弘風 昭民 洋知 泰子 幸生 柳伸 求芽 かすみ 良子 舞夢 朋月 桂香 セツ子 茜 伽羅 ばつは 義 金太 美代子 求芽 義子 セツ子 ばつは 千枝子 岳人

番傘川柳本社句会（水府忌）
 日時 8月6日（火） 18時・締切18時50分
 会場 三井アーバンホテル JR・地下鉄弁天町すぐ
 宿題 「叫ぶ」 坂元 一登選
 「暮らし」 榎本 信治選
 「センス」 中尾 飛鳥選
 「夏やせ」 板尾 岳人選
 「いらち」 岩井 三窓選
 席題 1題あり 各題2句 会費千円

美しい弟子に煩惱くすぐられ
 先生が美人で弟子を辞められぬ
 心配は女にもてる二番弟子
 住
 飽屑弟子のものだとすぐ分り
 師の技を盗んで弟子が脱皮する
 師を超えて敬慕の念は失われぬ
 気が合わぬ日蓮の弟子釈迦の弟子
 風来坊僕の師匠は大自然
 人
 内弟子に芸も娘も盗まれる
 地
 愛弟子に読まれています脛の傷
 天
 師匠とは違う個性の花開く
 軸
 内弟子に情報通がひとり居る
 ○兼題「友」の名前が空白のところは失名
 になっています。作者はお申し出下さい。

志田 千代

吐来

隆盛

泰子

あやめ

柳弘

典子

一知

朝子

老地獄

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

サークル檸檬(前月分) 小林 一夫 報

ライバルより高いドリンク飲んでおく
 ブランコ漕ぎ希望と野望ふりわける
 知り合いはポパイ一人の港町
 廃船のなげき聞こえる港街
 とんぼりを走り続けているグリコ
 骨拾いその手で酒を注いでいる
 復興も目ざまし港神戸の灯
 エンド豆ころころりお手伝い
 過去未来港はドラマ繰り返す
 あやふやな揺らしに春が逝く
 切り口にふと品格がにじみ出る
 人間以上人間以下でもなし生きる
 向かい合うより横にいる安堵感
 涙つば港みなどに置いてある

岸和田川柳会

長谷川呂万報

大相撲力比べと技比べ
 力いっばいやったか僕に問うている
 盛之
 ダン吉

ライバルの顔みて四股に力満ち
 付き添いはいらぬと米寿胸たく
 付き添いの嫁と分け合う握り飯
 幼稚園付き添う母のニューラルク
 花吹雪浴びて付き添う車椅子
 付き添いの親を断る子の自立
 議員より付き添う秘書が威張つて
 付き添いは一族総出宮参り
 五十年付き添う夫婦の泣き笑いの中と顔に出ているお人好し
 あみだくじよろよろと的中す
 膝ゆるする男図星というかたち
 にせものの中させたプロ意識
 あのーそのー答が宙に浮いている
 ほかにない答弁まかす言われている
 だれに似た答弁うまいうちの孫
 投げ売りをしたい程ある葉箱
 投げ売りに射る目探る目女の眼
 投げ売って店じまいとは泣かされる
 投げ売りに財布の紐がゆるみがち
 投げ売りはすまい乳房はまだ丸い
 一円の投げ売りにある下心
 投げ売りへフト仕入れ値が気に掛る

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

ふるさとの産湯で今日も生きつづけ
 大山はわがふるさとのオアシスだ
 ふるさとへ錦を飾るまで走る
 風の盆ふるさと恋し父とはは

柳宏子
 ゆり子
 守
 照女
 仁緑
 鍊太
 穰一
 苑子
 狸村
 さよ子
 一脩
 蛙城
 路子
 洋
 英雄
 鹿太郎
 東雲
 岩夫
 みよ子
 珠子
 洞庵
 東吉
 呂万

ふるさとは何時も変らぬ温い風
 ふるさとへ想いを寄せる孤独な日
 ストレスをいやすふるさと母の味
 ふるさとの亡母思い出す時鳥
 伝説にわがふるさとに鬼が棲み
 ふるさとの山からパワームらう日々
 ふるさとへ帰ると情けくれる花

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

カーテンが邪魔だと思ふ好奇心
 カーテンを開けて五月の私語を聞く
 カーテンを変えて女の雨期終る
 カーテンが下りて至福の初舞台
 母さんが都合してきた給食費
 人間の都合で森がひとつ消え
 飴玉が口に残つてくつ消え
 うやむやのままで酔えない正義感
 結論はうやむや煙に巻いておく
 うやむやが時に許して共白髪
 うやむやがかばつてくれた脛の傷
 うやむやに収めた火種にやけどする
 うやむやな駅を幾つも越え傘寿
 ひと零落とし仕上げる母の味
 雲ボタボタ眠れぬ夜のもの思い
 一零落とすと変わる隠し味
 点滴の雫に命の火が点る
 人生の歩み下駄箱知り尽くす
 下駄箱が淋しくなつて子が巣立つ
 下駄箱がもう一つ要る女靴

豊枝
 静江
 弘子
 久子
 鈴枝
 公美枝
 雄々
 芳子
 活恵
 澄子
 満寿蔵
 五月
 重人
 しげお
 孝一
 吉之助
 無禄
 泰雄
 秀夫
 晴美
 庸佑
 萬的
 紫香
 高栄
 稲子
 克治
 あやめ

下駄箱が今日の出会いを知っている

エリートの正体見たり領事館

へそくりをしていた頃が華だった

政治家の決まり文句は秘書のせい

四季の味みたくてくれる娘の料理

ダメ虎をその気にさせたア・ラ・カルト

風雪に耐えた花には棘がない

飯炊いて男の自立確かめる

愛はゆるやか観覧車のように

へそ曲がり隔世遺伝かも知れず

東大阪市川柳同好会 森下

美し過ぎる花に意地悪したくなる

意地悪もはいて前向き生きていく

ロボットの意地悪首を切りに来る

意地悪をしたりされたり仲が良い

きつと来る朝へ祈りを深くする

妻の乱きつと私も狼狽える

きつと来る信じ咲いてる花時計

働いた汗ならきつと報われる

スランブに出ず座禅組んでいる

末席に座り気楽な披露宴

ささくれた心で丸く座れない

母の膝座ると子供絵になるな

八十年とつても長い友だった

幸せを小さく言うて友見舞う

学友とタイムスリップして座禅

丸腰で何でも言えるのが友だ

青春を今も語れる友がいる

傷口に触れない友の温かさ

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

栄光の時には見えぬおとし穴

程ほどの見栄を誇りの中で生き

エア少し抜いてのんびり生きてゆく

亡母の手の皺をつまんで知る苦勞

勝負は攻めてる方にある戦さ

肩書がなくなり肩が軽くなる

いっぱいのお茶で心を落着かせ

叱られた母の背中のでくくりコ

母の住む郷へと飛んでゆく蜜

新柄の水着とついで判る家族愛

大波小波とついで判る家族愛

また来るぞ球児涙の甲子園

長生きをしてねと介護押しつける

伊豆大島旅の思い出椿咲く

町内を回りにくねって来た噂

親になり風船主が祝い箸

庭にきて暑氣かき立てる蟬の声

そうだとはいえず逃げがす福の神

三幸川柳教室 三宅

港みなどで花を咲かせた語り草

ゴム長の寡婦が闊歩をする漁港

帰巢性信に港に灯をともし

風待ちの港で策を練り直す

一幕のコントに揺れる港の灯

風を待つ港の宿は皆暮然

愛論

ひかり

賢

あきら

寿々女

勝

いさむ

放任

治延

八重子

吟笑

輝夫

かおり

文仙

よしみ

坊太郎

貞月

くに子

初恵

保州報

敏子

鉄治

和代

利治

朱夏

さち子

不器用な父に習った人の道

習ったが社交ダンスで若くなり

習熟の驕りにあった落とし穴

君が代を習ったことのない生徒

見習いが胡坐かいてる左官鋸

口調まで母に習っていた娘

成程と習って帰ろうと忘れ

月見草トラの元気をどこで見る

パンザイもトンネルもある草野球

屋根の草草は天からもらい水

泡立草空き地制覇の面構え

忘れな草いつも心の中で咲く

草草につけてやりたい背番号

脳内革命ペンペン草が生えぬよう

踏まれてる草の下にもあるマグマ

佳句地十選 (7月号から)

楠見章子

スカーフに私遊んでもろてます

真夜中に出て来る者を見て見たい

びっくり箱開けた途端という写楽

寄り道はワインが並ぶいいところ

値の高い方が売れてる化粧品

茶柱が立った茶を飲み火傷した

ぬつと出す猪口を受けてる泣いている

シンプルな笑顔が好きなた柿の種

熱井が続く金魚はよくねむる

氣がつくと窓はいつきに海となる

起世子

正匍

登美代

保州

町子

純子

和子

豊太郎

義雄

千子

昭枝

昇

孝子

小雪

きみ

和子

扶美代

二郎

芳光

篤子

桂子

アキラ

富喜子

米もまた質より量の大家族
先読めぬ老いが支える米作り
自販機で米一キロを買える街
妻の留守一合飯にある孤独
ご飯粒つけて怒って差し向かい
炊き上げた飯の美学に酔っている
洗い米今日ではめだたい顔で盛る
賑やかな仲間の好きな五目めし
終焉の港はやはり凧でいる

川柳藤井寺

高田美代子報

騙された振りで成り行き見てる父
シヤネル5男を騙す仮面かも
警官というから信じてたうかつ
騙されておこうあなたの微笑みに
たくさんの風を騙して蝶になる
すっぱりとネコを被つていたらしい
信じておこうか良性という告知
騙されて生きるほのかに燃えながら
頭鼻胸も細工をしています
来ぬ人へ全身バラの刺になる
片方の耳で聞くから騙される
そこそこに泳ぎ上手がする出世
ひっそりと泳ぐ団地の鯉のぼり
泳がずにブルを歩くダイエツト
しばらくは泳がせておく法の網
制服を着るとまっ四角に泳ぐ
パレットの海を泳いでいる絵筆
安全圏ばかり泳いで生き延びる

みね 嘉平 キミエ 健二郎 章子 正一 桂香 美子 栄之進
雅枝 悦子 六点 扶美代 アキ 一知 一箇 信子 みつこ 美子 美代子 史郎 昌子 利武 昭子 重人 幹斉 沼美子

ごめんねと言えぬ自分が大嫌
父の日へごめんと書いてみんな留守
ごめんねと孫は小さく正座する
賭けが好き淀の夕日にごめんやす
長いのはごめん蛇でも鰻でも
ごめんねと素直に詫びて褒められる
謝ると水が一気に流れだす
ごめんねで親子の絆歩みよる
ごめんととも言わず心を奪う人
まだ少し愛が邪魔してまた許す
新米のごめんなさいも板につき
かく生きて 卒寿を祝う午の春

川柳ささやま

遠山

可住報

翔べる日へ念入りにする羽繕い
遠い日を語りつくそう草ひばり
回覧板花のニュースと遍路笠
賞状が片手の労へ涙ぐみ
たわがないニュースがはずむ凡夫婦
弥陀の手にのれる善積む八十路坂
独りっ子へ母の温みの置き手紙
手を抜いた野菜は心みぬいてる
横顔が父に似てきた子も五十
似てはしくないもの似てる血の絆
読み返す交換日記が生きかえる
劇的なニュース茶の間をかきまわす
輝いた頃が懐かし酔い日記
手抜きした料理を皿に光らせる
似た者どうし後の世までと誓う愛

喜代子 典呼 ヨシ枝 栄一 たつお 志洋 和樹 龍一 鐘造 婦美枝 かつみ 春蘭 純子 恵美 多美子 美智子 八重子 靖子 つや子 かほる 君代 穂子 関子 美沙子 美緒子 朝子 みはる

印刷の香りで包む初日記
そつくりと気付かず受話器が慌てます
こうのと一羽かえったいいニュース

竹原川柳会

時広

一路報

僕の宇宙へ蛍一匹棲んでいる
夢で見た蛍はワルツ舞っている
ホタル飛ぶ里に戻した皆の知恵
蛍火の悲しい恋もあるだろう
ホーホ蛍淡い光に青き恋
焼きついた蛍験の中で飛び
夏草に飛び交う蛍火のロマン
甘い水は辛い水だと知る蛍
ひゆらひゆらと命燃やして蛍とぶ
蛍火の幻想少女夢を追う
旅とりとりの世この世を飛ぶ蛍
はたるの光君美しく老い給う
愛犬と遊んで心癒そうか
友人が花一輪の誕生日
茄子トマト胡瓜も植えた曇り空
石垣島一寸覗いて来ましたよ
一日一句まずコーヒーを入れてから
井戸水が五臓六腑に染みる里
ゴクリ飲む水のうまさを知る汗よ
妻の酌今夜はとことんまで飲む
妻と飲むワイン明日の虹が浮く
葉二錠飲んで今日を終りとす
ほろほろと想いこぼれる杯を干す
妻の留守自刺しを焼いてひやで飲む

寿美子 富住 可住 蘭幸 節夫 正宏 貞子 淑子 笹舟 一節 民恵 汎美 栄恵 千枝 孝枝 房喜 夏子 笑子 厚子 規代 半覚 菁居 輝恵 万幸 年子

飲めぬ日は寂し山頭火も僕も
いい艶だ飲んだ歴史が浮いている
どの川もみな飲み込んで海の青

静風
力
一路

尼崎いくしま川柳会 春城武庫坊報

満席の客うならせて名演技
新幹線富士のみえます指定席
意のままの人生行路悔いはない
人生は苦あり楽あり迷いあり
頼まれて男人生岐路に立つ
花嫁の父の無口な披露宴
花嫁の花の香りにチャベル鳴る
飴細工少年の夢次つきと
連休も終ってやつと我が休み
お国柄知って溶け合うキャンプ村
小さいこと言うなと大物無理を言う
淡い恋そつと葉の色あせて
屋根の上のペンペン草は威張らない
流す血の無いロボットの悲しすぎ
鉄砲百合トランペットが鳴り響く
足元の線から美人見上げられ
かくれファン背中に入る応援歌
検査の日花にゆつくり水をやる
向きあうて漕ぐブランコが熱くなる
過去形の話ばかりで今がない
森を抜けると道が多くて戸惑いぬ
万年筆のインキ乾いて六月は
撫子のメリンズ夢かまぼろしか
麦秋や失くしたものが光りだす

糸子
正子
満寿蔵
幸子
純
しづ子
比ろ志
吉太郎
節子
勝巳
昭三
孝一
郁子
久子
東園
紫香
里江
和子
光穂
義芳
武庫坊
薫
年代
恵子

葱伸びるはかなさといて夕おぼろ
川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

芳子
佐代子
泰子
正博
克子
三男
佐一
あつむ
三喜夫
豊太
優子
英子
射月芳
保州
大輪
美子
さち子
利治
和重
富美子
稚代
公子
怜
健三郎
和
寿子

キャンセルをしたいが指輪ははずれない
キャンセルの予感上手に替わってくる
キャンセルをしても白紙に還らない
天国をキャンセルしたと笑うてる
トップですキャンセル待ちのトップです
贈り物キャンセルされて腹を読む
キャンセルに民の怒りをぶちつける
突然のキャンセル何かあったかな
茶柱が立つて六感みな狂い
六法に愛の匂いが見つからぬ
六角にしてからとれた肩の凝り
誰も居ぬとこで六方踏んでみる
六時にはいつも帰っている不況
六法を齧ると甘い汁が出る
六根清浄婆の汚れを流します
六月に母になります娘のたより
六法の裏で策士がドラマ練る
六枚切りのバンでこたたる老いの朝
カラフルなパズル咲いた初夏の町
ファッションが連れて来ました初夏の風
カラフルな日傘がはすむ初夏の街
新緑へもう落ちつかぬ絵具筆
カーテンもレースに替えて初夏を舞う
陽炎がゆらめいている初夏の道
衣替え美女の素足が魅力的
初夏からの誘惑むねを刺激する

陽が昇る神の予告と思う朝
社長が行くぞと支店へ電話する
たんばの綿毛予告もせず飛んだ
予告編ないから明日も生きられる

川柳塔唐津支部 久保 正剣報

常連の酒は受け皿まで注ぎ
ロウソクの灯り生命を燃やしてる
クレヨンの色が足りない孫の夢
賜杯手に涙こらえる大銀杏
ビンラディンにこの日暮れ坂
及第点やれずに焦る人暮れ坂
むつころう佐賀の人氣を一人占め
待っている球をあの人投げて来ず
地下茎があるはずだった同期会
八十になつても青い鳥が好き
はびきの市民川柳会 徳山みつこ報
殺されたらかなん入らんとこ保険
梅雨入りの宣言がそに晴れわたり
裏木戸を入ると犬が欠伸する
新緑に緑の空気入れ換える
まだまだと言いつつ未入老人会
みずは銀四月馬鹿です未入金
輪の中に入る仮面をさがしてる
丁寧に掘るわたくしの入る穴
こつかいもデフレの波をもちに受け
妖しい財布デフレの影でよく笑う
父さんの帰りが早くなるデフレ

緑良
清史
輝子
紀久子
正劍報
兵八郎
晴翠
高明
輝夫
勝視
虹汀
水笑
四郎
正劍
六點
志洋
敦策
耕策
フジ
章司
重人
美代子
真一
忠宏
絢子

リストラの町に今年も来た燕
年金の財布にちようどよいデフレ
しみじみと語り合う友まとも去り
しみじみと老いを見つめる美谷室
思い出ししみじみ浸る葉桜よ
若き日の怠惰しみじみ悔いている
しみじみと思う昭和の激動期
亡母さんに似て来たなあ鏡見る
胸上げの浮いた瞬間撮るカメラ
歩を突いた瞬間角が利いてくる
阪神が勝った瞬間見てみたい
特ダネの一瞬狙うカメラアイ
一瞬のブレーアとあと語り草
ニアミスを瞬時に避けた腕の牙え
一瞬の隙が人生狂わせる
瞬間に伸びたその手の温かさ
喉元を過ぎるせつなの生ビール
一瞬の油断のための地獄行き
ボクが来た瞬間しんとする茶の間

川柳ふうもん吟社

杉本 孝男報

真実は一つだ汗を愚痴るまい
わたくしの中に愚かな王がいる
年寄りが笑いた今だふざけるな
愛添えた母のご飯はてんこ盛り
爪の泥取つていそいそカルチャーへ
肩書きで人を見るとはふざけるな
ふるさとをてんこ盛りして子に送る
母ちゃんの皺に愚かな僕がいる

ダン吉 みつこ 昭平 久仁子 柳宏子 吐来 たいし 泰子 庸佑 狹沓 敏 かつみ 洞庵 専平 さとみ 一知 一壺 扶美代

女房は刺身の妻かふざけるな
言えはすむ愚痴なら聞いてあげましよう
てんこ盛り愛を与えた子が逃げる
三世代違うテンポで丸く住み
ふざけるな酔つていたと言わせぬぞ
空曇りテンポ早める農作業
ふざけるな離婚りこんと言うでない
負けん気の愚か爆竹抱いている
升酒をてんこ盛り呑む店開き
とんびの子とんび地道に生きている
人並みのテンポで出世してと言う
願わくは冥土行きまでテンポよく
テンポよい咬詞で相手煙に巻き
リストラの嵐いつまでふざけるな
ワンテンポ遅れあなたについて行く
夫唱婦随テンポゆずつて波立てぬ
D五一のテンポに出世欲はない
泣き声で虐待なんてふざけるな
二股をかけた恋とはふざけるな
責任は秘書が秘書がとふざけるな
安楽死させない罪に愚痴をいう
血税をつまみ食いとはふざけるな

ほたる川柳同好会

田辺正三郎報

出来た句を捻りまくって批評され
辞退もうできないように仕組まれる
落選句ひと捻りして立て直す
大將も博士の夢もただの呆け
大將と言われのせられおまけする

昌鼓 菊香 鐘馗 志げ緒 一粋 行男 茂登子 一瑤 益子 春名 美雪 富士雄 宗明 金祥 悦子 悦子 無限 孝美 圭一郎 毅 多哥由 孝男

この松の捻れが妙に味を出し
回転ずし大將不在で回ってる
辞退なぞ思ひもよらぬ欲の皮
咽喉で手が辞退するなとやきもきし
お捻りの当って痛し有難し
引き留めを読んで辞退の茶番劇
大將は母さんと子は知つて
ばあちゃんの方言に首捻る孫
主婦の座を辞退したいと妻のグチ
納得をさすのにこの世金が必要
一捻り技が冴えてる綱力士
不況でもいちげん辞退 祇園茶屋
大將の拘る味のサシスセソ
納得はしてない顔で寄付を出し
腕白も餓鬼大將も見えぬ街
捻つたら出た水道のありがたさ
ねじ切った心のはしがもつれてる
大將が今日もお詫びのマイク持つ

ローズ川柳会

山崎 君子報

風にのり宙を飛んでる白昼夢
野の花を手折れば蝶がついて来る
若者を叱る度胸に不安感
明日はあす悔いなく今日を生きてゆく
紫陽花の色美しく思い出す
三日分六甲おろし吹きまくれ
こんな時妻の度胸が物を言う
意地悪な風上手によけてシャボン玉
恋の風きつとモモいろしてるだろ

いさむ 契子 勝 正三郎 緑骨 祥風 敞子 雪子 黒兎 直次 長一 千里志 ヤギエ 実 昭子 柳童 見清 桂子 雅子 貴代子 トミエ ミサヲ まさお キク子 義子

情報発信闇夜に小さい風生れ
業平忌風にれんぎよう科つくる
大正琴の音色恋しい友ばかり
燕には一度も会わず風縁

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

哲子 孝一 年代 武庫坊

応援の中で異文化手を握り
応援に酒と肴を提げてゆく
リハビリの母へ明るい応援歌
応援の人文字蒼空がきれい
季が巡るたび指折る亡娘の年忌
一枝折る花の痛みに託びながら
折り返す余力を少し残しとく
葉包紙翹び立つ鶴を折っている
折り目正しく袂紗を畳むのも旧家
一病息災世間に折れていく丸さ
競輪の負け素うどんに啜られる
自転車に乗ると曲った腰が伸び
走り去る自転車にらむ車イス
すべて告白ゆつくり雲は流れてる
税務署はすべて裏まで調べてる
社の独身すべて惑わす娘がひとり
すべて無に戻して明日が描けたなら
腹立ちをすべて忘れて輪に入る
すべて君なら話してあるつもり
手の内をすべて読まれている不覚
すべてに効く万能薬は君の愛
恋をしてすべて桃色青春期
若人がすべてをかける謎ひとつ

しげお 哲子 静子 メ女 柳安子 能子 たず子 萬的 義子 石舟 曙蝶 嘉彦 いわゑ 五月 孝一 比ろ志 美代子 春蘭 庸佑 光美 江美 トミエ

正直に生きているから忙しい
腹一杯カリリカット食べている
鄭重に間にあつてますと置く受診器
人柄を丸出しにして世話をする
口答しても夫婦茶で和む
人よりも人間らしい介助犬
テストには強いが力ないキヤリア

川柳塔まつえ吟社

津川

紫晃報

気まずさを茶漬けで流すにがい夜
お茶漬けをそそる笑顔が美しい
茶漬けサラサ胸のシコリを押し流す
ほろ酔いの目にお茶漬けのわさび利く
豪快な男と食べる蛙茶漬け
おふくろの味が残っていた茶漬け
ワツと騒いでストレスを散らして
騒がねば己失なうフリーガン
胸騒ぎするから喪服吊って置く
騒がれて人は悲しく瘦せてゆく
騒がせてバラの散るのをぞく犬
騒いだら夢の形がこわれます
通り雨昨日のことはみな流す
通り雨庭に模様を書いてる
音たてて夏のはじめの雨がふる
通り雨洗濯物が慌てて
照てる坊主虹をみている今日の雨
雨に泣き雨に笑って穂が実る
作戦が人の心をよく掴む
ねむそうな金魚作戦聞いている

(安)幸子 ひふみ 房子 多賀子 多喜 昌枝 昭二 久枝 多博子 邦代 螢 治代 茂美 桂子 政子 ちえこ

諷云児 松煙 いたる 紫香 奮水 鹿太 正坊

作戦はいらぬ平和な空の下
ありのまま下手な作戦などしない
遅刻する作戦練っている武蔵
作戦のとおりゆかぬへそ曲がり
石ころにけつまずき知る歳の数
発掘の石がイベント作りだす
漬物の石が重たい負け惜しみ
借りて来た知恵で捨石よみがえり
私の流れを変えた母の石
聞くだけで返事はくれぬ石仏

尼崎浜尾川柳会

田辺

鹿太郎

飯の世の乱れを怒る雹が降る
最近はいき勝手に虫眼鏡
好物は肉じゃがだった孫嫁ぐ
明らかにしてはいけない事もある
ワイルドカップ日本中が盛り上がる
哀楽の証を刻む顔の皺
花時計市民の時を刻んでる
パールかけ言わぬが花の嫁姑
雹が降る何事ならんトタン屋根
曾孫抱く八十路の夫の良い笑顔
ケーキ屋の前で理性が往き来する
あじさいの葉に初蛙畏まる
明らかにロケットの勝ち彼無口
限界かその動きでは持たない
醜聞の過去を消したいシユレツダー
刻まれた賜杯手にする至福感
啜られた誤字小脳に刻み込む

鹿太 カズ子 その 幸子 江美 玉枝 よし子 信子 耕治 龜与子 イサミ まさ 孝一 義芳 正治 満寿蔵 求芽

智恵子 静恵 石花菜 叮紅 注湖 たけし 宏 義良 すみこ 紫晃

電が降る雷様の触れ太鼓
ねぎ刻む音で民宿朝が来る

京都塔の会

都倉

求芽報

柳安子
紫香

毎日の心経ひととこぬけたらし
ゴミ出しが日課カラスと顔なじみ
職安へ日課となった朝の靴
お早ようの日課に溶けるわだかまり

寿美子
石舟
百合子
啓子

名水もどれほど滑車知りつくす
きき酒のはろ酔いみどりの風の中

美穂
春

静かに咲く梨の花にも期待かけ
雨降りの庭の緑で目を洗う

八重子
麗

名水で出来た甘口女酒
酒蔵で杜氏の唄にいいお酒

求芽
満子

野の花はいつも誰かを待っている
跨がれたとも知らぬ顔 大軒

すみこ
天雀

寺田屋の今も龍馬の影浮かぶ
寺田屋に維新の風が今も吹き

江美
輝美

陽がやがてとても静かな朝まだき
しっかりと前向きでいく勝負服

ふみ
日枝子

世をなげく龍馬の深いふところ手
勤皇も遊女も刻が押し流す

澄子
義

回廊に立つて日本の頭脳惜しむ
バラが咲いたを歌う心のかくや姫

田鶴
瑞枝

人情にもろい一本刀です
寺田屋の事件を語る刀疵

紫香
幸代

驚のラブコールとは知らず邪魔
昔むかしはサラサラ小川友だった

蘭
てい子

斬られ役上手になった孫のもり
ひじ鉄が刀に勝る胸の疵

典子
満寿蔵

道問えば手袋ぬいで地図を書く
四面楚歌もう決着はつけている

すみえ
なみ

近松のふたり斬られて想い遂げ
チャンスまでがまん宝刀まだ抜かぬ

正坊
孝一

事を分けて話せば納得するだろう
前向きになって輝け五七五

玲子
恵子

政治家の懐刀足掬う
入門書せんぐり貰ってまだ未熟

宏子
庸佑

御見舞に心残りを持ち帰る
川柳塔なら

春枝
柳弘報

冷蔵庫せんぐり賞味期限切れ
せんぐりと母の気遣い盛つてある

福子
シマ子

生涯を点取り虫で終えるのか
更迭でがっくりなつて狂い出す

坊農
博一

盲人の心せんぐり指で追う
ど忘れも手抜きも毎度ある日課

芳子
メ女

人生を取り戻したい昨日の今日
新緑は私のうつを取ってくれ

敏子
積子

悪なく日課を終えた仕舞風呂
平凡な日課出世にほど遠く

友照
高栄

俺こそはルールブックだ胸をはり
川柳若葉の会

美和子
むつみ

宮崎シマ子報

宮崎シマ子報

少し離れて吊橋の揺れみていよう
距離において眺めてみれば只の人

喜美子
欣史子

うらやまし離れてくらすバラサイト

香住

狂牛も育てた人も救われぬ
ライバルを狂わす策を練る地酒

あやめ
とし子

野心まだ迷う取り皿持ち歩く
取り上げるテーマ癒しの曲を選ぶ

桂子
恵美子

今年の春は桜も狂う早春譜
三度目の言い訳少しずれてくる

真理子
春蘭

坪数で言うてくれたらよく判る
塞ぎ止めて川の掟に背くダム

春雄
茂雄

ルール守って君と平行線のまま
広大な面積ロシア活かせない

良一
理恵

お隣へ倍のお尻が来て座る
医者酒取り上げられた夜の底

章久
長生

花唇狂わせ春が駆け抜ける
核増産ヒト科狂つていませんか

太一
富吉

モナリザの笑み面積を越えている
取る取らぬ友と競うた僕の妻

秋雄
卓

墨壺に淀生きている宮大工
真実を語る日記のペンを取る

和夫
孝子

魂を取り戻そうと廻る
水槽のルールか群の右曲がり

道子
秋泉

老いの汗耕地面積守り抜く
にげんの驕りに天も地も狂う

隆盛
國治

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

少し離れて吊橋の揺れみていよう
距離において眺めてみれば只の人

喜美子
欣史子

うらやまし離れてくらすバラサイト

香住

昇り坂敵七人に離さぬ目
海を見て顔もこころも癒される
冷静になろう少し距離をおく
親離れしたよに赤ちゃん乳離す
妻の手を離すと迷う癖がある
未完とは知りつつ愛の手を離す

川柳塔鹿野みか月 土橋

老いてなおチビリチビリと喉洗う
故郷の風が昔をのせて来る
世界中和のリズム待つている
偶然を装う待ち伏せだつてある
出過ぎたかまた荒縄に縛られる
かくれんぼ鬼が淋しい目にかわる
坂道の途中で歯車が狂う
電球を替えても読めぬ肚の中

かたつむり金庫を背負い五月晴れ
新札を毎日詰めてゆく金庫
まだですか貸金庫から待つ景気
入れるものないから金庫邪魔になる
熱い息開かずの金庫ゆるませる
太つ腹見せて金庫の空つ風
父のこ手提げ金庫と鼻メガネ
通訳になつて日本語カタカナ語
大阪で鹿野弁など通じない
日本語の京都むすめの愛らしさ
日本語の通訳になりママになり
日本語の説明付きの洋画展
シガレット吸い過ぎ注意と日本語

弘直
慶子
能子
シマ子
アキ
あずき
螢報

喜与志
武子
幸枝
弘子
茶子
きみ子
はるお
英夫
なが子
八重子
みどり
和子
立子
くに子
孔美子
かおる
保子
汲香
富久江
かつ乃
節子

美しい日本語並べ 五七五
やれきようとや京で通じん日本語だ
畳替え蘭草の匂いまだ残り
衣替え仕立て直せと胴まわり
色眼鏡替えても明日が読みきれん
人間にもどれる首に挿け替える
仏さま匂の花です差し替える
針のない時計に替えて生き伸びる

かわはら川柳会 上田 俊路報

リハビリはちよつとずつでも積みかさね
初参観ちよつとドキドキ母も子も
ちよつとだけ言いつつ増えた夫の酒
ちよつと好きだけどこ心はあと退り
ずれてる妻の感覚ちよつと出る
山菜煮過疎の誇りをちよつとずつ
ちよつとだけリッチな気分コンサート
歳かさね親ににて来る蛙の子
苗代で蛙合唱競い合う
大器かも知れぬ蛙の面に水
休耕田で鳴く蛙たち社会派か

川柳大阪 高木 信醇報

老いてなお親爺が生きていたならなあ
煩惱に打ち勝つ座禅まだ続く
勝つまでは帰してくれぬへば将棋
陽は昇り明日への誓い決意する
勝るとも劣らぬ力妻の愛
荒らされたキッチン野良の足跡が

実満
重忠
久枝
公子
季芳
諷人
かつみ
螢

登生
一薫
悦子
雅子
聰子
寿子
余史子
道子
輪多朗
泰良
俊路
喜楽
宏昭
利笑
功太
金太

昇りつめあれから僕が空になる
孫が来る笑顔と声に家は春
陽が昇る婆ちゃん荒れた手を合わす
忠告も勝ち気の耳を通り抜け
昇る陽へ花の余生は媚を売る
女房には勝たせて置いてはくそ笑み
づばら屋で一パイやるのが楽しみで
Yシャツの紅がさせない言い逃れ
期待担つて顔活きいいと陽が昇る
負けて勝つ女の意地の底知れぬ
辻元さん疑惑でトーン低くなる
享年はとづくに親に勝つてはる
まさかとは思つたしぶん寄付をする
心からお詫びしますが聞きあきた
何よりの証拠は無事に着きました
幸せの尺度それぞれの花の下
議員まで昇り汚職で転げ落ち
立ち昇る煙草の煙にある詩情
色男少しずばらな方が好き
優しさが勝負にみえる負けてはる
ずばらした付けがきましたこのカラダ
勝負ありキラリ輝く汗走る
日は昇る昨日の憂さは忘れよう
苦も楽も生きてる時の証なり

川柳塔みちのく 小寺 花峯報

子の夢の形になつてゆく粘土
マネキンも和服を着れば化身する
見かけより心の澄んだ妻だった

ダン吉
章久
一步
春蘭
洛醉
智子
敏

重人
一風
朝子
ひろゑ
笑風
柳宏子
本蔭棒
照月
民子
鉄心
川童
柳弘
美花
かよこ
柳昌
まつお
信醉
蛙痴郎
謙一
一光

捏ねられて踏まれて強い革になる
 手際よく捏ねただんごの薄皮
 好奇心あるから前へ踏み出せる
 心意気 姿形でない女
 婆さんの手でこねているハンバーグ
 好奇心あるうあなたにはほけてない
 好奇心マウスに少し触れてみる
 好奇心他人の庭に入り込む
 土捏ねて修業始まる九谷焼
 働いた汗の姿を子に見せる
 犬の仔が誕生じつくり子等見つめ
 嫁ぐ日の姉と一緒に香を聞く
 街で見た違う姿の妻だった
 くだくどと捏ね回している正論
 あれこれと屁理屈捏ねる評論家
 売りに出す仔牛にだだを捏ねられる
 一輪の花と対峙をすることはぜ

城北川柳会

川久保睦子報

きよし 妙子 ヒサ子 北歩 隼人 慕情 銀波 ふさゑ 雅城 愁女 井蛙 黙人 叶 花峯 一花 カカ 五楽庵 美代子 東雲 高栄 柳一 静枝 政子 登美子 あい子 トヨ子

土産買う遍路小銭のお賽銭
 春ですねべんとう積んで犬連れて
 後輩が肩書さ上げて主賓席
 ちよつとだけ黒い手帳を見せて聞く
 五平もち食べ食べ歩く飛驒の町
 酒飲めば今日一日の憂さも晴れ
 占いを信じて運の待ちぼうけ
 デパ地下でパリの香りのケーキ買う
 短冊を読みよみ今日も通り抜け
 古傷に触れてはならぬ古茵
 満ち足りて隣の鬼に気が付かず
 菜の花が視野いっぱいに笑いかけ
 足踏みの数も入った万歩計
 勝算は起死回生のこの一手
 名を秘めた手帳を胸に鉄の雨
 友達の花転先を書く手帳
 自画像の涙の跡は消しておく
 何もかも許せば涅槃の灯が見える
 家族とは枷か絆か風に問う
 なにげない言葉の裏にあるヒント

川柳ねやがわ

江口

とし子 昭子 史風 順三 久留美 志華子 倫子 達子 重人 典子 求芽 千歩 公一 はじめ 照子 ひさ乃 ただし 綏子 千里 度報 三郎 仁清 とし子 時弘 度 佳風

告白を前にひそかに深呼吸
 阿と畔が少し乱れる胸の奥
 知恵の輪が解けてふたりの深呼吸
 手伝えば君は墮落するだらう
 休日はエプロンかける若社長
 真つ先に手伝いにゆく処世術
 リハビリへ手伝う心鬼にする
 治療力を手伝うだけという名医
 手伝うて物心共の和が生れ
 マスコミのスクープ厳しスキャンダル
 スクープは母が仕入れてくる噂
 スクープだ記者が駆け込む輪転機
 スクープは足でつかめとまるでデカ
 スクープが極彩色にとんでくる
 ペイオフへ確かめるほど貯めてない
 花鉢ころろ安らく道がある
 花鉢こころ安らく道がある
 嫁が来てさわかになる過疎の村
 景気まだ底打ち感を感じない
 死にたいと口ぐせにして生きている
 一枚の舌で生きてるのが自慢
 騙された振り役者は妻が上
 道草をしたら赤いランドセル
 温かい心で垣根低くする

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

利修 柳弘 亜成 日出子 忠央 朝子 たもつ 一笑 三峰 シマ子 高栄 一風 茜 博泉 仁清 波留吉 ルイ子 弘一 かすみ 庸佑 恵子 洋 ちよえ はるみ かつ子 聖子

無駄だと解つていても夢を買い
 夢ひとつ川の流れにさかろうて
 初夢で笑つていたのはお亡母さん
 夢にみたあの人どこかへ行っちゃった

見づける信じた夢の花言葉
逃けてゆく夢追つかけて半世紀
片ちびの靴だがやつぱり捨てられぬ
人間が檻の中にある夢を見た
負いきれぬ夢負わされし子の目まい

川柳塔打吹

米田 幸子報

包丁を研いで指先に切る
量しても己の呆けは隠せない
この際だ拝借しよう忘れ傘
鯛の目が包丁にらみ黒光り
四方八方眺めたあととはわしの物
三世代うちのリーダーかあちゃんだ
とんとんと包丁の音に酔う自分
柄を替えた古包丁で腕がなる
財産をばかし脱税する特技
ゴマ磨りの中でリーダーはくそ笑む
リーダーの烏帰れば皆帰る
自衛隊九条量し派遣する
別荘を借りて掃除に明け暮れる
リーダーが旗を振り振り怒鳴りだす
お裾分け皿も食べたと言いに来る
リーダーが口を出すのでぶち壊し
しみや皺ぬつてはかしてハイチーズ
包丁の切れ味試す紙一枚
政治家は不正はないと曖昧に
人妻と銭は拝借せぬことだ
妻の知恵拝借しつつ歳を取り
肝心なところ量してあるビデオ

惠美子 好栄 博利 清泉 白汀 照彦 美美子 順子 克枝 久芽代 龍枝 善江 孝恵 よしえ 和枝 かつみ 重忠 慎元 和子 玲坊 玲泉 京子 貴恵 忠良 博文

にんげんか猿かわからぬ霧の中
写経してはかした罪を悔悟する
夫と包丁上手に使ううちの嫁
リーダーになって歩調が早くなる
リーダー失格相談役になる
リーダーいるのか蟻の列止まる
他人の知恵借りて人間やっている
量すのに慣れて麻痺した出納簿

南大阪川柳会

吉川

舶来のワインは客に見せるだけ
こまかぶり白鶴が来て古希祝
居酒屋で見上げる位置にある名酒
床の間の銘酒いつまで飾り物
社殿には各地名酒の菰並ぶ
六郎の絵に青空を飛ぶ音符
僕の絵のトマトを柿とほめてくれ
遠い絵になってしまった肩車
この歌を唄うと古い絵が見える
生きているその日その日の絵を描いて
裸婦の絵に夜風一瞬戯れる
それぞれのレースが待っている入社式
ゴージャスに叶姉妹が着るレース
カッターで二十四人の腕揃い
菩薩がも夜叉にもなつてゆく女将
若僧がつけ入るすきなどない女将
火炙りの刑ごまがバチバチ自己主張
胡麻和えの香りに亡母が生きている
胡麻よごし春の香りの山の宿

完司 美知江 友楽 芳光 螢 雄々 節子 幸子 志華子 憲太郎 遠野 初太郎 弘泰 萬的 章久 幸子 度 道子 半蔵門 ひさ乃 柳伸 東雲 雅文 柳宏子 寿美 千り

寿美報

川柳塔おとし

小林由多香報

かくし味ひとつ覚えの胡麻油
一年生横一列のレースから
文豪が好んで飲んで名酒とか
大切な人を名酒と待つ長さ
コンパクト今日のレースに身構える
のれん守る女将に深い読みがある
磨かれた笑顔をもっている女将
笑顔よし女将の背な隙がない
その時歴史変る場面に居た女将
今年もまただし絵で終りそう
胡麻わかめしつかり食べて薄い髪
昔のこと時が流して残る数
薪で炊く昔の飯はうまかった
ポケットで昔の嘘が騒いだす
耳搔きに昔話がこびりつく
四コマでは無理だよ昔語れない
膝の上昔ばなしの灯がともる
その昔流れを変えたキノコ雲
女流画家夢見た昔今も夢
大過なく過せた日々を振り返る
大きい手先はやさしく強かった
大さはバラ一輪のほくの愛
大会へ出かける朝の武者ぶるい
大好きな酒肝臓がすねよう
私にはむつつりなんてできませぬ
娘が父のむつつりを消すありがと
むつつりの顔腹の虫おさまらず

なぎさ 叡子 三男 久子 千梢 庸佑 ダン吉 頂留子 洞庵 重人 道子 清子 紀子 みさを 彰雄 一弘 黙光 艶子 庸二 佳一 真一 義弘 由多香 仁子 以和万津 小生

無言でも熱い眼差しありがとう
むつつりが案外愛の罫に落ち
むつつりの父が笑えば座が和む
むつつりと仕事ひとつをやり遂げる
つむじ風抱いてむつつり生きている
請われてもどうにもならぬ金の無理
スケジュール無理して組んで旅疲れ
無理をしたからだ主治医に叱られる
体力も財布も無理がもう利かぬ
今無理をせねば持てないマイホーム
親見れば高い希望は無理ですね
ひと並に生きたいだけに無理をする
遺伝子を狂わすほどの子に期待
目標は大臣賞と決めている

川柳さんだ

北野

哲男報

恋の詫びとり涙を添えながら
ポトリきてビヤガーデンの思案顔
あますっぱい忘れたはずの恋いちこ
母にも砂糖をかける母だった
冷凍室去年の苺苦笑い
待たされて吸ったタバコも数えられ
生きながら死んでいるよな蝶番
年金のわくで泳いでいる私
惚けたした今日も眉毛を描き忘れ
待ちに待つ人から手紙軽き音
眠れない夜に明日の絵を描く
お金さえあればと思つていた昔
かたつむり思わず童話口ずさみ

雅通 雄々 風花 大鯰 登美 幸次郎 富貴子 舍人 せつ子 孝子 芙美 宏章 邦昭 俊昭 正和 ちあき 章子 開子 正行 敦子 忠 歳子 サクラ 婦美子 千代 久恵

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

かたつむり持ち家欄に丸を入れ
外泊は一生出来ぬかたつむり
父の日も主役は何故か母になる
前向きな蟻 神様の目にとまる
朝日浴び今日もやる気の老い二人
近頃は瘦せた話題が多くなる
おまわりを道に訊いてもW杯
潮騒がいつも聞こえる海女の髪
有事法ラッパ吹くのは誰ですか
戦中の苦勞はいやよ有事法
のど元を過ぎて神様忘れられ
難題を受けて励みの糧とする
相談を受けてそのまま日が過ぎる
受けるのは女房で安心して投げる
ひとの情け素直に受ける車椅子
慶と弔 真珠はどれも知っている
真珠抱き筏に揺れるあこや貝
あこや貝守る命の真珠王
健康な証の汗は真珠色
粒よりの真珠育てるあこや貝
幸せな指に納まる真珠玉
ローンは嫌いこつこつ貯めて真珠買っ
花嫁さん少子社会だがんばって
七転び間に合いそうにない八起き
よもぎ餅お皿に盛れば母がいる
欠点を知り尽してる真珠婚
自然から受ける幸せ明日がある

藤朗 哲男 求芽 しばお 蛙 満寿巳 緑骨 メ女 千里志 正坊 重人 満寿蔵 実 柳宏子 萬的 見清 庸佑 都代子 諷云児 慶子 紫香 春 吉太郎 だし 英子 タミ

家計簿のピンチ笑って強くなる
亡命の計り知れない暮らしぶり
無神論苦しい時だけ手を合わせる
苦勞した話は人に言っまいぞ
気の早い露を下さい草の虫

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

しみりととしてはおれない風の街
しみりと親の説教聞いたふり
犯人をしんみりさせて口割らす
しんみりとしてたら食べていかれない
核の傘借りて物を言えぬ破目
くやしいがチャンスに傘が開かない
ハイハイと清濁を呑む破れ傘
一枚でよし視界に賭ける地図がある
我が意地を通せば視界狭くなる
しよはくれた視野を一喝する背中
鼻先の高慢近くて見えぬよう
実家への気くばりをするたすき掛け
オットット弥次郎兵衛が笑つて
バランスが崩れ奈落の底を見た
やじろうべえ昨日へばかり落ちていく
手をつなぎバランスを取るかずら橋
だんじりの屋根ひよいひよいとうまくはね
家柄のバランス蹴つてきた二人
バランスを崩すひとりの仕掛人
どうみても打算的に成り勝ちだ
そばを打つ名人へつらうこともせず
心打つ言葉もらつた空の青

和子 玲子 知香子 博子 幸夫 森子 加津子 宏至 ミツ子 幸生 欣之 東雲 千里 年人 せつ子 巳代一 頂留子 弘直 度 一風 とみを ひさ乃 春蘭 半蔵門 ダン吉

いつまでも打てばひびいてくれる母
泣きべそを叱る雨なら打たれよう
打てばひびくどんぐりたちの塩加減
母さんに合せて釘を打ちかえる

むらくも川柳会

毛利

幸報

天気予報地図が知らせる旅支度
ちまちまと言えばちくちく倍返し
ちくちくと母の小言よりありがとう
化粧塩鮎が立派に焼き上り
日焼け止め惜しまずつけてする化粧
地図の外出たい私の旅心
ちんどん屋化粧の所作も笑われる
元氣よく話す口調もしつかりと
肩寄せて仲良しグループポーズとる
肩凝りに貼って貼られる湿布薬
不景気に五十路超えれば肩たたき
肩掛けで背負う子供は成長し
肩張って老いに鞭打ち趣味の道
誘われて行楽日和ボタン見に行
行楽客こつたがえしの桜土手
五月晴れ行楽楽しむ自然の美
新緑に包まれ楽しむ行楽日
出雲弁行楽客の中に聞く

富柳会

池

森子報

美人には聞きわけがいい重い腰
もう誰も写してくれぬ僕の顔
あじさいの心変わりも愛だろ

きよみ
柳伸
弥生
ますみ

幸報

恵勇
鐘造
アキ

重い日も軽い日もあるハイヒール
少子化の肩へずつしりくる介護
今が旬気楽とんぼで翔んでます
あじさいが見頃で逢いたくなつてくる
盃は昔話が大好きで
父の日は平凡でよし花ごよみ
子の心写しとれずに迷う母
沸点の湯気の向こうに夜叉菩薩
母の日に顔も知らない母想う
デフォルメの中で踊っている写楽
乳房燃ゆ鬼より青い火の中で
太道具小道具弄めいている奈落
汗かくも日の目を見ない道具方
完熟のトマト妬まし青リンゴ
王様のとても便利な道具なり
まごころは介護で分る母の世話
一本の夢引き絞るさあ北へ
借景の歩幅を叱る母の海
一人娘出来て家訓をかきかえる
心まで道具にしては理に背く
本心は見せてもらったリトマス紙
痛さより思い出残る傷の跡
アナログのフィルムが語る貧しい日
一泊の前科で届く御案内
あるなしの風にたわむれ柳の芽
夢写すわが性写す万華鏡
一言の語尾から風向きが変わる

花梢
浩子
冬虹
扶美代
昭水
洋介
和代
紅紫朗
深雪
大八
吞舟
一夫
誠
ひろこ
東雲
アキラ
年人
かなこ
巳代一
信子
宏至
和子
みきお
春蘭
欣之
森子

岩美川柳会

石谷美恵子報

魚河岸のセリ子の喉に負けている

忠良

山彦の応え夕陽が美しい
調子よく見えているけど犬と猿
朝晩の薬で調子取っている
捨てかねるいのちそのまま明日へ向く
欠点をそのまま言って嫌われる
男より長寿だからという調子
調子には乗れぬが寄付はしてあげる
楽しさも幸せもあり喉満たす
いつ見ても調子いい奴無一文
絶対調子炎天下の黄の後を継ぐ
借金もそのまま店の金を継ぐ
喉の奥別人がいてよくしゃべる
ご期待に応え逆立ちおみせする
生臭い風に応えて誰か来る
七夕に抱く想いは続いている
謀反抱き七月の海のないでいる
驚に應えて梅が実を結ぶ
調子がとれぬ借りた車が兎とび
真実も嘘も調子にのつてくる
船底を叩き応えを待つて打つ
七人の敵より怖いのは妻だ
そのままだにきぬ気がする千鳥足
調子づく夫の足踏踏みだる
七転び八起きをしたも芽が出ない
調子よく合つたためしのない二人
ご期待に応える名句まだ詠めぬ
初七日へ独りの仏間静か過ぎ
お小言は喉にしまつて丸くすむ
どちらにも応えたいのに身は一つ

公乃
照子
雅女
一粹
圭一郎
はるお
睦子
多哥由
一夫
和歌子
かつみ
完司
一京
季芳
裕子
たぬ
よしえ
重忠
螢
静生
一瑠
芳光
大漁
蟹郎
希久代
孝男
喬水
節子
美恵子

倉吉川柳会

竹信

照彦報

ゴールまでたすき繫げぬ雪の道

極楽のゴールか寺の鐘が鳴る

爽やかな顔でゴールに待つ女

結婚記念日忘れて池で鮎を釣る

うどん屋の池に見事な錦鯉

六十年泳いでやっとこの街へ

徳利を提げれば信楽のタヌキ

犬かきで得意に泳ぐ僕である

月影まばら変装しても尾が出てる

ゴールした所にけしのお花咲く

ふと見れば泳ぎ忘れた蛙一匹

池の鯉指をすわせて日が暮れる

ふくらんで時を待ってるあやめ池

泳ぐことへたで窓際ふいている

犬掻きの人生古稀へ辿りつく

古里の川へ泳いで鮎は死ぬ

いつの日か白装束で永久の旅

泳がされてるとは知らずはまる麗

忘命へ必死に泳ぐ河渡り

世知辛い世相泳いで八十路すぎ

度肝抜く変装一度してみたい

シラを切り赤絨緞を踏む詐欺師

我が余生棄たずさえゴールイン

デイトには変装をして来る彼女

蓮池はやがて浄土へつづく道

素顔です仮面取れとは失礼な

御先祖に恥じぬゴールのテープ切る

賀寿恵

螢

睦子

季芳

よしえ

完司

石花菜

一夫

(西)喜美子

和歌子

十三男

重忠

龍枝

え

和枝

かつみ

康子

日出子

小生

志郎

(前)喜美子

次男

和子

泰輔

幸子

悠子

秋草

裸婦像に泳ぐ男の瞳の動き
人生のゴールは蟹気様だろう

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

雄々
照彦

男心奪いし髪も白くなり
ブーム去りテーマパークも夢のあと

翔んでみたが妻の視界にいらしい
打ち明けて母の翼があたいたかい

バランスのとれた鮎をかく昼寝
初孫に全ての視界奪われる

目と耳は老いても口はおとろえず
ブームだと言えどとびつくあまい客

鉛と鞭バランスうまくとれなくて
はんやりと充電してる休耕田

春うららはんやり駅を乗り過る
登りつめたトップの椅子で知る孤独

ブーム呼び笑い止まり思い知らされる
トシとったあしんみり思い知らされる

同じ日にネクタイ黒と白をつけ
近所姑おかげで打たれ強くなり

花まるの人生なんて夢の夢
年金の暮らしに縁のないブーム

はんやりと過ごせる時間有難い
哲学書睡眠剤を飲んで読み

無印は良品ときめ生きている
旅がえり茶漬が家に落ちつかず

古い師視界ゼロ程先を視る
吹き寄せてニセアカシアの花衣

いつの世も円滑でない嫁姑

春江

知佐子

美代子

民子

明

八寿子

(増)道子

宏至

ミツ子

君江

(馬)宏

春子

一風

幸枝

隆盛

晴美

俊子

恭一

奈良司

友甫

正純

一道

(本)たえこ

(赤)妙子

ますみ

踏み台に立つ感激の金メダル
年金の不安はんやりしてられぬ
酒一合やと視界が見えてくる
五月鯉視界よろしく泳いでる

横浜おおば川柳会

清水

潮華報

個性派と言われ役には縁遠い
脈々と味一筋に今を生きて

生真面目な夫に妻が飽きてくる
どつぷりと個性に浸る絵画展

ブランドで固め個性が光らない
枠はずし子はとりどりの色に咲く

こたわりを持つて生きてるお人柄
団欒に醸す個性のハーモニー

すばらしい個性が生んだあのシチュート
甘い方尼らそれぞれに個性見せ

持ち前の明るさだけで他を押し
原石のままの個性が孫に行き

頑固さも個性になって共に老い
褒められた気にさせられちゃった個人的

ユニークな子供に親が育てられ
ほほどの個性世間を丸く住み

離婚した親に代って孫の世話
補聴器が高価な割に効果ない

ひと目ばれ妻の浪費に泣かされる
買った株未だ塩漬けで居る誤算

小遣いにするはずだった預金利子
見くびった相手が見せる底力

古希近く晩成説に赤ランブ

トシエ
まさこ
いつふみ
義明

達也

多留

政勝

良子

為佐子

純子

道子

絹子

徳三

早智

今日子

サト子

かづ子

鈴美

和可

雅子

十三子

三郎

笑子

ただお

亜希子

八重子

裕峰

出て行けと言つて出て行くはめになり
おたがいに見込み違ひが長続き
髪面で泣かせて以来近寄らず
こんどこそ首を切るぞとへばゴルフ
親友も二度目の無心縁を切る
子の個性認め背中を押してやる

翠洋会(吟行)

尚士報

喜寿祝うあと二十年がなばつて

二十周年句会回顧の祝い酒

二十二十年二十歳の孫を迎えたし

二十年掛けて育てて逃げられる

腹式呼吸まだ二十年生きるやも

二十歳の娘の春をラップする

孫はたちめつきり他人めいてくる

二十時は主婦を解放する時間

二十年若がるのつて悪くない

還暦のはたち三人分の意気

デパートで二十一円支払つた

翠洋会枝葉も繁る二十年

ゴール決め共に抱き合う選手権

五年目の喜び癌と握手する

喜びが重なり組板おどりだし

喜びが続く財布の底抜ける

つれあいはなかなか喜ばぬ男

幸せの木狗のうちなわ福もろた

阿波の木偶小指を立ててはく誘う

想い出の同じ渦巻く千畳敷き

観光船乗つて見たいな渦の道

街湖

千恵子

あらた

美柳士

ふみ

潮華

武庫坊

正雄

千歩

日の出

さと美

昭

希久子

蕉子

真理子

伽羅

叡子

舞夢

尚士

千梢

楓楽

義

東雲

孝一

会美

絹子

渦潮の痛罵を浴びて湧くファイト

渦の道わたしを無我にしてくれる

うず潮にもまれもまれて鯛旨し

人形館首乱舞する深夜二時

憂さみんな渦に吞ませて終る旅

文楽の郷よしこの音で育ち

提灯を揺らす風あり阿波の句座

ぬけがらのお七に逢えた阿波の里

裸島渦にも夏と冬があり

堺川柳会

河内

月子報

軽々と名刺も職も替えてゆき

しあわせを炊き上げました栗ごはん

いざという時はあなたがいてくれる

七色の組み紐厄の娘に贈る

軽々と嘘の話に溶けてゆく

安心を売つた生保が消えていく

シアライフなるべく軽くシンプルに

転ぶのはきつと財布の軽いせい

軽く聞く本音はとうに見抜いてる

しんみりと啄木のうた繰り返す

指切りは遊びどころでしたつもり

心配の種をばら撒く癖がある

昨日今日明日もごはん食べられる

お別れに軽いよしんをしてあげる

自惚れてだんだん軽くなるわたし

押し売りをやんわり返す軽い嘘

振り向けば見ていてくれる彼がいる

軽口を開き流せない律義者

さだを

志華子

春

恭昌

富子

澄子

みつ子

保子

薫風

春蘭

扶美代

みつこ

りつえ

篤子

敏子

半銭

小雪

五月

文

千代

アキ

冬虹

梓

伽羅

日の出

舞夢

玄也

幸せだあたしなども軽い嘘

しあわせは玉子を茹でて食っている

頭打ち初めて判る親の恩

安心はただじゃないぞと有事法

軽口へ内緒ばなしが波を立て

酒の味戻つて病後出る笑顔

失敗はたんとしたからくじけない

白い花つた一夜を狂い咲く

家計簿と老後はすべて妻まかせ

安心をしたたら洪茶が欲しくなり

かしらにはなれぬが尻尾にはなれる

雑音も軽くないしておつきあい

サークル檸檬

小林

一夫報

負けている方が大きな器かも

どなたにも見てはしくないデスマスク

地球絞ると黒い涙がワツと出る

サッカーが日本の位置変えそうだ

娘三人嫁がせ父の細い脛

コビーとは言わぬ本物とも言わぬ

絞られたような顔して帰宅する

休肝日夜の長さを感じ知る

生きてる老いも病んでも華として

言い過ぎる予感へチャック締めておく

焦点を絞れば周りはフットボール

誰よりも知恵を絞っているピエロ

鉛筆と消しゴムの仲無二の友

論吉つっあんの人気に誰もかなわない

夕焼け雲でしぼったワインなどいかが

哲平

朋月

龍三

忠敬

惠勇

五月

かりん

泰子

さくら

つづや

鐘造

洞庵

あずき

正坊

みつ子

いわゑ

澄子

房子

哲夫

遠野

智恵子

靖巳

光久

保子

希久子

楓楽

義子

第56回 青森県川柳大会

― 特別選者として河内天笑主幹 ―

東奥日報社主催の「第56回青森県川柳大会」の特別選者に天笑主幹が招かれ「ユーモア川柳」と題して講演の予定。

日時 8月25日(日) 午前10時から

会場 青森市文化会館5階 大会議室

会費 2千円(記念品、昼食代含む)

特別選「指」(1人2句) 河内 天笑 選

宿題と選者(各題2句・当日受付)

「網」 波多野五楽庵 選

「意外」 加藤 彩人 選

「担ぐ」 岡本かくら 選

「うっかり」 千田 和美 選

「草」 西山 金悦 選

「錆び」 杉野 草平 選

席題 当日4題出題。1人各2句。選者は

北野岸柳・佐藤遊子・梅村北仙・吉

田州花・高田寄生木・八木田幸子・

野沢省悟・櫛引八千代の共選。

賞 総合1位に県知事賞、2位に県議

議長賞他

懇親会 大会終了後、河内天笑氏を囲んで開

催される。

会費 2千円。多数御参加下さい。

第14回兵庫のまつり・ふれあいの祭典 川柳祭開催要項

趣 旨 全国から広く川柳を募集し、優秀な作品の発表、表彰、講評などにより、川柳の普及と創作活動の活発化、レベルの向上を図り、文化活動への参加意欲の向上をめざして開催します。

日時 平成14年12月1日(日)/10:30~16:30

会場 伊丹市アイフォニックホール(伊丹市宮ノ前1丁目3-30 TEL 0727-80-2110)

主催 ふれあいの祭典実行委員会・川柳祭伊丹市実行委員会・兵庫県他

後援 伊丹市議会・伊丹市文化振興財団・いたみ川柳会・ふあうすと川柳社 他

開場 10時30分 開会 12時

題と選者(各題1句・未発表作品)

「池」 泉 比呂史・村山勇太郎・前川千津子・武田 森茂・矢沢 和女
「酒」 小松原爽介・赤井 花城・福島 直球・春城武庫坊・小山 紀乃
「空」 遠山 可住・平山 繁夫・ト部 晴美・真殿舎句里・山中 忠

応募料 1,000円(郵便小為替・発表誌呈)

応募方法 所定用紙、または400字詰原稿用紙・右半分に作品。左半分に郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・性別・電話番号・大会出欠を記入。

応募締切 平成14年9月6日(金)

賞 文部科学大臣奨励賞・ふれあいの祭典実行委員会代表会長賞・兵庫県知事賞 他
〒664-8503 伊丹市千僧1-1 TEL 0727-84-8043 FAX 0727-84-8048
伊丹市経済文化部 市民文化振興課 川柳祭伊丹市実行委員会

〈ジュニアの部〉~~~~~

応募資格 原則として兵庫県内の中学生・高校生とします。

題と選者 「白」(3名共選) 奥田みつ子・土居喜久栄・黒嶋 海童

応募料 無 料

応募方法 1人2句以内、所定の用紙を使用し、学校を通じて応募して下さい。

賞 一般の部と同じ

応募締切 平成14年9月6日(金)

〈当日投句の部〉(各題2句・出席者のみ)~~~~~

題と選者 「コンビ」延寿庵野翳 「音」濱邊 淳 「飛ぶ」長島 敏子

出 句 料 1,000円 出句締切 12時

柳界展望

★第26回鳥取県川柳大会は、5月26日米子コンベンションセンターで、190名の参加を得て開催された。当日の本社関係受賞者は次のとおり。

〈鳥取県議会議長賞〉

★第3回文学ルート川柳は、3月末に締切られ、本社西原艶子さん(鳥取県)が奨励賞を受賞。11月に表彰式が行われる。

〔自由〕(高知市募集)

荒波に揉まれて炎えてきた自由

もぎ取れる位置から熟れてきた果実 中原 諷人
 〈新日本海新聞社賞〉
 橋いくつ越えて狂いにきた祭 八木 千代
 〈鳥取県川柳作家協会会長賞〉
 大柄な妻が酸素になつて

お願い

川柳塔社では川柳を広め、愛好者を増やすため、仲間づくりに取り組んでいます。

つきましては、今後の活動の参考にしたいと思しますので、皆様の経験談、ご意見を聞かせていただきますようお願いいたします。文書、電話どちらでも結構です。

川柳塔事務所・企画事業部宛

くれ 黒田くに子

▽出版版△

■岬川柳会(八十田洞庵会長)では、十周年記念句集を出版。会員とジュニア作品を掲載。B6判128頁。

■薫風名誉主幹選『なにわ柳壇 同窓会抄』(A5判76頁)が出版され、7月11日リーガロイヤルホテルでなにわ柳壇同窓会が催された。(詳細は98頁)

▽人事往來△

■薫風名誉主幹は、路郎・葭乃比翼句碑建立一周年記念行事参加のため、7月7日尾道市行。

■薫風名誉主幹、みつ子副主幹、楓楽・たもつ副理事長ほか10名は、7月14日の川柳塔みちのく15周年記念句会出席のため13日から15日まで弘前市行。

新同人紹介

三み

島^{しま} 松^{しょう} 丘^{かみ}
 一町紅・与根一推薦

▼計報▲

■正本水客氏(相談役・大阪市)は、6月29日逝去され、本人の遺志により近親者のみで葬儀が行われた。享年96歳。

▽常任理事会△

■8月5日(月) 13時から
 アイウィーナ大阪206号室

○同人部では同人名簿発行のため鋭意準備をすすめております。前回発行分(平成12年6月発行)の名簿に、変更・訂正がある場合は、事務所まで至急に申し出て下さい。

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城 北 川 柳 会	17日(土)午後1時から 涙・生きる・ドラマ・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川 柳 会 梨 花	17日(土)午後1時から 戦争・布・客・おやつ 自由吟	鳥取市勤労者総合福祉センター1F会議室(鳥取駅南) 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205 宮木方 坂田和歌子
岸 和 田 川 柳 会	17日(土)午後1時半から 都合・弟子・当用・情け	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 ねやがわ	18日(日)正午から 活発・洗う・栄養・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	18日(日)午後1時半から 昼休み・ばれる・炎える 自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川 柳 会	19日(月)午後1時から ひそひそ・丸・番号・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯 の 花	23日(金)正午から 脱線・うかうか・鉦 積乱雲・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
川柳クラブ わたの花	23日(金)午前10時から シンプル・隠す・うるさい 脇役	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 同 好 会	24日(土)午後6時から まつり・遙か・残る・駅	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 川 柳 会	25日(日)午後1時から ひょっこり・掃除・消える 「スナック」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	25日(日)午後1時から 破・変り者・リストラ	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京 都 塔 の 会	26日(月)午後1時から 祖・いかが・土産	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川 柳 塔 みぞくち	26日(月)午後8時から 旅・西瓜・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南 大 阪 川 柳 会	28日(水)午後6時から 待望・葉・パス・摩擦	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

8 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	7月31日(水)午前10時から 第20回記念・夜市川柳大会	堺総合福祉会館5F (7月号P.56参照) 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 な ら	1日(木)午後1時から 飛び・テント・午後	船橋フロムワン (船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼 崎 いくしま	2日(金)午後1時から 波・仏・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富 柳 会	3日(土)午後1時から アドリブ・刻む・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	3日(土)午後1時から 田んぼ・アケビ・投げる	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	6日(火)午後1時半から 挑む・湧く・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス④番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
川 柳 塔 唐津支部	7日(水)午後1時半から 家・積む・西	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
川 柳 塔 打 吹	10日(土)午後1時から ブランド・堂々・毒	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 ま つ え	10日(土)午後1時半から 電車・橋・ひと言	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島松丘
川 柳 塔 みちのく	10日(土)午後4時から 蜚・叫ぶ・マドンナ	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
八尾市民 川 柳 会	11日(日)午後1時から チャンス・湧く・はかない 比較	山本コミュニティセンター内3F学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 わかやま	11日(日)午後1時から 八・募集・零れる・略図	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	12日(月)午後1時から 飢え・接近・祈り・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川 柳 同 好 会	13日(火)午後1時から 裸・真似・楽しい	豊中市立釜池公民館 阪急・モノレール釜池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎

編集後記

☆いよいよ二賞（路郎賞・

川柳塔賞）の応募月となつ

た。108・109頁を参照の上、

本誌最終水色の応募用紙を

使用、8月10日の締切厳守

でふるって応募して下さい。

この一年間の作品をふり返

って自選するのは、楽しい

作業だろうと、選者で応募

資格のない者にとつて、ち

よつぱりうらやましい。

☆今までのところ本誌では、

作品の差別用語について問

題が起きたことはない。こ

れは選者や作者が、各々自

覚を持って向き合つて下さ

っているからであらう。

☆「差別とは、差別によつ

てハンデイーを負うこと」

（毎日放送審議室報）で、多

くの人の耳目にふれるマス

コミ、特にテレビ、ラジオ

は、かなり神経質に対処し

ている。何気なく聞き流し

ている言葉でも、番組のあ

とでお詫びがあるのを時折

耳にする。

☆参考のために、汐文社の

「差別用語」を手近に置いて

いるが、マスコミ各社が発

表しているリストの中には、

「なんでこれが差別用語？」

と首をかしげるような言葉

が入っている。

☆古川柳など差別用語のオ

ンパレードだし、一昔前の

名作と言われる文芸作品に

も多く使われている。それ

らはニュースなどのように、

安易に別の言葉に置き替え

ることはできない。これに

よつて、名作が埋もれるこ

とのないようにと、願うば

かりである。

☆差別用語によつて人を傷

つけたり、不快な思いをさ

せることのない、パンチの

効いた佳句に会いたくて、

今日も柳誌を繰る。（ふ）

ひとこと

縦書き礼讃

書家の石川九楊さんは「人間は

風に背を向けて歩くのではなく、

風に向かって進みたがる。その方

が安定感があるからである。我々

が右から左へと縦書きをするよう

になったのもこれと同じ人間の精

神の力学が働いているからであ

る」と言われる。

たしかに、右から左へ書くこ

とで隠れたり汚れたりという不便

さはあるが、横書を左から右へ引

く力強さを感じる。

いま我國の、「読み書き」は、

欧米化の影響からか圧倒的に横書

きであるが、力は逃げ水のように

するだけである。その点縦書き

の方が、衝突と抵抗と摩擦を起こ

しながらも、書き手に緊張感と安

定感をもたらし。私たち縦書きの

川柳こそ、逆風をものともしない

心意気を存分に示すものである

う。（藤井規彦）

★いまの日本で女性の立ち

入れぬ場所がある。一つは

騒がせた大相撲本場所の土

俵、二つには大峰山、三つ

には大歌舞伎・文楽の舞台

ほかがある。

★二十数年前「男女雇用均

等法」が施行され、働く女

性の職種差別、賃金差をな

くし能力次第になった。と

はいえ未だほど遠い感があ

るのも事実。

★今回、「男女共同参画社

会基本法」なる法律に行政

は力を入れ、地域に「男女

共同参画センター」を設け

て働く女性のサポートをす

るべく専門のスタッフを整

えている。

★かつては、男性職場であ

った自衛隊、南極越冬隊、

建築業界などに女性専門技

師の進出をみる。一方女性

職場といわれた癒しの業界

に男性の進出を見て呼称も

改められている。

★私、カリカリの古い体制

の会社三十数年勤務して

きたので、男女の力関係は

つぶさにみてきたし、体験

してきた。最近新聞に「男

女共同参画」は、日本には

定着していないと記してい

た。対等な構成員として国、

公共団体、民間団体、企業

などの管理職の割合が低調

であるとの内容である。

★CMソングの、♪求めら

れてエ、捨てられてエ、も

うどうにでもしてエー♪。

男女ともども生き辛い世情

である。（よ）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（10月号）

地名

姓・雅号

きりとらせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



考 選 賞 二

紙 用 募 応

○印を入れてください。

路 郎 賞（川柳塔欄・同人）	川柳塔賞（水煙抄欄・誌友）

きりとりせん

地名

姓・雅号

月	月	月	月	月	月	月	月
頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁

◎下段に掲載月と掲載頁を記載のこと。

◎裏ページの要項を読んで応募してください。

応募要項

① 川柳塔欄・水煙抄欄に六カ月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成13年9月号から平成14年8月号までの自分の入選句から8句を選ぶ

路郎賞——同人は川柳塔欄から応募
川柳塔賞——誌友は水煙抄欄から応募

③ 8句と掲載月、掲載頁を楷書で書き、8月10日必着のこと

④ P 108・P 109を参照して下さい。

作品募集

川柳塔(8句) 河内天笑選
 水煙抄(8句) 奥田みつ子選
 愛染帖(3句) 波多野五葉庵選
 茴香の花(3句) 政岡日枝子選
 吟課題(3句) 「積む」 市丸晴翠選
 「西」 徳田ひろこ選
 初歩教室「黒」(3句) 吐田公一担当

10月号発表(8月15日締切)

11月号 課題吟「喋る」「煙」「窓」
 初歩教室「叩く」

本社8月句会

とき 8月7日(水) 午後5時半・6時半締切
 ところ アウィーナ大阪 4階
 天王寺区石ケ辻町19-12 電06・6772・1441
 地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分
 兼題 「リズム」 川上大輪選
 「本物」 長浜澄子選
 「析る」 宮崎シマ子選
 「冗談」 都倉求芽選
 「包む」 河内天笑選
 席題 1題 当日発表(各題2句以内)
 会費 1000円 投句料 500円

本社9月句会 9月6日(金)

兼題 「イメージ」「啖阿」「転ぶ」
 「錯覚」「広い」

夜市川柳募集

第3回「塩」 塩谷幸子選
 ハガキに3句 8月末締切
 投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2)愛染帖・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
 - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにご利用いたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)
 一年分 九千八百円(同)

二〇〇二年(平成十四年)八月一日発行

編集兼 発行人 河内権治

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好二丁目一〇一六
 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-6914番

振替〇〇九八〇一五―三三三六八番

第17回 国民文化祭・とっとり2002

夢フェスタとっとりーふるさとふれあい夢づくりー

川柳大会

10月26日(土) 10時30分出句締切

(入選発表・当日句・選評 10時30分～15時40分)

鹿野町立 鹿野小学校 体育館

題と選者(各題2句)

「果物」 木野 由紀子 選

「輝く」 新畑 ひろし 選

「静か」 荻原 柳 絮 選

第2次選者

吉岡 龍城・今川 乱魚

磯野いさむ・橋高 薫風・大野 風柳

文部科学大臣賞はか多数

交流会 10月26日(土) 16時～17時30分

国民宿舎 山紫苑(会費 4000円)

合同大会 10月27日(日) 10時～12時

(表彰式・記念講演会)

羽合町 ハワイアロホール

○事前投句(締切済)及び当日入選句作品集呈

○川柳大会昼食代と交流会参加者費用は当日申し受けます。

問い合わせ先

第17回 国民文化祭鳥取県実行委員会事務局

TEL 0857-2617857

FAX 0857-2618127

第17回 国民文化祭鹿野町実行委員会事務局

TEL 0857-8412299

FAX 0857-8412598

主催 文化庁・鳥取県・(社)日川協ほか

10周年記念 和歌山県川柳大会

と き 9月8日(日) 11時開場・13時開会

ところ 和歌山ビッグ愛 1F大ホール

和歌山市手平2-1-2

TEL 073-43515234

参加費 1500円(軽食・発表誌呈)

事前投句 「十」(2句・8月15日必着) 牛 尾 緑 良 選

当日出句 (各題2句・12時30分締切)

「手紙」 大 炭 曉 星 選

「福」 馬 場 明 子 選

「丸い」 川 上 大 輪 選

「流れる」 木 本 朱 夏 選

「組む」 森 中 恵 美 子 選

「回る」 橋 高 薫 風 選

賞 県知事賞・市長賞・全日本川柳協会会長賞他

☆事前投句料1000円(当日欠席の方、発表誌・送料含む)現金書留か定額小為替(郵便切手代用は不可)

☆事前投句は専用葉書または官製葉書に住所・名前(雅号)・当日参加か欠席・懇親宴出欠を記入

懇親宴 大会終了後 会費 3500円

投句先・お問い合わせ先

〒640-8482 和歌山市六十谷1-184-14 川上 大輪

TEL・FAX 073-46217229

主催 和歌山県川柳協会

主 催 和歌山県川柳協会

主 催 和歌山県川柳協会

主 催 和歌山県川柳協会

主 催 和歌山県川柳協会